

(表紙)

吉 貴 公
繼 豐 公
享保十一年

追 舊 記 雜 錄
卷六十三

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力平
享保十一年 正月十一日

松平伊賀守
忠周判

松平左近將監
乘邑判

水野和泉守
忠之判

(島津吉盛)
松平上總介殿

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力平
享保十一年 正月十一日

安藤對馬守
信賢判

松平上總介殿

繼豐公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力平
享保十一年 正月十一日

松平伊賀守
忠周判

松平左近將監
乘邑判

水野和泉守
忠之判

(島津繼忠)
松平大隅守殿

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力半
享保十一年 正月十一日
安藤對馬守
信賢判

松平大隅守殿

1833

繼豐公御譜中

正文在龍洞院

(島津繼豐)
(花押 No5)

高百拾七石七斗四升五合九夕三才

右 總州樣就其院御再建、今度爲寺領所寄附之也、全可

領知之狀如件、

享保十一年正月廿六日

龍洞院

1834

正文在龍洞院

高百拾七斛七斗四升五合九夕三才

日州高崎前田村之内

日州小林北西方村之内

隅州清水山之路村之内

隅州清水郡田村之内

薩州鹿兒嶋吉野村之内

右

前中將吉貴公就其院御再建、爲寺領今度

大守繼豐公被寄附之、御寄附狀被成下早、全令所務御祈

禱無怠慢可抽丹懶者也、仍如件、

享保十一年丙午正月廿六日

(鹽字島) 彈正

久基判

(伊東院) 藏人

久矩判

(島津) 全

久武判

(島津) 内膳

久兵判

(島津) 中務

久貫判

龍洞院

1835

繼豐公御譜中

正文在龍洞院

覺

一高拾三斛壹斗貳升五合壹夕

小林北西方村之内脇屋敷

名寄帳壹册

一高四斛六斗貳升八夕三才

鹿兒嶋吉野之内溜池大山野

名寄帳壹册

右素高百拾七斛七斗四升五合九夕三才御附付、今日(付脱)

御袖判頂戴被仰付、御家老中連名副書相渡り、右高之内此節右通名寄帳相渡り間、可有取納り、殘百石之儀老、高崎・清水兩所に御新田被仰付置り間、後年御竿相究支配相濟り節、名寄帳可相渡り間、左様可承置り、以上、

享保十一年正月廿六日 全

龍洞院

吉貴公御譜中

正文在文庫

御念入られり御事と御満そくこおほしめしり、御てまへさまも御無事の御事ニ御座被成、めて度思しめし御禮仰上られ、御満そくさ何もよく申せとの御事ニ御さり、めてかしく、

正月十八日之文下されり、まつく

公方様

(家書) 大納言様御機嫌よくならせられ

一位様御機嫌よく成らせられま、御心安おほしめし被成(候脱)

へくり、さてハ去冬十二日寒中御尋ましの御事迄ニ、御もく録之通御おく方へ參らせられりへハ、有かたく思しめしなされりよし、御てまへさまへもかたしけなく思しめし被成りよしにて、御禮仰上られり、文のやうひろう致しまいらせりへは、めてたくかしく、

朱力平 享保十一年

まつ平

御返事
上總之介さま

人々御中

いは倉

梅その

さくらい

1837 吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御てまへさま御無事の御事ニ御さなされ、めてたく思しめしり、何もよく心えりて申せとの御事ニ御さり、めてたくかしく、

正月十八日の御日付にて文下されり、まつく

一位様御機嫌よくならせられ御めてたく思召被成りよ

し、さては去冬十八日

(正御家照) 前攝政様 准后

繼豊公御譜中

正文在文庫

宣下あらせられ、同廿四日御落飾被遊り御事、御目出度
思召被成りよし、右之御しう義おほせ上られり、御ふミ
のやう披露いたしまいらせりへハ御満足ニ思召り、誠ニ
幾久しくといわる思しめし、何もよく申せとの御事ニ御
座り、めてたくかしく、

朱カキ
享保十一年

まつ平 御返事
上總之介さま
梅 園
梅 園
さくらい

右

御祝義仰上られ、御満足さ御念入せられり御事ニ思
しめしり、よく心得りて申せとの御事ニ御さり、め
てたくかしく、

正月十八日の御日付にて御ふミのやう、まつく

一位様御機嫌よく成せられ、御めてたくおほしめし被成
りよし、さては去冬十八日

前攝政様 准后

宣下あらせられ、同廿四日ニ御落飾被遊り御事、御めて

全上

たくおほしめしなされりよし、右之御しう義仰上られ、
御文のやう御目録之通
一位様へ御あけなされ、ひろふ致しまいらせりへは、御
満足ニ思しめしり、幾久しくと祝入思召しり、めてたく
かしく、

朱カキ
享保十一年

松平 大隅守さま
御返事人々御中
梅 その
さくらい

右

御めてたさのミまいらせられり様といわる入まいら
せり、何もよく申せとの御事ニ御座り、なをく御手
まへさまも御無事の御事ニ御座被成、めてたくそ
んしまいらせり、めてたくかしく、

一位様より申せとの御事ニ御座り、まつく

一位様御機嫌よく成らせられりま、御心易おほしめし
被成へくり、此間は

前攝政様 准后

宣下あらせられり、御祝儀と御座りて御目録之通

一様へ御あけなされ、披露致しまいらせり得は、御満
足さなた方も御いわる遊ハし、此御目錄之とをり御て
まへさまへまいらせられり御事ニ御さり、誠ニ幾久しく、
めてたくかしく、

朱力年
享保十一年

方

松平

大隅守さま

人、御中

いは倉

梅園

さくらら

1840
繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、如承改年之慶賀珍重り、

公方様 大納言様益御勇健被成御座、年始之御規式可相
濟と目出度被存旨尤り、猶以御機嫌被相伺之り、弥御安
全御儀候之間可御心安り、隨り御樽肴被獻之り、各申談
遂披露り處一段之御仕合り、恐々謹言、

朱力年
享保十一年 二月七日

松平左近將監

乘呂判

松平大隅守殿

1841
全上

御札令披見り、如承改年之慶賀珍重り、
公方様 大納言様益御勇健被成御座、年始御規式可相濟
と目出度被存由得其意り、猶以御機嫌被相伺之り、弥御
安全御儀候之間可御心易り、隨り御樽肴被獻之り、遂披露
り處一段之御仕合り、恐々謹言、

朱力年
享保十一年 二月七日

安藤對馬守

信賢判

松平大隅守殿

1842
全上

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將
又去秋被下御暇、其上御馬并白銀・巻物拜領之、重疊難
有之由得其意り、國許到着付り、爲御禮以町田宇右衛門
如目錄被獻之り、紙面之趣令承知り、恐々謹言、

朱力年
享保十一年 二月十五日

戸田山城守

忠眞判

松平大隅守殿

1843
繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又去秋被下御暇、其上御馬并白銀・卷物拜領之、重疊難有由得其意外、國元に到着付由、爲御禮以町田宇右衛門如目録被獻之外、右之趣遂披露外處

御前被召出之、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

朱力キ 享保十一年 二月十八日

松平伊賀守

忠周判

松平左近將監

乘邑判

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

1844

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又去秋被下御暇、其上御馬并白銀・卷物拜領之、重疊難有由得其意外、國許到着付由、爲御禮以町田宇右衛門如目録被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ 享保十一年 二月十八日

安藤對馬守

信賢判

1845

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又舊臘妻女歲暮之御祝儀拜領之、難有由得其意外、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

朱力キ 享保十一年 三月三日

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

1846

繼豐公御譜中

正文在文庫

貴翰拜見仕外、御領内薩摩國市來村と申所之沖江、去月

廿七日來朝南京出唐船一艘、人數五拾四人乘組漂着卸碇

外付、如例番船等可被附置旨被申越外間、日和次第鞏固

御差添當表江送可被遣之由、猶又御家來衆方委曲可被御

申聞之段被仰下、御紙上之趣承知仕、被入御念御事奉存

外、恐惶謹言、

朱力キ 享保十一年 三月十日

日下部丹波守

博貞判

御札令披見外、

全一

松 大隅守様 貴報

繼尊公御譜中

正文在文庫

請取申金銀之事

米高三千六百四拾七石五斗

金三千三百三拾四兩三分 銀六匁四分

後藤包
常是

右者爲上米壹萬石ニ付百石宛、當午春御張紙直段三拾五石ニ付三拾貳兩之積を以、高七拾貳萬九千五百石分當春半分上納、仍如件、

享保十一年午三月十八日

黒澤直右衛門(御令不行)(高)○

深津八左衛門(同)(高)忠○

戸田忠兵衛(同)(高)忠○

山田治右衛門(同)(高)忠○

松平大隅守殿

役人中

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山 御靈屋御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣各申談及言上外、恐々謹言、

享保十一年 三月十九日

水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山 御靈屋御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣各申談及言上外、恐々謹言、

享保十一年 三月十九日

水野和泉守 忠之判

松平上總介殿

在包紙
松平上總介殿

水野和泉守

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

朱力平

享保十一年 四月二日

松平伊賀守

忠周判

松平上總介殿

有包紙

松平上總介殿

松平伊賀守

1851 全御譜中

同年四月四日、日州佐土原城主島津但馬守 忠就來_(忠雅)於薩

府、十五日至大磯館、吉貴見焉而饗_(忠就來于薩府事 詳于靈豐公御譜中)之、

1852 靈豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

朱力平

享保十一年 四月二日

松平伊賀守

忠周判

松平大隅守殿

1853 繼豐公御譜中

享保十一年四月四日、日州佐土原城主島津但馬守忠就訪_(二)

宗家、來薩府、仍橋居客屋、翌五忠就登_(レ)城呈_(二)進

太刀・銀馬代繼豐取_(二)賜于對面所、同九日招_(二)忠就於城

中_(一)、味之爲_(二)饗應、與_(二)刀一腰_(一)、治丁備龍盛景、代全十三枚或招_(二)大磯尾畔假

館_(一)慰_(レ)之、留滯數日之際參詣于寺院、同二十三日獲_(二)薩

府、路詣于正八幡宮・霧島宮、而還_(二)佐土原、

1854 靈豐公御譜中

扣正文在家座老

口上覽

嶋津但馬守先祖以來私國元_(レ)用事有之節者、時々不及奉

伺罷越外、但馬守事_(レ)及向後用事之砌者、前々之通參_(レ)様

仕度旨、去ル卯年相伺_(レ)處、先例之通可仕由被 仰渡_(レ)、

依之今度但馬守儀、私國元_(レ)差越用事相達申外、此段申

上外、以上、

朱力平

享保十一年 四月廿六日

松平大隅守

繼豐公御譜中

正文有文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲水野和泉守可述也、

朱カキ
享保十一年 五月三日



薩摩少將殿

全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外處一段之御仕合候、恐々謹言、

朱カキ
享保十一年 五月三日

安藤對馬守
信賢判

松平大隅守殿

吉貴公御譜中

正文有文庫

總州様御躰居被遊外節、爲御隱居料御高五萬石可被進旨被仰進外得共、壹萬石被進、御躰居御方に被召仕外御役人・小役人御役料米并足輕・人足御扶持等者、表方より被下度之旨

總州様より被仰進外處、何とそ五萬石被進度被 思召外得共、右通段々被仰進儀外故、其上者難被仰外得共、貳萬石程者御躰居料ニ被遊度之旨、於江戸御躰居之節從太守様被仰上外、然共壹萬石にて御隱居料被相濟思召ニ而候得共、押而被 仰進事外得者、此上御斷被仰外儀及如何被思召外付而、五千石

總州様思召より者可被相重外條、都合壹萬五千石被進度之旨御返答被遊爲被相究事外、最前者御役人・小役人・足輕・人足迄御役料・御扶持米等表方被下外得共、御隱居料五千石相重外付而、去々年より御躰居御方御役料・役料米并御扶持米等迄可被下と 總州様御意ニ而當分御躰居御方被下事外、右通壹萬五千石之内より被下事外得共、漸々御買入高及有之、御續方旁付而御不自由之儀少々無之外、表方に者纒とて御高相重外得者、未々之爲ニ及罷成事外故、五千石之御高者、表方に御返シ可被進外、左外而當秋之所務米迄者、磯御方に取納被仰付、來秋之取納より表方に相納外様可被成外、若又先様御不由之儀及有之外ハ、其節者可被仰進外、幾度被仰上外而表御斷被仰進思召之段被聞召外付、此上ハ 總州様思召之通被遊、以後とも少々も御不自由之儀及有之

外節ハ、何時ニモ被仰進ハ様と被仰上ハ、

右之次第ニモ、來秋より五千石之御高老表方ハ御返シ、壹萬石ニモ御續被遊筈之事ハ、御續方を被相欠乍御不自由五千石表方ハ御返被遊御事ニモ老曾無之ハ、

總州様御續方御不足無之付ハ、思召を以右之通被相返御事ハ、若末々ニモ取違申儀及可有之外間、此段得と承知可仕ハ、

右可致通達ハ、以上、

朱力キ
字保十一年 五月

令一

正文中文庫

總州様御意之趣有之、比志嶋隼人殿・(箱形)義岡右京殿兩人(久)

ニモ御城代御家老ハ中間セ

太守様ハ申上ハ様ニト午五月廿二日御家老座ニモ承知

仕ハ趣左之通ハ、

總州様御意居被遊ハ節、御隱居料之儀從

太守様被仰上ハ者、

(元久)寬陽院様御隱居之節之通、御高五萬石爲御隱居料可被進

旨

太守様御意ニモハ、

總州様より被仰進ハ者、壹萬石御隱居料被進、御隱居御方ハ被召仕ハ御役人・小役人、御役料・役料米并足輕・人足御扶持等者、表方ハ被下度之旨被仰進ハ處、何トそ

五萬石被進度被 思召ハ得共、右通段々被仰進事ハ、其上者難被仰進ハ得共、貳萬石程者御隱居料被遊度之旨、於江戸御隱居之節

太守様より爲被仰上事ハ、然共壹萬石ニモ御隱居料者被相濟 思召ニモハ得共、押ハ被仰進事ハ、此上御斷被仰進ハ儀及如何被 思召ハ付、五千石

總州様思召より可被相重ハ條、都合壹萬五千石被進度之旨被仰進、壹萬五千石爲被究事ハ、最前者御役人・小役人并足輕・人足類之御役料・御扶持米等、表方ハ被下置ハ得共、壹萬五千石ニモ御隱居御方ハ被下ハ者被相續積ハ故、御下向以後御隱居御方より可被下ト被仰進、御隱居御方ハ御扶持米等今以被下事ハ、然者右通給分等被下ハ者、壹萬石にて被相續積ハ得者、表方ハ者總トても御高相重ハ得者、末々之爲ニモ罷成事ハ故五千石被相返ハ、左ハ當秋之所務米者、御隱居御方ハ納リ外様被仰付、來年より表方ハ御返シ可被成ハ、右之通ハ

及何そ御支無之、若又先様御支之儀も有之ハ、其節若何時こゝ及御無心可被仰進、此儀御挨拶、迄こ被仰達儀こゝ無之、

太守様より此内之通こゝ御隠居御方に被差置、様こと、強ゝ被仰遣、儀若必御無用可被成、幾度被仰遣、及右之通之 思召、様、此儀も分ケ申聞、せ、様こと

總州様御意、右之段、いづれも承知仕、

太守様、申上、様こと被仰出、通、兩人より承知仕、右之趣將監殿より

太守様、被申上、處、兩人被召出、御直可被聞、召上、旨被仰出、付、準人殿・右京殿 御前、被召出、 思召之趣被聞、召上、段、被仰進、旨委細御承知被成、右通之 思召一、被聞、召違、兼、御續、方、何、様、可有、御座、哉、御不、自由之儀、ハ、無之、哉、と、爲、被、思、召、御、事、ハ、處、右、通、之 思、召、被、聞、召上、此、上、何、角、と、被、仰、上、ハ、儀、若、却、也 思、召、も、如、何、ハ、間、

總州様御意次第可被遊、尤重、少、事、こゝも、御、不、如、意、之、儀、及、有、之、節、若、幾、度、及、被、仰、進、ハ、様、有、之、度、ハ、準、人・右、京、こゝも、其、通、相、心、得、罷、居、ハ、様、と、御、直、御、意、候、且、亦、於、殿、殿、續、方、之、儀、付、御、沙、汰、之、趣、委、細、御、承、知、被、成、ハ、由、を、及、被、仰、上、ハ、右、之、通、御、受、兩、人、に、被、仰、聞、せ、ハ、其、節、將、監・（久松）内膳・（久松）藏人・

内匠御座末ニ相詰申、

享保十一年

全上

正文在文庫

御記録奉行に

總州様御隠居料之内、來秋、五、千、石、表、方、に、可、被、相、返、旨、午、五、月、廿、二、日、比、志、島、準、人、殿・義、岡、右、京、殿、兩、人、を、以、被、仰、出、趣、有、之、於、御、家、老、座 御、城、代、御、家、老、承、知、仕

太守様達 貴聞、段、被、仰、出、趣、被、聞、召、上

總州様思召次第可被遊、旨御返答被仰上、來秋、ハ、右、五、千、石、表、方、に、受、取、取、納、有、之、筈、ハ、然、若、御、隠、居、被、遊、ハ、節、壹、萬、五、千、石、爲、御、隠、居、料、被、進、旨、準、人、殿、宛、所、こゝの、御、袖、判、被、渡、置、右、爲、御、記、録、所、に、及、被、渡、置、ハ、右、之、次、第、こゝの、五、千、石、被、相、返、ハ、也、御、袖、判、若、被、相、直、不、及、本、之、通、壹、萬、五、千、石、の、被、差、置、事、ハ、間、五、千、石、來、秋、ハ、相、減、筈、之、譯、若、別、紙、之、趣、を、以、書、留、置、御、袖、判、寫、と、一、所、仕、置、向、年、紛、無、之、様、可、致、置、ハ、依、之、

總州様、被、仰、進、趣、且、又、太守様御返答被遊、儀、共、別、紙、寫、相、渡、ハ、右、付、の、通、達、有、之、

外、書付是又別紙渡置り、

朱カキ
享保十一年 六月
(島津久武)
全

1860

繼豐公御譜中

正文在文庫

貴翰拜見仕り、當年三月廿八日、人數九人乗組り小船壹艘、御領分琉球國之内、永良部嶋と申所漂着致破船り付、中山王城下召寄、漂來之次第出所等被相尋り處、言語又字彖不相通り得共、朝鮮と申儀相聞、様躰々朝鮮人と相見り付、木屋相調差置諸事先例之通被申付、大清江可送遣之旨中山王方被申越り由、依之被仰下御紙上之趣承知仕り、恐惶謹言、

朱カキ
享保十一年 六月廿七日
(長崎奉行)
日下部丹波守
博貞判

松 大隅守様
貴報

1861

吉貴公御譜中

正文在文庫

御てまへさまも御ふしの御事ニ御座被成、めてたく思しめしり、なをく御機けん御伺なされ、御念

入られり御事に思しめしり、何もよく申せとの御事

ニ御さり、めてかしく、

御文下されり、殊之外あつさニ御さりへとも、まつく一位様御機嫌よく成らせられ、暑氣之御障もあらせられりハすり、御心易思しめし被成りへくり、御機けん御窺と御さりて、御文のやう殊に御もく録之通御あけ被成、披露いたしまいらせりへハ、數く御満足ニ思しめしり、めてたくかしく、

朱カキ
享保十一年

まつ平
上總介さま
御返事
岩 倉
梅 その
人々御中
さくらい

1862

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、就酷暑之節
公方様 大納言様御機嫌被相伺之り、御安全御儀外間可御心易り、隨り干椎茸一箱被獻之り、遂披露り、恐々謹言、

朱カキ
享保十一年 七月四日

安藤對馬守
信賢判

松平上總介殿

在包紙

松平上總介殿

安藤對馬守

全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、御安全御儀外間可

御心易外、隨而干椎茸一箱被獻之外、各申談遂披露外、

恐々謹言、

朱力キ

享保十一年 七月四日

松平左近將監

乘邑判

松平上總介殿

在包紙

松平上總介殿

松平左近將監

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺外、御安全御儀外

間可御心易外、隨而琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・琉

球泡盛二壺被獻之外、各申談遂披露外、恐々謹言、

朱力キ
享保十一年 七月四日

松平左近將監
乘邑判

松平大隅守殿

全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺外、御安全御儀外

間可御心易外、隨而琉球布一箱・砂糖漬天門冬一器・琉

球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外、恐々謹言、

享保十一年 七月四日

安藤對馬守

信賢判

松平大隅守殿

1866

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御安全被成御座、四月廿日東叡山 御靈前 御參

詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談可及言上外、

恐々謹言、

朱力キ

享保十一年 七月六日

松平左近將監

乘邑判

松平上總介殿

在包紙

松平上總介殿

松平左近將監

1867 繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御安全被成御座、四月廿日東叡山 御靈前 御參

詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談可及 上聞

外、恐々謹言、

朱力キ 享保十一年 七月六日

松平左近將監

乘邑判

松平大隅守殿

1868 繼豐公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕外、殘暑甚御座外得共、弥御堅達可被成御在

城跡重奉存外、然者去ル七日御領内船人數三拾貳人乘、

内琉球人拾五人乘壹艘、同八日御領内船貳拾七人乘、内

琉球人九人乘壹艘、ノ貳艘私領内江漂着仕外、尤洋中ニ

シ遭難風、船橋等損シ漸漂着仕外躰御座外、早速船作事

等船頭相願外付申付外間、出來次第先格之通長崎御奉行

所江指送可申外、且又去ル七日、同名兵部領内江御領内

船人數四拾人乘、内琉球人貳拾人乘壹艘漂着仕外段、早

速私方江表注進仕候、右船乗組無別條罷在外、右之趣爲

御知旁爲可申上呈愚札候、恐惶謹言、

朱力キ 享保十一年 七月十一日

(福江城主) 五嶋大和守

盛住判

松 大隅守様

參人々御中

1869 全上

御札令披見外、

公方様御安全被成御座、四月廿九日増上寺 御靈屋 御

參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談可及言上

外、恐々謹言、

朱力キ 享保十一年 七月十二日

松平伊賀守

忠周判

松平大隅守殿

1870 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御安全被成御座、四月廿九日増上寺 御靈屋 御

參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談可及言上

1872

繼豐公御譜中
正文在文庫

在包紙
松平上總介殿

松平伊賀守

御札令披見外、
公方様御安全被成御座、五月八日東叡山 御靈前 御參
詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談可及言上外、
恐々謹言、

朱力年
享保十一年 七月十九日

松平伊賀守
忠周判

松平上總介殿

1871

吉貴公御譜中
正文在文庫

在包紙
松平上總介殿

松平伊賀守

外、恐々謹言、

朱力年
享保十一年 七月十二日

松平伊賀守
忠周判

松平上總介殿

1874

全上
御札令披見外、

在包紙
松平上總介殿

松平伊賀守

御札令披見外、
公方様 大納言様御安全被成御座、五月十五日 大納言
様御袖被爲留之段被承之、目出度被存由得其意外、紙面
之趣各申談可及 上聞外、恐々謹言、

朱力年
享保十一年 七月廿二日

松平伊賀守
忠周判

松平上總介殿

1873

吉貴公御譜中
正文在文庫

朱力年
享保十一年 七月十九日
松平大隅守殿

松平伊賀守
忠周判

御札令披見外、

公方様御安全被成御座、五月八日東叡山 御靈前 御參
詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談可及言上外、
恐々謹言、

公方様 大納言様御安全被成御座、五月十五日 大納言様御袖被爲留段被承之、目出度被存由得其意、紙面之趣及言上、恐々謹言、

朱力キ
享保十一年 七月廿二日

安藤對馬守
信賢判

松平上總介殿

在包紙

松平上總介殿

安藤對馬守

1875 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様御安全被成御座、五月十五日

大納言様御袖被爲留之段被承之、目出度被存由得其意、

紙面之趣各申談可及言上、恐々謹言、

朱力キ
享保十一年 七月廿二日

松平伊賀守
忠周判

松平大隅守殿

1876

全上

御札令披見、

公方様 大納言様御安泰被成御座、五月十五日 大納言様御袖被爲留之段被承之、目出度被存由得其意、紙面之趣及言上、恐々謹言、

朱力キ
享保十一年 七月廿二日

安藤對馬守
信賢判

松平大隅守殿

1877 一吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御しう義おほせ上られ御念入まいらせられ
御事、御満そくさ何もよく申せとの御事ニ御さ、
めてかしく、

六月十八日之御ふみ下され、ひろふ致まいらせ、まつ

く

公方様

大納言様御機けんよく成らせられ

一位様御機嫌よくならせられ、去月十五日 大納言様

御袖とめさせられめてたく思しめし被成りよし、御祝儀

おほせ上られかすく御満足ニ思しめし、めてかしく、

朱力キ
享保十一年

お

1878

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

(吉原生母、巨勢氏)

淨圓院様御逝去之段被承之、被絶言語由得其意外、依之

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺外、被爲替御儀無

之外間可御心易外、紙面之趣各申談及上聞候、恐々謹言、

まつ平

上總介さま

御返事

岩 倉

梅 その

さくらい

松平上總介殿

朱カキ
享保十一年 七月廿三日

安藤對馬守
信賢判

在包紙

松平上總介殿

安藤對馬守

1880

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

淨圓院様御逝去之段被承之、被絶言語由得其意外、依之

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺外、被爲替御儀無

之外間可御心易候、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

松平伊賀守

忠周判

松平上總介殿

朱カキ
享保十一年 七月廿三日

安藤對馬守
信賢判

松平大隅守殿

1879

全上

御札令披見外、

淨圓院様御逝去之段被承之、被絶言語之由得其意外、依之

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺外、被爲替御儀無

1881

全上

御札令披見外、

淨圓院様御逝去之段被承之、被絶言語由得其意外、依之

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺外、被爲替御儀無

無之ハ聞可御心易ハ、紙面之趣各申談及言上ハ、恐々謹言、

朱カキ 享保十一年 七月廿三日 松平伊賀守 忠周判

松平大隅守殿

1882

文のやう

淨圓院様御養生御かない被遊リハて、先月九日ニ御逝去被遊リ御事、いかほと御しやうし御いたくしく

一位様ニも思しめさせられハ共、御障もあらせられハすハ、右之御機けん御うかゝい御ふミのやうひろういたしまいらせハ、御念いらせられ御事ニ思しめしハ、めてかしく、

朱カキ 享保十一年

まつたいら 御返事 大隅守さま 人々御中

いは倉 梅その さくらい

右

1883

吉貴公御譜中

正文在文庫 御札令披見ハ、

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺ハ、御安全御儀ハ聞可御心易ハ、隨テ塩漬松茸一桶被獻之ハ、各申談遂披露候、恐々謹言、

朱カキ 享保十一年 七月廿五日 松平伊賀守 忠周判

松平上總介殿

在包紙

松平上總介殿

松平伊賀守

1884

全上

御札令披見ハ、

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺ハ、御安全御事ハ聞可御心易ハ、紙面之趣及言上ハ、恐々謹言、

朱カキ 享保十一年 七月廿五日 安藤對馬守 信賢判

松平上總介殿

在包紙

松平上總介殿

安藤對馬守

書籍八拾八部目録註別紙
入十五箱

1887

繼豐公御譜中

正文在弥勒院

1886

1885

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺外、御安全之御事

外間可御心易外、隨而葛粉一箱被獻之外、各申談遂披露

外、恐々謹言、

朱カキ
享保十一年

七月廿五日

松平伊賀守

忠周判

松平大隅守殿

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之外、御安泰御儀

外間可御心易外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

朱カキ
享保十一年

七月廿五日

安藤對馬守

信賢判

松平大隅守殿

右

太守繼豐公御實母依御志願被寄附之於貴院早、全令受納

永可爲寺寶者也、仍副狀如件、

享保十一年丙午七月吉日

比志嶋隼人

範房判

彌勒院

1888

在白木御文書五番箱^十中

座附士を表方に被召出外儀、外城衆中鹿兒嶋士ニ被召出

外儀并一身者・座附士又外城衆中ニ被仰付外儀ハ、重

キ事外間、此以前より相減外様ニト

思召有之、頃日ニ至テハ薄キ様ニ者外得共、

太守様思召ニ者、當分被相減外上なから被召出外者多キ

様ニ 思召外、座附士を表方へ被召出、外城衆中を鹿兒

嶋士ニ被召成、一身者を座付士・外城衆中に被仰付外儀

ハ、小番之者を寄合ニ被召入程之重キ事外、右之次第ニ

外故、向後者數年首尾好相動外歟、又者何十年程首尾能

相動、一通り之儀迄ニ者被召出間敷外、其身之藝能ニ

依り、御用筋ニ者被召出外者ハ格別、其外ハ數年首尾能

相動差立外譯も有之、又ハ無據由緒も有之外ハ、吟味

之上可被召出外、右之通之

思召外故、此儀御内々被 仰聞事外條承知可仕置外、以
上、

享保十一年 七月

御取次 權六
將監殿

御家老中江

右 upper 包二 (朱) 十八

明和元年十一月朔日式部殿より御渡被成候付納置候也

市来頼兵衛存

1889 繼豐公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之外、遂披露候之處一段之御仕合候、恐々謹言、

朱力キ 享保十一年 八月三日

松平伊賀守 忠周判

松平左近將監 乘邑判

水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿

全上

1890

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ 享保十一年 八月三日

松平大隅守殿

安藤對馬守 信賢判

1891 繼豐公御譜中

扣正文在文庫

鹿屋之内小山川一狩倉、今度爲花岡薪山用被附下之外、
右小山川之儀、近外城田地用水之爲場所之條、薪用之木
迄伐取、至後年用水不相障様、兼可被申付置外、仍如
件、

享保十一年八月十八日

鳴津周防殿 (久應)

樺山主計 久初判

1892 神社掃閣調

覺

彌勒院末寺^{本マ、}源寺此節山號・寺號・院號左之通被相改外、
芳野山 憲英寺 法輪院 右系入院之御禮ハ不被仰付、
都五年頭御目見寺之格ニ被仰付外、住職之節老寺社奉行

1894

證文を以申渡、御禮寺社所迄中紙壹束致進上寺格ニ被仰付外間可得其意外、以上、

享保十一年八月廿六日 寺社奉行所印

彌勒院

1893 繼豐公御譜中

正文在隅州國分彌勒院

就天台宗之儀

總州様御家督之内より思召之旨有之、御内之嶋津周防殿(久徳)

江御承知被成、周防殿より願之趣達 貴聞、大乘院末寺臺

明寺儀天台宗ニ改宗、貴院末寺ニ被仰付、寺格者大興寺

同格、入院付る者

御目見被仰付、住職者於虎之間寺社奉行申渡之筋被仰付

外、此段可被致承知置外、以上、

朱力年 享保十一年 午八月廿七日 嶋津(久實)中務

彌勒院大僧都

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

1895

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易外、隨而干看一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力年 享保十一年 九月朔日 松平左近將監判 乘邑

松平大隅守殿

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易候、隨而干看一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力年 享保十一年 九月朔日 安藤對馬守 信賢判

松平大隅守殿

1896

繼豐公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀小袖一重到來歡覺候、委曲松平左近將監可述外也、

朱力年 享保十一年 九月七日 ○ (印文「吉宗」)

薩摩少將殿

全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之、遂披露外處一段之御仕合、恐々謹言、

朱力平
享保十一年 九月七日

安藤對馬守
信賢判

松平大隅守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、七月九日東叡山

淨圓院様 御廟所 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙

面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力平
享保十一年 九月十八日

水野和泉守
忠之判

松平上總介殿

在包紙

松平上總介殿

水野和泉守

繼豐公御譜中

正文在文庫

請取申金子之事

米高三千六百四拾七石五斗

金三千三百三拾四兩三分 銀六匁四分老

割イ
後藤包
常是包

右者爲上米壹萬石ニ付百石宛、當午夏御張紙直段三拾五石ニ付三拾貳兩之積を以、高七拾貳萬九千五百石分當秋半分上納、仍如件、

享保十一年午九月十八日

(御金奉行)(宣忠)
深津八左衛門○
(御金奉行)(種昌)
仙波彌一郎□
(同)(高遠)
黒澤直右衛門○
(同)(正徳)
戸田忠兵衛○

松平大隅守殿
役人中

1900
全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、七月九日東叡山

淨圓院様 御廟所 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙

面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力平
享保十一年 九月十八日

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

1901

吉貴公御譜中

今般繼豐欲_レ窺_二吉貴參府之期_一、雖_レ然每時發_二眩暈_一、舊病
尚未_レ愈故馳_二使翰於江都_一、稟_二之執政_一、事詳_于左方_一、

全上

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存_レ、將
又同氏上總介事病氣_二付參府難仕之段_一、去ル卯冬以使札
申上_レ外處、御用捨被下緩_レ遂保養難有仕合奉存_レ、病氣
全快仕_レ者參府奉願

大納言様_ニ及 御目見申上度所存_二御座_一外處、今以氣分
相替儀無之、度_レ眩暈差發難儀仕_レ、唯今之様子_二の者
參府可仕躰無御座_一、可罷成儀_レ者此上得と致養生、病
氣快罷成_レ節參府相伺_レ様仕度奉存_レ、依之以使者申上
外、恐惶、

朱力キ

享保十一年

十月二日

水野和泉守様

1903

松平左近將監様

松平伊賀守様

戸田山城守様

人々

以使者申上_レ外間如斯
御座_一、

全上

扣正文在右筆所

口上覺

松平上總介事病氣故參府難仕付、快罷成_レ節參府之儀可
奉伺旨、去卯冬以使札申上_レ外、折角致養生入湯_及仕_レ得
共、未全快不仕_レ外、快罷成_レ者參府仕奉伺御機嫌度所存
二の罷在_レ外得共、今以氣分相替申儀_及無之、度_レ眩暈差
發_レ付、乘輿环障_二罷成_一、領内温泉之場所_ニ差越_レ儀_及
存之儘_二不罷成_一、當分之躰_二の者參府可仕様子_一無御
座_一、依之病氣快罷成_レ節參府相伺_レ様仕度奉存_レ、右
之趣以使札申上_レ外得共、猶又被聞召達被下_レ様_二と大隅
守申付_一、以上、

朱力キ

享保十一年

月 日

松平大隅守

使者名

但日付者江戸ニて被差上_レ外当日之日付ニて被差出

1904

繼豐公御譜中

正文在琉球國國司

外由、卯冬之例相見得申外、此節も弥其通可有之
外、然者此案詞被差登江戸御家老座調之筋ニ可申
上事、

爲陽春之嘉儀被差渡使簡、殊目錄之表贈給之、入念之段
令祝着外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

朱力キ

享保十一年

十月十一日 少將繼豐御判

謹上 中山王

1905

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又參勤時分之儀以使者被相伺外、及 上聞外處如御定來
年三月中可致參府由被 仰出外條可被存其趣外、恐々謹
言、

朱力キ

享保十一年

十一月二日

松平伊賀守

忠周判

1906

全上

松平大隅守殿

松平左近將監

乘邑判

水野和泉守

忠之判

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又參勤時分之儀以使者被相伺之外、紙面之趣令承知外、
恐々謹言、

朱力キ

享保十一年

十一月二日

戸田山城守

忠眞判

松平大隅守殿

1907

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又參勤時分之儀以使者被相伺之外、紙面之趣令承知外、
恐々謹言、

朱力キ

享保十一年

十一月二日

安藤對馬守

信賢判

1910

繼豐公御譜中

正文在文庫

松平大隅守殿

朱力キ
享保十一年十一月三日

松平左近將監
乘邑判

1909

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之候、益御安全御儀外間
可御心易外、隨テ小熬海鼠一箱被獻之外、各申談遂披露
外處一段之御仕合外、恐ク謹言、

1908

全上

松平大隅守殿

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御勇健之御儀外
間可御心易外、隨テ小熬海鼠一箱被獻之候、遂披露外處
一段之御仕合外、恐ク謹言、

朱力キ
享保十一年十一月三日

安藤對馬守
信賢判

松平大隅守殿

1912

繼豐公御譜中

扣正文在文庫

松平大隅守殿

朱力キ
享保十一年十一月九日

戸田山城守
忠眞判

1911

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又同氏上總介病氣付テ參府難成之由最前被申越外、今以
駈テ無之外、病氣快節參府相伺外様被致度旨令承知外、
依之被差越使者外紙面之趣、得其意候、恐ク謹言、

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又同氏上總介病氣付テ參府難成之由最前被申越外、今
以駈テ無之外、病氣快節參府相伺外様被致度旨令承知外、
依之被差越使者外紙面之趣、各一覽之事外、恐ク謹言、

朱力キ
享保十一年十一月九日

松平左近將監
乘邑判

松平大隅守殿

寶塔 一基

右

前中將吉貴公新被製之、所被納置花尾權現社内之
賴朝卿御髮鬚有奉納之御志、雖然御退休之故依仰自
太守繼豐公被相納之早、御髮鬚安置塔内、及後年宜寶護
之者也、仍副狀如件、

享保十一年丙午十二月十五日

平岡内匠
之品判

種子嶋彈正
久基判

伊集院藏人
久矩

樺山主計
久初判

嶋津
奈久武判

嶋津中務
久貫判

平等王院

1913 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨

而蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

^{朱力キ}享保十一年 十二月十八日 水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿

1914 繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨
而蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露外之處一段之御
仕合外、恐々謹言、

^{朱力キ}享保十一年 十二月十八日 安藤對馬守 信賢判

松平大隅守殿

1915 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌被相同之外、益御安全御儀外間
可御心易外、隨而錫一箱被獻之外、各申談遂披露外處一

段之御仕合ハ、恐ク謹言、

朱力年 享保十一年 十二月廿二日

水野和泉守 忠之判

松平上總介殿

右包紙 松平上總介殿

水野和泉守

1916

全上

御札令披見ハ、就寒中

公方様 大納言様御機嫌被相同ハ之外、益御勇健御儀ハ間可御心易ハ、隨テ筋一箱被獻ハ之外、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

朱力年 享保十一年 十二月廿二日

安藤對馬守 信賢判

松平上總介殿

右包紙 松平上總介殿

安藤對馬守

1917

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相同ハ之外、益御安全御儀ハ間可御心易ハ、隨テ琉球袖十端并簷節一箱被獻ハ、各申談遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

朱力年(マ) 享保十二年 十二月廿二日

水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿

1918

御札令披見ハ、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相同ハ之外、益御勇健御儀ハ間可御心易ハ、隨テ琉球袖十端并簷節一箱被獻ハ之外、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

朱力年 享保十一年 十二月廿二日

安藤對馬守 信賢判

松平大隅守殿

1919

全上

御札令披見ハ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、隨テ蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻ハ之外、各申談遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

朱力年 享保十一年 十二月廿三日

水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿

1920 全上

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、隨
刃蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之、遂披露、處一段之御仕
合、恐、謹言、

朱カキ
享保十一年 十二月廿三日

松平大隅守殿

安藤對馬守
信賢判

1921 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺 御靈屋
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤、紙面之趣各申談及 上
聞、恐、謹言、

朱カキ
享保十一年 十二月廿五日

松平上總介殿

水野和泉守
忠之判

在包紙
松平上總介殿 水野和泉守

1922 全上

御満そくニ思しめし、御てまへさまニも御ふしの
御事めて度思しめし、なを、御機けん御伺被成、
御念入まいらせられ、御事ニ思しめし、何もよく
申せとの御事ニ御さ、めてたくかし、

十一月十六日の文被下、まつ、

公方様 大納言様御機嫌よく成らせられ

一位様御機嫌よく被爲被成、かん氣之御障もあらせられ
ハす、御心易思しめし被成、へく、さてはかん中
御機嫌御窺と御座、

一位様へ御目録之通御あけなされ、披露いたしまいらせ
ハ、誠に幾久しく相かはらすと祝入せられ、めてた
くかし、

朱カキ
享保十一年

まつ平 御返事
上總介さま 梅その
人々御中 さくらら

6

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

朱力キ 享保十一年 十二月廿五日

水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平伊賀守可

述外也、

朱力キ 享保十一年 十二月廿七日



薩摩少將殿

全上

爲歳暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ 享保十一年 十二月廿七日

安藤對馬守 信賢判

松平大隅守殿

一 忠久公御鎧うつし一領

右 忠久公御鎧者、御家御代々爲御讓物之處、及五百

年御傳來之故、漸々其形不分明可有之躰外旨

太守繼豐公達 貴聞、永々爲御見合うつし置外様こと

被仰付、段々吟味之上其形無相違相調、御兵具所藏に

納置外、依之うつし之儀表正之御鎧に被相添、自今以

後御讓物之内被入置候、

一 小泉御冑一頭

右者 義弘公に從

太閤秀吉公被成御拜領、差立外御由緒表有之、御家爲

御讓物之處、元禄九年子四月罹火災、御讓物御覽之席

被備躰無之外故

總州様より

太守繼豐公に御讓物御目錄之内被相除外、雖然御家之

御重物に偶其形相殘有之候故、

太守繼豐公より取拵被仰付、如本相調御兵具所藏に納

置外、依之自今以後又々御讓物之内被召入候、

右之通此節被 仰出、以後若御讓物御目錄之内被書
載善外故、物頭に委細申渡置候間、其譯御記錄所
に記置至後代傳失有間鋪者也、

享保十一丙午十二月廿八日
平岡内匠 之品判

種子嶋彈正 久基判

伊集院藏人 久矩判

樺山主計 久初判

嶋津 全 久武判

嶋津中務 久貫判

御記錄奉行

1927 全御譜中

正文在隅州國分彌勒院

彌勒院

彌勒院事、以

思召被遊御再興外譯付る、今度東叡山御直觸被 仰付、
南泉院觸下被相離之旨

日門様令旨を以被 仰渡外條、難有可奉承知外、依之 令
旨一通、其外證書等之儀若伊集院藏人殿・平岡内匠殿よ
り可被相渡外、以上、

享保十一年 午十二月廿九日
島津中務 (久貫)

1928 継豊公御譜中

正文在隅州國分彌勒院

彌勒院

彌勒院事以

思召被遊御再興外譯付る、今度東叡山御直觸被仰付、南
泉院觸下被相離之旨

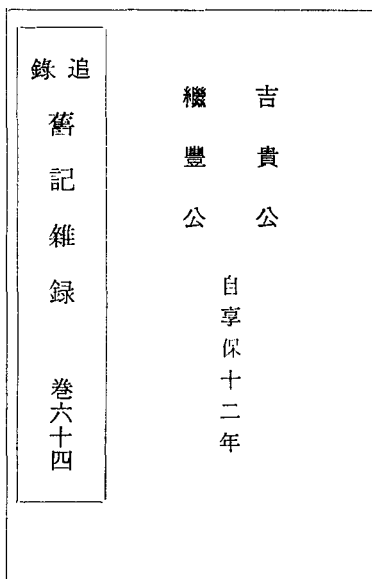
日門様令旨を以被 仰渡、其段若嶋津中務殿より被申渡、
南泉院に委觸下被相離外段被申渡外、右件付るハ最前拙
者共爲致首尾事外故 令旨一通其外證書三通相渡之外、
以上、

享保十一年 午十二月廿九日

平岡内匠
伊集院藏人

1929

(表紙)



繼豐公御譜中

正文在文庫

正月十一日之儀者御吉書之御規式有之事候得共、近年御交替之御時節相替付、年内御發駕及有之、正月初御發駕及有之付得者、右御規式者御道中之積ニ付、爲差立御規式付處、御道中御本亭なとニ右御規式者難被遊付、依之當分之御交替之内、正月十一日御道中ニ相込付節者、御吉書者被遊間敷付、

右之通被 仰出付間、後年紛敷無之様書留置可申付、
以上、

1930

享保十二年 正月八日

(島津久武) 本

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露候之處一段之御仕合付、恐々謹言、

享保十二年 正月十一日

松平伊賀守

忠周判

松平左近將監

乘邑判

水野和泉守

忠之判

(島津久武)
松平上總介殿

在包紙

松平上總介殿

水野和泉守

松平左近將監

松平伊賀守

1931

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露付處一段之御仕合付、恐々謹言、

朱力年
享保十二年 正月十一日
安藤對馬守 信賢判

松平上總介殿

松平上總介殿 安藤對馬守

1932 繼豐公御譜中

享保十二年正月二十七日、繼豐發府城、述職于東武、家老伊集院藏人久矩・平岡内匠之品、側用人伊集院權右衛門久盛、近習役兼用人河野八郎左衛門通興・山澤十太夫盛香、近習役島津内記久臈各屬從、既而經九州路、閏正月十三日到豐之大里、翌十四日駕船、開帆於斯港、同二十九日著船大坂津、二月四日駕扁舟、泝川流、翌五日到伏見、同九日出旅亭、取驛於東海伊勢路、同二十六日入芝旅邸、翌二十七日繼豐詣執政各館、稟爲出府之事、二月二十八日使執政松平左近將監乘邑、來于吾櫻田第一、勞繼豐之遠來也、又受執政之奉書、三月十二日繼豐登營、奉謁大樹吉宗公
巫相家重公、獻御太刀・馬代銀五十枚・縮緬二十卷于吉宗公、御太刀・銀馬代五十枚于

家重公、奉謝述職之禮也、同日家臣伊集院久矩・平岡之品亦從先格、奉拜謁尊顏、獻御太刀・銀馬代・紗綾二卷、

1933 全御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐謹言、
享保十二年 正月十一日
松平伊賀守 忠周判

松平左近將監 乘邑判

水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿

1934 全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐謹言、
享保十二年 正月十一日
安藤對馬守 信賢判
松平大隅守殿

なをく御てまへさまこも御無事の御事ニ御座被成、めてたく思しめしり、御祝義仰上られ、御満足さなにもよく心得りて申せとの御事ニ御さり、めてたくかしく、

十二月十三日の御文下されり、まつく

公方様

大納言様御機嫌よく成らせられ、

一位様御機嫌よくならせられり御事、御心安思しめし被成まいらせり、霜月十五日にハ

大納言様御日からよく、御まへ髪御とり被遊り御事、御めてたく思しめし被成りよし、右の御祝義仰上られ、御ふみのやう披露致しまいらせりへハ、御満足ニ思しめしり、誠に幾久しくとめてたく思しめしり、めてたくかしく、

朱カキ
享保十二年

松平

大隅守さま

御返事

人々御中

秀小路

梅園

櫻井

カ

正文在文庫

御札令披見り、如承改年之慶賀珍重り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始之御規式可相濟と目出度被存由得其意り、隨り御樽肴被獻之り、各申談遂披露り處一段之御仕合候、恐々謹言、

朱カキ
享保十二年 閏正月七日

松平大隅守殿

松平左近將監

乘邑判

1937

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又舊臘妻女歳暮之御祝儀拜領之、難有由得其意り、紙面之趣各一覽之事り、恐々謹言、

朱カキ
享保十二年 二月二日

松平大隅守殿

水野和泉守

忠之判

1938

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成、正月十日東叡山 御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申談及 高聞^レ、恐^レ謹言、

^{朱力キ}享保十二年 二月七日

水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿

1939 練豊公御譜中

正文在文庫

如芳翰陽春之嘉儀不可有休期^レ、其許御無吳超歲之由珍重^レ、我等堅固令越年^レ、入御念^レ段欣然之至存^レ、恐^レ謹言、

^{朱力キ}享保十二年 二月十一日

紀伊中納言 宗直判

松平大隅守殿

1940 全上

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申談及 上聞^レ、恐^レ謹言、

^{朱力キ}享保十二年 二月十三日 水野和泉守 忠之判
松平大隅守殿

1941 練豊公御譜中

正文在文庫

去^レ年御暇之節被差出^レ當分養子願書致返進^レ、以上、

^{朱力キ}享保十二年 二月廿七日

松平伊賀守

松平大隅守様

1942 吉貫公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山 御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申談及 高聞^レ、恐^レ謹言、

^{朱力キ}享保十二年 二月十九日

水野和泉守 忠之判

松平上總介殿

在包紙

松平上總介殿

水野和泉守

1943

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

朱力年

享保十二年 三月三日

松平伊賀守

忠周判

松平上總介殿

存包紙

松平上總介殿

松平伊賀守

1944

繼豊公御譜中

扣正文在右筆所

薩摩國鹿兒嶋城下東口番所通良方外北東之間土居三ヶ所

并堀岸三ヶ所、去年大雨付致破損外、如元修補仕度注繪

圖奉伺外、以上、

朱力年

享保十二年 三月

松平大隅守

全上

薩摩國鹿兒嶋城下土居并堀岸去年大雨之節崩外覺

1946

一東口番所通良方外北東之間土居三ヶ所崩申外、

一同堀岸三ヶ所崩申外、

右之通致破損外付、如元修補申付度奉願外、以上、

享保十二丁未年三月

松平大隅守

全上

正文在文庫

以上

薩摩國鹿兒嶋城下東口番所通良方外北東之間土居三ヶ

所、同堀岸三ヶ所崩外付、修補之事繪圖朱引之通得其

意外、如元可被申付外、恐々謹言、

松平伊賀守

忠周判

享保十二未三月十一日

松平左近將監

乘邑判

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

1947

繼豊公御譜中

扣正文在右筆所

御奉書致拜見外、薩摩國鹿兒嶋城下東口番所通良方外北

東之間土居三ヶ所、同堀岸三ヶ所崩れ付ぬ、修補之事注
繪圖奉伺處、如元可申付旨被仰下奉得其意外、恐惶、

朱力キ
享保十二年 三月十一日

水野和泉守様
松平左近將監様
松平伊賀守様

1948 継豊公御譜中
正文在文庫

明十二日五半時登
城參勤之御禮可被申上外、以上、

三月十一日

松平伊賀守
松平左近將監
水野和泉守

松平大隅守殿

1949 全上

家來兩人
御目見被 仰付外之間、召連可被罷出外、

1950 継豊公御譜中

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之外間、不及登 城外、以上、
三月十四日 松平伊賀守

松平左近將監
水野和泉守

松平大隅守殿

1951 継豊公御譜中

正文在文庫

請取申金子之事

米高三千六百四拾七石五斗

一金貳千九百拾八兩老

後藤包

右老爲上ヶ米壹萬石ニ付百石宛、當未春御張紙直段三
拾五石ニ付貳拾八兩之積りを以、高七拾貳萬九千五百
石分當春半分上納、仍如件、

享保十二年未三月十八日

(御金奉行、(止廻)
戸田忠兵衛 ○
(同) (種目)
仙波彌一郎 □
(同) (高老)
黒澤直右衛門 ○
(同) (宣忠)
深津八左衛門 ○

松平大隅守殿

役人中

1952 全御譜中

今歲三月十八日因_二執政之奉書_一、繼豐代_三于雲州松江城主
松平出羽守宜維_一、勤_二増上寺鎮火之番_一、

1953 全上

正文在文庫

増上寺火之番爲松平出羽守代被 仰付_レ間、被得其意可
有勤仕_レ、以上、

朱力キ
享保十二年 三月十八日

松平伊賀守
松平左近將監
水野和泉守

松平大隅守殿

1954 繼豐公御譜中

繼豐之夫人 長門・周防兩州牧松平長門守吉元女也、
享保八年癸卯四月二十一日嫁乎繼豐也、臥_レ病浸劇療養不_レ

驗、竟享保十二年三月二十日卒_二去于東都芝邸_一矣、同月
二十二日上使丹羽式部少輔倚氏來_二奠于吾櫻田邸_一、傳_二懇

篤之旨_一、乃繼豐詣_二于執政及丹羽倚氏之第_一奉_レ謝_レ之、

同月二十四日遺體出_二芝邸_一至_二大圓寺_一、同月二十七日葬
送焉、大圓寺現住爲_二引導師_一、法號瑞仙院殿松嶽貞高大
姉、家老島津大藏久春奉_二持靈牌_一矣、於是七月四日曉
遺髮出_二大圓寺_一、經_二東海・濃州・中國・豐州之驛_一、八
月十三日到_二著于薩府淨光明寺_一、既而爲_二葬事_一、安_二置
牌位於茲_一也、

1955 繼豐公御譜中

繼豐每_二述職_一、從_二先蹤_一獻_二馬_一二匹于 幕府_一、故今茲四
月十八日獻_二上領國所_レ産之馬_一二匹于

大樹吉宗公、同一匹于
大納言家重公_甲也、

1956 全上

正文在文庫

御馬_二疋被獻_一之_レ、遂披露_レ處一段之御仕合、恐_レ謹言、
本マ、(候脱カ)

朱力キ
享保十二年 四月十八日 乘邑判

在口裏
松平大隅守殿

乘邑

1957

今上

今朝御馬一疋被獻之外、遂披露_レ處一段之御仕合、恐_レ謹言、
本マ、(敷腕カ)

朱カキ

享保十二年

四月十八日

信賢判

右口裏

松平大隅守殿

信賢

安藤對馬守

1958

継豊公御譜中

正文在文庫

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之外、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

朱カキ

享保十二年

四月廿五日

乘邑判

右口裏

松平大隅守殿

乘邑

松平左近將監

1959

今上

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之候、遂披露_レ候之處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

朱カキ

享保十二年

四月廿五日

信賢判

右口裏

松平大隅守殿

信賢

安藤對馬守

1960

継豊公御譜中

正文在文庫

口上覺、

同氏上總介事病氣今以全快不仕、度々眩暈差發、其上舊臘以來手振、公儀向勤之節居判難仕御座_レ、依之印判用申度旨相願_レ、不苦儀_ニ御座_レ哉、御差圖可被下候、以上、
朱カキ 御張紙ニ而 可爲勝子次第旨可被遵候

四月廿六日

松平大隅守

1961

継豊公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺外、委曲水野和泉守可述外也、

朱力キ享保十二年 五月三日



薩摩少將殿

1962 全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ享保十二年 五月三日

松平大隅守殿

安薩對馬守 信賢判

1963 継豊公御譜中

正文在文庫

家來伊勢兵部事、明廿八日五時 御城口可被差出外、以上、

朱力キ享保十二年 五月廿七日

松平大隅守殿

松平伊賀守
松平左近將監
水野和泉守

1964 全御譜中

家臣伊勢兵部貞起者、其先兵部貞昌以來每三機目一拜二謁將軍家、是因三先規一也、以故繼豐稟三幕府、因三執政之奉書、今茲享保十二年五月二十八日、使三貞起登レレ營、乃於三白書院、奉レ拜三謁

大樹吉宗公

大納言家重公、獻三御太刀一腰・御馬一匹・紗綾二卷、松平玄蕃頭忠晧奏三達之、貞起拜禮畢而繼豐亦奉レ禮三謝之、貞起辭レ營登三西城、就三高木主水正正陳一、獻三御太刀・馬代銀於家重公、乃退去矣、

1965 古貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就酷暑之節、公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易外、隨三鏝節一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ享保十二年 六月二日

松平上總介殿

松平伊賀守 忠周判

1966

全上

御札令披見^レ、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌被相伺之^レ、益御安全御儀^レ間
可御心易^レ、隨^テ鏝節一箱被獻之^レ、遂披露^レ之處一段
之御仕合^レ、恐^ク謹言、

朱力キ

享保十二年

六月二日

安藤對馬守

信賢判

松平上總介殿

1967

繼豊公御譜中

正文在文庫

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・泡
盛酒二壺被獻之^レ、遂披露^レ處一段之御仕合^レ、恐^ク謹
言、

朱力キ

享保十二年

六月二日

忠周判

右口裏

松平大隅守殿

忠周

松平伊賀守

1968

全上

今朝琉球布一箱・砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉

球泡盛酒二壺被獻之^レ、遂披露^レ處一段之御仕合^レ、恐
^ク謹言、

朱力キ

享保十二年

六月二日

信賢判

右口裏

松平大隅守殿

信賢

安藤對馬守

1969

吉貴公御譜中

正文在文庫

なを^レ御手まへさま暑氣之時分御障りも御座不被
成、めて度思しめし^レ、相かハラすとよふの御機嫌
御窺被成、御満足さ御念入まいらせられ^レ御事ニ思
しめし^レ、なにも^レ心得^レて申せとの御事ニ御さ
^レ、めて度かしく、

(上用)

御ふみ下され^レ、土用ニ入、ことのほかニ暑ニ御座^レ得
共、まつ^レ

公方様

大納言様御機嫌よくならせられ御めてたさ

一位様御機嫌よくならせられ^レま、御心安思しめし被
成^レへ^レ、土用の御機嫌御伺と御座^レて、御ふみのや

う御もく録之通御あけなされ、披露致しまいらせりへハ、
數く御満足思しめしり、めて度かしく、

朱カキ
享保十二年

右

松平

秀小路

上總介さま

梅園

御返事
人々申給へ

櫻井

1970
吉貴公御譜中

享保十二年丁未三月二十日、繼豐之夫人松平長都太輔
吉元之令嬢也病痾既
革而卒于江都芝邸、同月二十二日

上使丹羽式部少輔倚氏來賁于櫻田邸、一而見吊之矣
邪送遺體於芝天國寺、瑞仙院殿松嶽真高大姉
遺髮於一壺、發江府、歷東海・美濃路・中國・九州
之驛、八月十五日曉天著到于薩府淨光明寺、既而其
日修梵儀矣、建廟所藏遺髮、安于靈牌於茲也、

1971
吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、同姓大隅守妻死去之節、大隅守方江上
使被成下之、難有由得其意外、紙面之趣各一覽之時候、

恐く謹言、

朱カキ
享保十二年 六月十五日

松平伊賀守 忠周判

松平上總介殿

在包紙

松平上總介殿

松平伊賀守

1972
全上

御札令披見外、同姓大隅守妻死去之節、大隅守方江上
使被成下之、難有被存旨得其意外、紙面之趣承届外、恐
く謹言、

朱カキ
享保十二年 六月十九日

安藤對馬守 信賢判

松平上總介殿

在包紙

松平上總介殿

安藤對馬守

1973
吉貴公御譜中

此よし何もよく申せとの御事ニ御さり、かしく、

五月十一日の文被下外、さては御同氏大隅守殿御奥かた
御死去被成外付、先比大隅守殿へ

公方様より 上使として、丹羽（倫）式部少輔を以御懇の

上意之趣、御手まへさまへ仰せられ御きゝ被成、有かた
く思しめし被成りよし、御禮と御座りて文のやうひろう
いたしまいらせり得へ、御念いらせられり御事と思しめ
しり、かしく、

朱カキ
字保十二年

まつたいら

上總介さま

人々御中

秀小路
梅園
櫻井

方

1974

継尊公御譜中

正文在文庫

端午之 御内書可相渡り間、明日五半時可被差出り、以
上、

朱カキ
字保十二年
六月廿四日

松平大隅守殿

水野和泉守

1975

今上

扣正文在右筆所

仰出

近年所帶方不勝手之上、領内凶年打續、年貢不足又老諸

士以下末々至及困窮、飢をも助彼是に引入、且上方向
之才覺々難達御に、別る續方支に成り由、依之城代家
老共より段々儉約之事共申越委聞届り、公義向勤等之
儀老格別之事なから、是もいたし様於有之者可相減候、尤

此方之用事老隨分不如意に濟り了簡に之條、内證向
老猶以減少り様可致り、早竟領國中老共往々致心安り
様ことの事り、此旨得と致了簡、都る減少之儀相しらへ、

近年中其詮々見得候様心得可申り、右次第付る、従前々
有來り格式をも不相替りる不叶品々可有之事り、然老政
務にも懸大切之事り間、萬端委細致沙汰、無費事を專に
可致吟味り、今度之儀老尋常之儉約とハ替り間、面々隨
分心掛可出情り、しらへ方に付城代家老并若年寄・大目
附に表申談事有之節老、餘事を差置、此儀に係片付可申
談り、以上、

朱カキ
字保十二年
木六月

1976

吉良公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿九日増上寺 御靈屋
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申談及 上
聞^レ、恐^レ謹言、

朱力平
享保十二年 七月六日

松平左近將監
乘邑判

松平上總介殿

在包紙

松平上總介殿

松平左近將監

1977
全上

御札令披見^レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將
亦病氣今以全快無之付^レ、居判難被仕印判被用度由、願
之通相濟忝旨得其意^レ、紙面趣令承知^レ、恐^レ謹言、

朱力平
享保十二年 七月六日

安藤對馬守
信賢判

松平上總介殿

在包紙

松平上總介殿

安藤對馬守

同年七月七日 上使小川新九郎番使、來芝邸、從先規
以下貴鷹所^ニ擊執^ニ雲雀^上、賜^ニ於繼豊^一也、即日登^レ營
奉^レ申^ニ謝^一之、且詣^ニ執政各之第一^一亦謝^レ之、

1979

繼豊公御譜中
寫正文在文庫

一 寛文三卯四月日光 御社參^ニ付、松平大隅守光久・部
屋栖薩摩守綱久勤之覺

一 日光 出御前爲伺御機嫌、大隅守從船中之使札到着、

四月五日龍眼肉一箱・熨斗目一箱差上^レ處、同十五日
御奉書御渡被成^レ事、

一 四月十二日、明十三日日光^ニ 御出興^ニ付、薩摩守登
城仕、御機嫌相同、直御老中様方^ニ相勤^レ事、

一同十三日より 還御迄、毎日稻葉美濃守様迄以使者御
機嫌相同候處、時々御左右之趣被仰聞、

一 大隅守爲參府大坂^ニ着仕、從彼地日光^ニ 着御之御機
嫌爲可奉伺、四月十四日使札差上候處、同十七日 着

御之御左右有之、御奉書御渡被成^レ事、

一 四月廿四日 還御被遊^レ付、薩摩守則日登 城仕、御
機嫌相同、御老中様方^ニ及相勤^レ事、

一四月廿七日三種三荷 還御之爲御祝儀、大隅守より獻上仕事、

一大隅守嫡子薩摩守召列、日光に參詣仕度旨奉願置り處、六月七日薩摩守歸國之御暇被下り、上使稻葉美濃守様御出之節、日光參詣之儀父子共心次第と被仰聞り付、六月十八日御當地出立、日光相仕廻、同廿四日歸府仕事、

右書留之趣申上り、以上、

松平大隅守内

七月廿六日

佐久間九右衛門(盛)

(朱)「右御答書壹通七月廿六日興津能登守様江佐久間九右衛門致持參、御用人渡邊平太夫ニ而差出り處、御請取被置之旨御返答有之り通、九右衛門申出り事、」

1980

繼豊公御譜中

寫正文在文庫

御記錄奉行に

例年八朔ニ老御太刀・御馬・馬代、又老中紙進上仕事り、古來ハ壹所持之儀、御家人御取持之様被仰付、夫故進上之御太刀・御馬・馬代直拜領被仰付、其以下迄奉拜領爲被仰付ニ可有之り、公義向之儀及、以前ニハ外様之

御大名老屹御取持爲有之儀り得共、頃日老御譜代同前被仰付事り、於御當家表以前ニ老爲相替事り付、御家中之面々より八朔進上物此節より拜領者不被仰付り、乍然現

馬進上之人ハ拜領不被仰付り而ハ、年々馬進上之儀迷惑ニ罷成筈り故、御太刀老不被下、現馬迄を拜領可被仰付り、右之段家格御取分を以、馬拜領被仰付儀ニ無之り、早竟迷惑ニ罷成筈之譯を以、右之通被仰付事り、左り進上之馬代銀之儀老六匁上納可任旨申渡り、此段不紛様帳面記置り様可申渡り、以上、

朱力キ 享保十二年 八月 (鳥津久吉) 中務

1981

繼豊公御譜中

正文在琉球國國司

爲陽春之嘉儀、被差渡使簡、殊目錄之表贈給之、入念り之段老祝着り、猶期後喜之時り、恐惶不宣、

朱力キ 享保十二年 八月十八日 少將繼豊御判

謹上 中山王

1982

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外

全上

薩摩少將殿



九月七日

享保十二年
朱力*

爲重陽之祝儀、小袖一重到來欣覺候、委曲松平左近將監可述外也、

正文在文庫

繼豊公御譜中

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

(徳川吉宗生母、巨勢利清女)

淨圓院様一回御忌御法事、於東叡山御執行相濟、六月九

日御位牌所 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣

各申談及 上聞外、恐、謹言、

享保十二年
朱力*

八月十九日

水野和泉守

忠之判

松平上總介殿

松平上總介殿

水野和泉守

豊公御譜中

同年九月十六日、

大樹吉宗公使_三執政松平伊賀守忠周來_二于櫻田第一、賜_三纒豐還_レ国之告_一、拜_二戴白銀百枚・縮緬三十卷_一、同日

亞相家重公亦始而使_二安藤對馬守信友_一、來_二于櫻田第一、

賜_三紗綾二十卷_一、即日至_三執政各位之第一、奉_レ禮_三謝_一之、

同月十八日繼豐應_レ教登_レ營、於_二黒書院_一而拜_二謁

吉宗公

家重公_一、奉_レ申_二謝歸國之告_一也、時蒙_二懇篤之尊言_一、因_二

全上

處一段之御仕合外、恐、謹言、

享保十二年
朱力* 九月七日

安藤對馬守
信友判

松平大隅守殿

明十五日例月之御禮無之外間、不及登 城外、以上、

享保十二年
朱力*

九月十四日

松平伊賀守

松平左近將監

松平大隅守殿

水野和泉守

先規一賜_二龍蹄一匹_一、奉_レ禮_二謝之_一、且留守居家老島津全
久武附_二從繼豐_一登_レ營、從_二先躰_一獻_二上御太刀一腰・馬
代白銀一枚・紗綾二卷_一、奉_レ拜_二調
台願_一、

1987

繼豐公御譜中
正文在南泉院

高五石八斗五升八合三夕三才

鹿兒嶋小野村之内 浮免

右者南泉院より野菜地無之付_レ、鎌田平右衛門知行高之内、鹿兒嶋小野村浮免、致所望度_レ間、南泉院高之儀より繰易_二被仰付度旨_一被申出_レ、南泉院高之儀 御判物を以_レ屹御寄附爲_レ被成置事_レ得_レ者、願_二之通_一者不被 仰付_レ、然共南泉院之儀思召を以_レ御取建之御寺之儀_二付故_一、御取分を以_レ右野菜地之分南泉院に被召付、增高_二被仰付_レ條、至後年相違有間鋪_レ、仍如件、

享保十二年丁未九月十八日

種子嶋彈正
久基判

樺山主計
久初判

嶋津中務
久貫判

1988

吉貴公御譜中
正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様來年四月日光山可被遊

御社參由被 仰出_レ段被承之、目出度被存旨得其意_レ、

紙面之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

朱力キ
享保十二年 九月廿五日 松平伊賀守 忠周判

松平上總介殿

有包紙
松平上總介殿 松平伊賀守

1989

全上

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様來年四月日光山可被遊 御社參由被 仰出_レ段被

嶋津大藏
久春判

承之、日出度被存旨得其意外、紙面之趣及言上り、恐く
謹言、

朱カキ
享保十二年
九月廿五日

松平上總介殿

安藤對馬守

信友判

是ヨリ違へリ

在包紙

松平上總介殿

安藤對馬守

1990

文のやう披露いたしまいらせりへハ、御満そくご思
しめしり、御てまへさまも御ふしの御事めて度思
しめしり、なをく何も御念入まいらせられり御事
ご思しめしり、よく御心得申せとの御事ご御座り、
めてかしく、

八月十八日の御ふみ下されり、まつく

一位様御機嫌よく成らせられ、めてたく思召被成りよし、
公方様

大納言様御機嫌よくならせられ御めてたさ、

公方様來年四月日光山へ

御社參被遊り御事、先月十七日ごおほせ出され、めて度
思しめし被成りよし、右之御祝儀仰上られ、めてたくか
しく、

朱カキ
享保十二年

まつ平

上總介さま

御返事
人々御中

秀小路

梅その

さくらい

1991

継豊公御譜中

正文在文庫

私儀今度御暇被下置、國元江罷越り、未男子無御座り付、
在國中若不慮之儀表御座り老、國元ご差置り私弟、島津
(實徳)
玄蕃當年廿歳罷成り、此者養子被仰付、跡職相續仕り様
奉願り、以上、

享保十二未九月廿五日

松平大隅守御判

戸田山城守殿

水野和泉守殿

松平左近將監殿

松平伊賀守殿

1992

継豊公御譜中

同年十月九日繼豊發芝第一、家老伊集院藏人久矩・平岡
内匠之品、側用人伊集院權右衛門盛央、近習役町田八右

衛門俊昌・河野八郎左衛門通與等附從駕矣、取道於東海、經伊勢路、同月二十三日止宿伏見旅亭、同月二十六日著大坂旅亭、同月晦日發大坂取陸、十一月四日自播州坂越港、駕船、同月十二日著備後尾之道、自是取陸到長州赤間關、同月二十日航著豐州大里、翌二十一日發大里、經九州之驛、十二月朔日著薩州出水、同月五日入鹿城矣、是故使番頭役島津小平太久幸豫奉謝恩使之命、赴東都上、

1993 繼豊公御譜中

正文在文庫

請取申米之事

米合三千六百四拾七石五斗(マ) 但京升也

右是者爲上ヶ米壹萬石、付百石宛、高七拾貳萬九千五百石餘分、當秋半分書面之通御藏に納申所、仍如件、

享保十二年未十月十三日

- 宇佐美助九郎(御藏奉行) (長) 忠 ○
- 伴一郎右衛門(同) (武) 信 ○
- 石原太郎兵衛(同) (政) 延 ○
- 堀内源右衛門(同) (安) 但 ○
- 高井藏人(同) (真) 忠 ○

松平大隅守殿

役人中

- 鈴木新藏(同) (安) 長 ○
- 青木郷助(同) (嘉) 珍 ○
- 竹村彌次右衛門(同) (頼) 安 ○
- 牛田甚太郎(同) (守) 理 ○
- 辻覺左衛門(同) (守) 理 ○

1994 繼豊公御譜中

正文在文庫

就八百君逝去(関院宮直仁親王家、近衛基熙女) 爲吊慰使札之趣不堪感謝外、今日除服外

故馳一簡外也、

朱力キ 享保十二年 十月廿二日

近衛家久 (花押) No.4

薩摩少將殿

1995 他國境目番所

- 出水之内 一 野間原 一 紙屋 一 都之城之内 一 寺柱
- 大口之内 一 小川内 一 高岡之内 一 去川 一 志布志之内 一 八郎ヶ野
- 加久藤之内 一 求磨口 一 都之城之内 一 梶山

一 高岡筋(東諸縣郡) 庄内 高城 福山 脇元 鹿兒島

六廻文

重富筋拾四ヶ所

一 重富(給良郡) 一 帖佐(同上)

一 日當山(給良郡) 一 踊(同上)

一 清水(國分) 一 國分(同上)

一 福山(給良郡) 一 市成(會於郡)

一 恒吉(會於郡) 一 松山(同上)

郡山筋貳今貳ヶ所

一 郡山(百盤郡) 一 入來(薩摩郡)

一 山口(同上) 一 平佐(同上)

一 東郷(薩摩郡) 一 山崎(同上)

一 大村(薩摩郡) 一 黒木(同上)

一 宮之城(薩摩郡) 一 大口(伊佐郡)

一 首木(伊佐郡) 一 本城(伊佐郡)

一 馬越(伊佐郡) 一 羽月(伊佐郡)

谷山筋拾九ヶ所

一 谷山(鹿兒島) 一 喜入(狹宿郡)

一 指宿(狹宿郡) 一 山川(狹宿郡)

一 加治木(同上) 一 曾於郡(同上)

一 數根(同上) 一 百引(同上)

一 樋脇(同上) 一 中郷(同上)

一 藺牟田(同上) 一 佐司(同上)

一 霧田(薩摩郡) 一 湯之尾(同上)

一 山野(伊佐郡) 一 今和泉(狹宿郡)

一 頰娃(同上) 一 嶺上(同上)

一 川辺(同上) 一 川邊(同上)

一 知覽(鹿兒島) 一 坊泊(百盤郡)

一 鹿籠(付金山) 一 阿多(同上)

一 加世田(百盤郡) 一 永吉(同上)

一 伊作(百盤郡) 一 日置(百盤郡)

薩州吉田筋貳拾壹ヶ所

一 吉田(薩州) 一 蒲生(給良郡)

一 溝邊(給良郡) 一 長野金山(同上)

一 栗野(給良郡) 一 吉松(同上)

一 加久藤(久比の) 一 飯野(同上)

一 須木(西諸縣郡) 一 高原(同上)

一 野尻(西諸縣郡) 一 綾(東諸縣郡)

一 倉岡(宮崎) 一 穆佐(東諸縣郡)

櫻島筋拾八ヶ所

一 櫻島(垂水) 一 牛根(垂水)

一 新城(垂水) 一 花岡(鹿兒島)

一 大根占(肝風郡) 一 小根占(同上)

一 田代(肝風郡) 一 内之浦(同上)

一 始良(肝風郡) 一 鹿屋(會於郡)

一 串良(肝風郡) 一 大崎(會於郡)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 久志秋目(同上) 一 田布施(同上)

一 吉利(同上) 一 吉利(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

一 山田(同上) 一 山田(同上)

伊集院筋拾三ヶ所

- 一伊集院(官置郡)
- 一市來(同上)
- 一川内(川内)
- 一限之城(同上)
- 一水引(川内)
- 一高城(川内)
- 一阿久根(同上)
- 一長嶋(田水郡)
- 一野田(同上)
- 一高尾野(同上)
- 一出水
- 一飯島(藤原郡)

墓石并葬禮定法

一石塔之文字に箔を込り得共、自今箔込り儀一切無用ニ申付り條、此旨與中・地頭所にも不洩様にと被仰渡り事、

諸人墓石并葬禮、比日段々結構ニ相調、分限不相應ニ相見得りゆへ、向後左之通相定り、

一石塔壹通地上五尺五寸、代銀百四匁、

但石形望次第結構之模様等と望有之りとも、彫付申間敷り、

右寄合並以上、

一同壹通地上四尺、代銀三拾六匁、

但書同斷、

一同壹通地上三尺五寸、代銀拾五匁、

但書同斷、

右諸士、

一同壹通地上三尺、代銀拾貳匁五分、

但書同斷、

右諸士以下末々迄、

一井垣者一間ニ付、代銀三拾目程ニ相調事り間、寄合並以上之人より頼來りとも、右之直段ニ可相調り、夫より以下石塔に井垣いたしり儀無用申付り間、何方より頼來りとも右之段申達、石切とも不受付様にと申渡り、

一四尺五寸土臺棺壹通、

但厨屋四方門垣廻り迄、

右寄合並以上、

一三尺五寸土臺棺壹通、代銀四拾六匁、代銀貳拾四匁、

但紙にて調り處を木綿・芭蕉にて相調、又者花籠等相付りゆへ直段兩段有之事り由、

右諸士

一三尺五寸土臺棺壹通、代銀拾四匁、

一三尺土臺棺壹通、代銀拾匁、

右諸士以下

右之通此節相定_レ間、右之定より軽く頼來_レハ、格別定より高直之塔棺望、何方より頼來_レり_レとも曾

る不受合様、石切共・棺屋ともへ可申渡置_レり、若違背いたし_レ者老、其沙汰可申付旨申渡置_レり間、組中末_レまで此旨承知仕_レ様寄_レ可致通達_レり、

十月

(種子島久基) 彈正

右之通、享保十二年未十月廿六日宮之原甚大夫御取次を以被仰渡_レり、

1997 吉貫公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レり、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

大納言様八月廿四日増上寺 御靈屋、同廿七日東叡山

御靈屋初_レり 御參詣段被承之、恐悦旨尤_レり、兩通紙面之

趣及言上_レり、恐_レ謹言、

朱力キ 享保十二年 十一月三日

安藤對馬守

信友判

松平上總介殿

1998 繼豊公御譜中

正文在文庫 御札令披見_レり、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之_レり、益御安全御儀_レ間可御心易_レり、隨_レり小熬海鼠一箱被獻之_レり、各申談遂披露_レり處一段之御仕合_レり、恐_レ謹言、

朱力キ 享保十二年

十一月五日

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

1999 全上

御札令披見_レり、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之_レり、益御安全御儀_レ間可御心易_レ候、隨_レり小熬海鼠一箱被獻之_レり、遂披露_レり處一段之御仕合_レり、恐_レ謹言、

朱力キ 享保十二年 十一月五日

安藤對馬守

信友判

松平大隅守殿

2000 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レり、

公方様益御機嫌能被成御座、去月十四日増上寺 御靈屋
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申談及 上
聞^レ、恐^レ謹言、

^{朱カキ}享保十二年 十一月七日 水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿

2001

全上
御札令披見^レ、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之^レ、益御安全御儀^レ間
可御心安^レ、隨^レ小熬海鼠一箱被獻之^レ、各申談遂披露
^レ處一段之御仕合^レ、恐^レ謹言、

^{朱カキ}享保十二年 十一月十三日 松平左近將監 乘邑判

松平大隅守殿

2002

全上
御札令披見^レ、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之^レ、益御安全御儀^レ間
可御心易候、隨^レ小熬海鼠一箱被獻之^レ、遂披露^レ處一
段之御仕合^レ、恐^レ謹言、

2003

^{朱カキ}享保十二年 十一月十三日 安藤對馬守 信賢判
松平大隅守殿

吉貴公御譜中
正文在文庫
御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、九月十四日増上寺
^(徳川綱重)清揚院様 御靈屋 御參詣之段被承之、恐悦旨尤^レ、紙
面之趣各申談及 上聞候、恐^レ謹言、

^{朱カキ}享保十二年 十一月廿一日 水野和泉守 忠之判

松平上總介殿

2004

吉貴公御譜中
正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將
^(島津總督)亦今度同姓大隅守儀被下御暇、從 大納言様卷物拜領之、
難有由得其意^レ、紙面之趣承届^レ、恐^レ謹言、

^{朱カキ}享保十二年 十一月廿五日 安藤對馬守 信友判

(島津吉貴)
松平上總介殿

2005
全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又今度同姓大隅守就御暇被下り、從 大納言様拜領物有
之、難有由得其意外、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

^{朱力半}
享保十二年 十一月廿五日

松平上總介殿

水野和泉守
忠之判

2006
吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく何もくよろしく申上外へくり、めてたく
かしく、

十月十八日付にて文下され外、

公方様 大納言様ますく御機けんよく御座なされ、御
めてたくおほしめし外よし、しかれハ此度 上使にて御
同氏大隅守殿御國元への御暇仰出され、白銀・紗綾御拜
領被成、 御前にて御懇の 御詫ことに御馬被遣り御事
にて、有かたく覺しめし外よし、御禮おほせあけられ外、

御ふミのとをりよろしく披露いたし外へくり、めてたく
かしく、

^{朱力半}
享保十二年

ぶ

まつ平

上總介様

御返事

人々御中

三室
豊岡
高瀬
外山
尾のえ

2007
吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御禮仰上られ、御念入まいらせられ外御事
と、御満足さよく心えりて申せとの御事ニ御ざり、
めてたくかしく、

文下され外、まつく

公方様

大納言様御機嫌よくならせられ、

一位様御機嫌よくならせられ外まつ、御心易思しめし被
成へくり、さやうに御座外へハ、大隅守殿御國元へ御いと
ま之時分ハ 上使にて仰出され、白銀・御巻物御拜領被

成、その上御懇の 上意にて、御馬御拜れう被成り御事
 仰越参らせられ、御手まへさまもかたしけなく思しめ
 し被成りよし、御禮仰上られ、文のやう披露致しまいら
 せりへ考、御満足と思しめしり、御手まへさまも御無
 事の御事ニ御座被成、めてたく思しめしり、めてたくか
 しく、

朱カキ
 享保十二年

松平

上總介さま
 御返事
 人々御中

秀小路
 梅園
 櫻井

右

全上

十月十九日の文下されり、

八百君様薨去成まいらせられり、

一位様いかほと御残多さまニ御愁傷あそはしり御事な
 ら、御障もあらせられりハす、御機けんよくならせられ
 り、御心易思しめし被成りへくり、

一位様御機嫌御伺被成、御文のやう披露いたしまいらせ
 りへハ、御満そくに思しめしり、何も御念入まいらせら
 れり御事思しめしり、よく申せとの御事ニ御さり、かし

く、

朱カキ
 享保十二年

まつ平

上總介さま

人々御中

秀小路
 梅その
 さくらゐ

右

全上

なをく御禮仰上られ、御ねん入まいらせられり御
 事、御満足さ何もよく心えりて申せとの御事ニ御さ
 り、めてたくかしく、

十一月三日の文下されり、まつく、

一位様御機嫌よく成らせられり、御めてたく思しめし被
 成りよし、扱考先日は御奥かたへ御忌中御尋まし被遊、
 御目録之通まいらせられり、御手まへさまもかたしけ
 なく思しめし被成りよし、御禮仰上られ、御文のやう披
 露致まいらせりへハ、御満足ニ思召り、御手まへさまニ
 も御無事の御事ニ御座被成、めて度思しめしり、めてた
 くかしく、

朱カキ
 享保十二年

右

松平大隅守殿

2012 繼豊公御譜中

正文在彌勒院

一紺紙金字普門品一帖、

一觀音畫像 雪舟筆一幅、

右奉爲

大守少將繼豊公

前中將吉貴公、貴體堅固・國家安寧、武州仙波喜多院僧正尚志自書普門品、併畫像被寄附之早、全令領納、御祈禱抽丹愆永可爲寺寶者也、仍副狀如件、

平岡内匠 之品判

享保十二年丁未十二月十五日

種子嶋彈正 久基判

伊集院藏人 久矩判

樺山主計 久初判

嶋津中務 久貫判

嶋津大藏 久春判

久春判

秀小路

梅園

櫻井

松平 上總介さま 人々御中

2010 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨而

蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之

御仕合外、恐々謹言、

朱カキ 享保十二年 十二月十二日 松平伊賀守 忠周判

松平大隅守殿

2011 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、隨

而蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露外之處一段之御

仕合候、恐々謹言、

朱カキ 享保十二年 十二月十三日 安藤對馬守 信友判

隅州正八幡宮別當

禰勒院大僧都

2013 全上

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之外、益御勇健之御儀外間可御心安外、隨而琉球袖十端并鏝節一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

^{朱力キ}享保十二年十二月十六日

松平伊賀守 忠周判

松平大隅守殿

2014 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易外、隨而鯛一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

^{朱力キ}享保十二年十二月十六日

松平伊賀守 忠周判

松平上總介殿

2015 全上

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌被相伺之、益御安泰御儀外間可御心易外、隨而鯛一箱被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

^{朱力キ}享保十二年十二月十九日

安藤對馬守 信友判

松平上總介殿

2016 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之外、益御勇健御儀外間可御心易外、隨而琉球袖十端并鏝節一箱被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

^{朱力キ}享保十二年十二月十九日

安藤對馬守 信友判

松平大隅守殿

2017 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺 御靈屋
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤り、紙面之趣各申談及 高
聽り、恐々謹言、

朱カキ

享保十二年

十二月廿五日

松平伊賀守

忠周判

松平上總介殿

2018 全上

なをく御機けん御窺被成、ことに御目錄の通御し
ん上被成、御満足と思しめしり、よろしく心得りて
申せとの御事ニ御さり、かしく、

御ふみ被下ひろう致まいらせり、まつくかん中ことの
外ひえまいらせりへ共、

一位様御機けんよくならせられりま、めてたくおほし
めし被成まいらせり、寒氣の御機けん窺と被仰、此御目
録之通御しん上被成、御満足におほしめしり、なを幾萬
も年御機けん御窺被成り様こと、御めてたさよろしく
申せとの御事ニ御さり、めてたくかしく、

2019 朱カキ 享保十二年

松平

御返事
上總之介さま
人々御中

秀小路
梅園
さくらら

2019 継豊公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平伊賀守可
述り也、

朱カキ 享保十二年

十二月廿七日



薩摩少將殿

2020 全上

爲歳暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之り、遂披露り
之處一段之御仕合り、恐々謹言、

朱カキ

享保十二年

十二月廿七日

松平大隅守殿

安藤對馬守

信友判

2021

(表紙)

追 録 舊 記 雜 録 卷六十五	吉 貴 公	繼 豐 公	宗 信 公
	享保十三年		

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力平

享保十三年 正月十一日

松平伊賀守
忠周判

松平左近將監
乘昌判

水野和泉守
忠之判

(島津吉貴)
松平上總介殿

2022

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、遂披露候之處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力平

享保十三年 正月十一日

安藤對馬守
信友判

松平上總介殿

2023

繼豐公御譜中

正文在文庫

吉書

一 神社佛閣修造興行事、

一 可專勸農事、

一 可徵納國々年貢事、

右任三ヶ條之旨、可有沙汰之狀如件、

享保十三年正月十一日 繼豐御判

2024

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力平

享保十三年 正月十一日

松平伊賀守
忠周判

繼豐公御譜中

正文在文庫

松平大隅守殿

松平左近將監
乘邑判

水野和泉守
忠之判

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力平
享保十三年

正月十一日

安藤對馬守

信友判

松平大隅守殿

全御譜中

今茲享保十三年正月九日、歸國之謝使島津小平太久幸到
執政用松平左近將監乘邑之第一、呈上格書及書牋而勤二使節一、
且到執政・若年寄各之第一、呈上格書及書牋而勤二使節一、
同十五日久幸登營捧繼豐先規之品物、獻上
之時

大樹吉宗公當餘寒有尊恙、故代于

公而

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方樣 大納言樣益御機嫌能被成御座、舊冬

大納言樣御前髮被爲執之段被承之、目出度被存之旨得其

大納言家重公出座于白書院也、久幸奉拜調尊顏、
奉謝繼豐歸國之恩篤、丹羽式部少輔倚氏奏達之、
亦親自獻上御太刀一腰・御馬代白銀一枚・紗綾二卷、
再奉拜謁

家重公、黑田豐前守直國奏達之、乃退去矣、同日登

西城捧繼豐先規之獻物及親自之獻物、於檜之間、就

內藤丹波守政森而獻上之、即日參候于執政及若年寄

之第一、進呈御太刀・馬代奉申謝之、同月二十一日

久幸登營執政松平左近將監乘邑出席于檜之間、手

自附與所授繼豐之奉書上、乃拜賜紗綾二卷、牧野

駿河守忠壽執達之、與津能登守大御・有馬出羽守大御・

大島織部御目各列居焉、乃奉申謝之退去矣、同月二十

二日久幸候執政安藤對馬守信友第一、手自授與奉書、

二月六日久幸發東武、三月二十六日還薩府復命、

意候、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力牛
享保十三年 正月十三日
松平左近將監
乘邑判

松平上總介殿

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、舊冬

大納言様御前髪被爲執之段被承之、目出度被存由得其意候、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

朱力牛
享保十三年 正月十三日
安藤對馬守
信友判

松平上總介殿

2029 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、舊冬

大納言様御前髪被爲執之段被承之、目出度被存之旨得其意候、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力牛
享保十三年 正月十三日
松平左近將監
乘邑判

松平大隅守殿

2030 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、舊冬

按ルニ重直公ハ正徳元年ノ誕生トアレハ此年十八歳ノ時ニ當レリ
大納言様御前髪被爲執外段被承之、目出度被存由得其意候、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

朱力牛
享保十三年 正月十三日
安藤對馬守
信友判

松平大隅守殿

2031 吉貴公御譜中

なぞく御てまへさまも御無事の御事ニ御座被成

めてたく思しめし外、御祝義仰上られ、御ねん入ま

いらせられ外御事ニ御満足さ、よく申せとの御事ニ

御さ外、めてたくかしく、

十二月十三日の文下され外、まつく

公方様

(家尊)
大納言様御機嫌よくならせられ

(家草夫人)
一位様御機嫌よく成らせられ外御事、御心安思しめし被

成外へく外、霜月十五日ニハ

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又去秋御暇、白銀・巻物頂戴之、其上御馬被下之、從

大納言様拜領物有之、重疊難有由得其意外、國元就到着

爲御禮、以嶋津小平(久幸)太如目錄被獻之外、紙面之趣令承知

候、恐々謹言、

朱力半

享保十三年

正月十五日

戸田山城守

忠眞判

松平大隅守殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又去秋御暇、白銀・巻物頂戴之、其上御馬被下之、從

大納言様拜領物有之、重疊難有由得其意外、國元就到着

爲御禮、以嶋津小平太如目錄被獻之外、右之趣遂披露外

處 御前に被召出之、入念候段御喜色之御事外、恐々謹

言、

朱力半

享保十三年

正月廿一日

松平伊賀守

忠周判

松平左近將監

乗邑判

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又去秋御暇、白銀・卷物頂戴之、其上御馬被下之、從
大納言樣拜領物有之、重疊難有由得其意、國元到着付
爲御禮、以鳴津小平太如目錄被獻之、右之趣遂披露
處 御前被召出之、入念外段御喜色之御事、恐々謹
言、

享保十三年 正月廿一日

安藤對馬守 信友判

松平大隅守殿

2035 繼豊公御譜中

寫正文在文庫

寫

從以前 (鳥津忠良) 日新樣御影像 御玉眼墨籠被成御座候故、此節
御磨可被仰付儀と被 思召候、然共 御賢慮迄之奉磨
外樣ニ委難被仰付付、御圖之上何分ニ委可被相極と之
思召之、寺社奉行鳴津藤次郎、福昌寺現住海門、加世
田江被差遣、點御圖被伺 御神慮外處、御磨無之筋之御
圖ニ由外、依之御磨之不及御沙汰外、右之通此節御圖之
上ニ由御治定爲有之儀外間、至後年紛敷無之樣帳面記置、
福昌寺并日新寺ニ委可被申渡置外、以上、

平岡内匠 (之忠)

享保十三年戊申正月廿一日

種子嶋 久甚 彈正 久甚

伊集院 久甚 藏人 久甚

樺山 久甚 主計 久甚

鳴津 久甚 中務 久甚

鳴津 久甚 大藏 久甚

寺社奉行

2036 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方樣 大納言樣益御機嫌能被成御座、年始之御規式可

相濟と目出度被存旨尤外、隨之御樽着被獻之候、各申談

遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

享保十三年 二月六日

水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿

2037 全上

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方樣 大納言樣弥御勇健被成御座、年始御規式可相濟

と目出度被存由尤外、猶以御機嫌被相伺之候、益御安全

御事外間可御心易外、隨而御樽肴被獻之外、遂披露外處

一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力年
享保十三年 二月六日

松平大隅守殿

安藤對馬守
信友判

2038 繼豊公御譜中

正文在文庫

爲青陽之嘉儀、御念入瑤章之趣、欣然之至外、其表弥無

吳儀御超歲之由珍重存外、恐々謹言、

朱力年
享保十三年 二月九日

松平大隅守殿

御報

德川鶴千代

(宗廟)

(印文(源))

松平大隅守殿

2040 全上

大納言様御庖瘡被遊御快然外爲御祝儀、以使者御樽肴被
獻之外、遂披露候處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力年
享保十三年 三月十二日

松平大隅守殿

安藤對馬守
信友判

2041 繼豊公御譜中

正文在文庫

請取申米之事

米合三千六百四拾七石五斗煮但京升也、

右是煮爲上ケ米、壹萬石ニ付百石宛、高七拾貳萬九千五

百石餘分、當春半分書面之通御藏に納申所、仍如件、

享保十三年申三月廿日

(御藏奉行) 辰 改
宇佐美助九郎○

(同) 武 惣
伴一郎右衛門○

(同) 政 惣
石原太郎兵衛○

(同) 安 惣
堀内源右衛門○

(同) 政 惣
高井藏人○

(同) 政 惣
鈴木新藏○

2039 繼豊公御譜中

正文在文庫

大納言様御庖瘡被遊御快然外爲御祝儀、以使者御樽肴被

獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力年
享保十三年 三月十二日

松平左近將監

乘邑判

水野和泉守

忠之判

2042

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申談及 上

聞^レ、恐^レ、謹言、

朱カキ

享保十三年

三月廿五日

松平左近將監

乘邑判

松平上總介殿

2043

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山 御靈屋

松平大隅守殿
役人中

青木^(同)郷助^(女)○

竹村彌次右衛門^(嘉)○

牛田甚太郎^(同)○

辻覺左衛門^(守)○

2044

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申談及 上

聞^レ、恐^レ、謹言、

朱カキ

享保十三年

四月四日

水野和泉守

忠之判

松平上總介殿

2045

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申談及 上

松平大隅守殿

朱カキ

享保十三年

三月廿五日

松平左近將監

乘邑判

聞外、恐く謹言、

朱力半
享保十三年 四月四日

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

2046 繼豊公御譜中

同年四月十三日

大樹吉宗公發^二台駕^一赴^二日光^一也、社參畢而同二十一日

還^二御于江城^一矣、於是同二十五日繼豊令^二堀萬右衛門貞

皎^一留守^二爲^二使節^一登^レ營、獻^二三種三荷于

吉宗公、且呈^二上使翰於執政^一奉^レ賀^レ之、同日令^二佐久間

九右衛門盛村^一留守^二爲^二使節^一、登^二西城^一獻^二三種^一荷于

亞相家重公^一奉^レ賀^レ之、公還御之後在國在邑之候伯以^二在府之者^一獻^二御樽

御^一也、繼豊以在國放使^二在府之留守^一、爲^二使節^一獻^二上尊酒佳、

2047 正文在文庫

今度日光山 御社參相濟外爲御祝儀、以使者御樽肴被獻

之外、遂披露外處、一段之御仕合外、恐く謹言、

朱力半
享保十三年 四月廿五日

松平左近將監
乘邑判

松平大隅守殿

2048 全上

今度

公方様日光山 御社參相濟外爲御祝儀、以使者御樽肴被

獻之外、遂披露候處一段之御仕合外、恐く謹言、

朱力半
享保十三年 四月廿五日

安藤對馬守
信友判

松平大隅守殿

2049 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

大納言様被遊御庖瘡外之處、輕御様躰之段被承之、恐悦

旨尤外、猶以御機嫌被相伺之外、弥御快然之御儀外間可

御心安外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐く謹言、

朱力半
享保十三年 四月廿七日

松平左近將監
乘邑判

松平上總介殿

2050 全上

御札令披見外、大納言様被遊御庖瘡外之處、輕御様躰外

段被承之、恐悦旨尤外、猶以御機嫌被相伺外、益御快然

御儀ハ間可御心易ハ、紙面之趣及言上ハ、恐ク謹言、

朱カキ

享保十三年 四月廿七日

安藤對馬守

信友判

松平上總介殿

2051 吉貴公御譜中

正文在文庫

御てまへさまにも御ふしの御事めてたく思しめし

り、なをく御機嫌御うかゝひ被成、何も御念入ま

いらせられ御事思しめしり、何もよく申せとの

御事ニ御さり、めてかしく、

三月廿八日の御ふみ下され披露致まいらせり、

大納言様御痘瘡被遊、御かるき御やう躰にて御順快あそ

ハされ、なを御機嫌よく御肥立あそハしりまゝ、御心易

思しめし被成りへくり、御機嫌御うかゝひと御さけて、

御ふみのやう御満足ニ思しめしり、めてかしく、

朱カキ

享保十三年

右

まつ平

上總介さま

御返事

秀小路

梅園

人々御中

さくらい

2052 継豊公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺り、委曲松平左近將監

可述り也、

朱カキ

享保十三年 五月四日



薩摩少將殿

2053

全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻り、遂披露り

處一段之御仕合り、恐ク謹言、

朱カキ

享保十三年 五月四日

安藤對馬守

信友判

松平大隅守殿

2054

全上

御札令披見り、

大納言様被遊御痘瘡り處、輕御様躰之段被承之、恐悦旨

尤り、猶更御機嫌以使者被相同之り、弥御快然之御事り

間可御心易り、紙面之趣各申談及 上聞り、恐ク謹言、

享保十三年 五月五日

松平左近將監 乘邑判

松平大隅守殿

2055 全上

御札令披見外、

大納言様被遊御疱瘡外之處、輕御様躰外段被承之、恐悅旨尤候、猶更御機嫌以使者被相伺外、弥御快然御儀外間可御心易外、紙面趣及言上外、恐々謹言、

朱力字 享保十三年 五月五日

安藤對馬守 信友判

松平大隅守殿

2056 繼豐公御譜中

扣正文在文庫

扣

聖蹟圖御屏風 一雙

右昔年 日新様在御座右、常所所被歴賢覽之圖也、故家久様追其御遺風、摸臨被仰付、慶長十三年有 御志之旨趣、被寄附之於紀州高野山蓮金院、如右 御先祖様以有 御志之旨、故此度

太守繼豐公有 命、臨寫之納置御書院方、永所被垂其美於將來也、此趣至後代爲無傳失、所記如件、

享保十三年戊申五月十一日 平岡内匠 在判

伊集院藏人 在判

2057

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、大納言様御疱瘡被遊御快然、御酒湯被爲 召外段被承之、目出度被存由得其意外、紙面趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

朱力字 享保十三年 五月十五日

松平左近將監 乘邑判

松平上總介殿

2058

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、大納言様御疱瘡被遊御快然、御酒湯被爲召外段被承之、目出度被存由得其意候、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

2059

朱力キ
享保十三年

五月十五日

安藤對馬守

信友判

松平上總介殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

祝入せられり、御てまへさまにも御ふしの御事めて
度思しめしり、なをく御しう義仰上られ御念入ら
れり御事ニ思しめし、何もよく御心へ申せとの御事
ニ御さり、めてかしく、

四月十五日の御ふミ下され披露致まいらせり、

公方様

一位様御機嫌よくならせられ、めてたく思しめし被成り
由、大納言様御痲瘡御快然あそハされ、先月十一日ニ御
酒湯めさせられ、御めてたさ右之御祝儀おほせ上られ、
御目録之通

一位様へ御あげ被成、御満足ニ思しめしり、幾久しく萬
く年もめてたさのミと、めてたくかしく、

朱力キ
享保十三年

秀小路

お

2060

松平

上總介さま

御返事

人々御中

梅園

さくらい

継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、
大納言様御痲瘡被遊御快然、御酒湯被爲召り段被承之、
目出度被存由得其意り、依之被差越使者り紙面之趣、各
申談及 高聞り、恐々謹言、

朱力キ
享保十三年 五月十九日

松平左近將監

乘邑判

松平大隅守殿

2061

全上

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、
大納言様御痲瘡被遊御快然、御酒湯被爲召り段被承之、
目出度被存由得其意り、依之被差越使者り紙面趣、及言
上り、恐々謹言、

朱力年
享保十三年
五月十九日

安藤對馬守
信友判

松平大隅守殿

2062
吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、今度

(家總)有章院様十三回御忌之御法事、於増上寺御執行相濟外段

被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々

謹言、

朱力年
享保十三年
六月十一日

松平左近將監
乘邑判

松平上總介殿

2063
全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様日光山爲

御社參、四月十三日江戸被遊 出御之段被承之、目出度

被存旨得其意外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力年
享保十三年
六月十二日

大久保佐渡守
常春判

松平上總介殿

2064
全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様日光山爲

御社參、四月十三日江戸被遊 出御外段被承之、目出度

被存由得其意外、紙面趣及言上外、恐々謹言、

朱力年
享保十三年
六月十二日

安藤對馬守
信友判

松平上總介殿

2065
緒豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、今度

有章院様十三回御忌御法事、於増上寺御執行相濟外段被

承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹

言、

朱力キ
享保十三年
六月十一日
松平左近將監
乘邑判

松平大隅守殿

2066
全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様日光山爲 御社參、四月十三日江戸被遊 出御之

段被承之、目出度被存旨得其意外、紙面之趣各申談及

上聞外、恐々謹言、

朱力キ
享保十三年
六月十二日
大久保佐渡守
常春判

松平大隅守殿

2067
全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様日光山爲 御社參、四月十三日江戸被遊 出御外

段被承、目出度被存由得其意外、紙面趣及言上外、恐々

謹言、

朱力キ
享保十三年
六月十二日
安藤對馬守
信友判

松平大隅守殿

2068
宗信公御誥中

宗信

初忠顯 益之助 又三郎 薩摩守 從四位下侍從

左近衛少將 從四位上左近衛中將

享保十三年戊申六月十三日誕生于東武芝第一、母家臣蒞

谷喜左衛門實臣女於房久守齋院逝去
視髮稱妙心院、後爲尼

家臣島津全久武勤二疊目鳴紘、同年六月二十八日老祖父

吉貴賜三幼名於益之助、委見三千後、

2069
正文石文庫

御若子様御誕生被遊外、御到來有之外ハ、御名之儀

老 總州様より被進度と

太守様被 思召外付、其段兼而被 仰進置外、然處 御

男子様御誕生被遊外、御左右有之外付而、兼而被 仰進

置外通 御名之儀、弥 總州様より被進度被 思召外旨、

比志嶋隼人に藏人より申達、右之段隼人より 總州様に

被申上外處、最前老 御男子様 御女子様御出生之段表

不相知事外故、先被聞召置たる事外、此節右之通片付

御男子様御誕生之事り得者 御名之儀者 太守様より被

進筋可宜候、御名之儀ニ付思召寄被 仰進、其節思召

寄者ハハ、可被 仰進と被 思召上り旨 御意之趣、

隼人より藏人承知仕り付、右之段

太守様は申上り處、いつれ 御名之儀者、兼る被 仰進

置り通、強る

總州様より被進度と 太守様思召りニ付、藏人磯江參

上仕、隼人を以

太守様思召之程 總州様達 御耳り處ニ、初る 御嫡子

様御誕生之御事り、總州様ニ者御隠居之御事御座り得

者、御家督様之御嫡子様ニ御隠居之御身より 御名被

進り儀御辭退 思召り、其上 御名之儀者、御若子様御

性ニ合り文字をも御附被遊事ニ、常躰之者之名とハ爲

相替事り故、御隠居之御身より 御名被進り儀旁難被遊、

御遠慮 思召り所より、最前者御辭退被 仰進たる事り、

此上

總州様より強る 御名被進度と

太守様被 思召り付、藏人ニ者被 仰進り趣被 聞召達

り付、其通可被遊り間、藏人より御記録奉行又ハ曆者杯

は申聞、御性ニ合り頭之字見合可差上旨 御意り、右ニ

付 御名被進り儀、最前

總州様御辭退ニ 思召之趣者、藏人方 太守様は申上置

り様ニと

御意之趣隼人より承知仕り事、

享保十三年戊申

六月

2070

右ノ一書中朱カキ書キ入左ノ如シ

〔本文之通 御名被進り付、從

總州様隼人ハ 御意被遊り者 御若子様 御名被進り

様ニと從 太守様被仰進置り、依之御見合被遊り者、

益と申字 御若子様御生相候由ニり間、頭之字者益之

字ヲ被進 思召り、右ニ付下司之 思召ニ者 總州

様下司之助之字ヲ被進 思召ニ者、益と助を可被進り、

常躰之者ニ名被下り時者、御書付杯を以被下事り故、

左様ニ者不被遊候、幸明廿八日 太守様磯江御入被遊

儀り間、御直ニ右御名被進 思召ニり由承知仕り、

總州様思召承知仕、御尤至極之儀と奉存り旨、隼人方

藏人ハ咄ニ仕り付、右 思召之趣者 太守様可達 貴

聞置旨、伊集院藏人より町田八左衛門ハ承其趣申上置

2071

宗信公御講中

正文在文庫

覺

御刀一腰師光
長式尺七二分半

一御三所物赤銅七子色繪舞鶴

一御鉏二重金

一御切羽金

一御鷗目金

外、

一 今月廿八日磯江 太守様 暑氣爲御見廻 御入被遊外處、總州様より 御意外考、此内 御若子様御名被進外様こと被仰進置外、依之 御名御見合書付させ被召置外間、此 御名ヲ被進外由ニある、御直ニ 太守様江御渡被遊外付、則御頂戴被遊 御覽被成外處、益之助様と被進外ニ付、御禮 太守様より 御直ニ被仰上被遊 御歸館外、

一右 御名被進外付、爲御禮藏人御使ニある則日御禮被仰進外、

2072

正文在文庫

覺

御守刀 一腰來園光、代參百五拾貫折
額有、長八寸一分半

一御一所物赤銅山水彫

一御鉏二重金桐御紋彫

一御鷗目金

一御柄白鯨

一御目釘赤銅七子桐御紋彫

一御鞆黒塗

一御鷗亦銅唐草御紋透

一御縁亦銅七子御紋金亦銅

一御柄白鯨糸卷

一御鞆黒塗

一御下緒花色

一御小刀河内守藤原行道

一御袋緞子

以上

(米) 一享保十三年戊申六月十三日

全上

一御下緒花色

一御小刀駿河守藤原盛胤

一御袋大和錦

以上

〔享保十三年戊申六月十三日〕

2073

宗信公御譜中

寫正文在文庫

寫

松平大隅守妾腹ニ去十三日男子出生仕候、薩州に則申遣候得共、遠國之儀御座候故先此段申上り、追り大隅守より可申上候、以上、

六月十六日

松平大隅守内

佐久間九右衛門(盛村)

全上

扣正文在文庫

2074

松平大隅守於御當地妾腹ニ男子出生仕候付産穢之覺

〔外〕

「享保十三年」

六月

十三日より

十九日迄

右之通ニ御座候、以上、

2075

繼豊公御譜中

正文在文庫

六月

松平大隅守内
佐久間九右衛門

なをく御手まへさまも御無事の御事ニ御座被成りて、嗚御悦被成りハんと思しめしり、何もよく心得りて申せとの御事ニ御さり、めてたくかしく、一位様より申せとの御事ニ御さり、まつく一位様御機嫌よく成らせられり、御心安思しめし被成りへくり、さやうに御座り得ハ、此度御手まへさま御男子御出生被成り由きかせられ、かすくめて度思しめしり、右のめてたさ御いわる被遊、此御日録之通御手まへさまへまいらせられり、誠ニ幾ひさしく萬く年も御機嫌よく成らせられ、御子息も御息災の御事にて成人被成り様こといわる入まいらせり、めてたくかしく、

朱力年
享保十三年

松たいら

大隅守さま

人々御中

秀小路

梅その

櫻井

継豊公御譜中

松平上總介殿

^{朱力キ}享保十三年
六月廿一日

安藤對馬守
信友判

2080

吉貴公御譜中
正文在文庫

松平大隅守殿

^{朱力キ}享保十三年
六月廿一日
安藤對馬守
信友判

2077

全上

御札令披見^レ、就酷暑之節、

公方様 大納言様御機嫌被相同^レ之^レ、益御安全御儀^レ間
可御心易^レ候、隨^レる麴節一箱被獻^レ之^レ、遂披露^レ處一段之
御仕合^レ、恐^レ謹言、

松平上總介殿

^{朱力キ}享保十三年
六月廿一日

大久保佐渡守
常春判

2079

全上

御札令披見^レ、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使者被相同^レ、益御安全御儀
^レ間可御心易^レ候、隨^レる琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・
赤貝鹽辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻^レ之^レ、遂披露^レ處一
段之御仕合^レ、恐^レ謹言、

松平大隅守殿

六月廿一日
大久保佐渡守
常春判

2076

按スルニ
此年六月十三日宗信公^ニ御誕生ナリ

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌被相同^レ之^レ、益御安全御儀^レ間
可御心易^レ候、隨^レる麴節一箱被獻^レ之^レ、各申談遂披露^レ處
一段之御仕合^レ、恐^レ謹言、

正文在文庫

御札令披見^レ、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使者被相同^レ之^レ、益御安全御
儀^レ間可御心易^レ候、隨^レる琉球布一箱・砂糖漬天門冬一器・
赤貝鹽辛一器・泡盛酒二壺被獻^レ之^レ、各申談遂披露^レ處、
一段之御仕合^レ、恐^レ謹言、

吉貴公御譜中
正文在文庫

なをく御てまへさまこも御無事の御事ニ御座被成
めて度思しめしり、思よふの御機嫌ニ伺被成、御満
そくさ御念入まいらせられり御事、何もよく心得り
て申せとの御事ニ御さり、めてたくかしく、
五月四日の御文下されり、まつく

公方様

大納言様御機嫌よくならせられ

一位様御機嫌よく成らせられ、暑氣御障もあらせられり
ハすりまゝ、御心安思しめし被成りへくり、扱素土用中
御機嫌御伺上られ、文のやう御目錄之通御あけ被成、
披露致まいらせりへハ、御満足と思しめしり、誠ニ幾久
しくあひかへらすといわぬ入思しめしり、めてたくかしく、

朱力キ
享保十三年

松平

上總介さま

御返事

人々御中

秀小路

梅園

櫻井

お

継豊公御譜中

御札令披見り、

公方様 大納言様益御勇健被成御座、

公方様日光山 御社參、御道中弥御機嫌能、四月廿一日

到江戸被遊 還御之段被承之、目出度被存由得其意り、

依之被差越使者り紙面之趣、各申談及 上聞候、恐く謹

言、

朱力キ
享保十三年

六月廿五日

大久保佐渡守

常春判

松平上總介殿

全上

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様日光山 御社參相濟、四月廿一日被遊 還御り段

被承之、目出度被存由得其意り、依之被差越使者り紙面

之趣、及言上り、恐く謹言、

朱力キ
享保十三年

六月廿五日

安藤對馬守

信友判

松平上總介殿

継豊公御譜中

正文在文庫
御札令披見ハ、

公方様 大納言様益御勇健被成御座、

公方様日光山 御社參、御道中弥御機嫌能、四月廿一日

到江戸被遊 還御之段被承之、目出度被存由得其意ハ、

依之被差越使者ハ紙面趣、各申談及 上聞候、恐々謹言、

朱力キ
享保十三年 六月廿五日

大久保佐渡守
常春判

松平大隅守殿

2084
全上

御札令披見ハ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様日光山 御社參相濟、四月廿一日被遊 還御ハ段

被承之、目出度被存由得其意ハ、依之被差越使者ハ紙面

之趣及言上候、恐々謹言、

朱力キ
享保十三年 六月廿五日

安藤對馬守
信友判

松平大隅守殿

正文在文庫
今度

有章院様十三回御忌御法事御執行付ル、以使者御香奠被

獻之ハ、於増上寺奉納之事ハ、右之趣及言上ハ、恐々謹

言、

朱力キ
享保十三年 六月廿七日

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

2086

宗信公御譜中

寫正文在文庫

御筆寫

覺

此度於江戸男子致出生ハ、到來有之ハ付

總州様ハ兼ル申上置ハ通、若子名御附可被下旨申上ハ外處、

嫡子之事ハ得ル御隱居之御事ニハ故、御辭退被成ハ、然

共強ル申上ハ外處、於其儀ニ御附可被下ト之御事ニハ、先

月廿八日磯ハ致參上ハ外處、益之助ト被下ハ外、我等直ニ

致承知、此節若子方ハ福山平太夫ト以申遣ハ、此趣家老

中致承知、江戸ハ表可申越ハ、以上、

右之通

御筆を以被 仰出外、以上、

(朱)

「享保十三年」

御取次

申七月二日

町田八左衛門_(後)

藏人_に

2087

継豊公御譜中

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、於其御地妾腹男子出生仕外付、去年九月

御暇之節奉願置外假養子嶋津玄蕃儀、御斷可申上外得共、

可罷成儀外者、來年三月參府仕外迄者、右玄蕃儀假養子

奉願置度外、此段爲可申上呈使札候、恐惶、

(朱)

「享保十三年」七月三日

戸田山城守様

水野和泉守様

松平左近將監様

大久保佐渡守様

人々

2088

一御奉書寫_(朱)

御札令披見外、於當地妾腹男子出生付外、去年秋御暇之

節被願置外當分養子之儀、此度可被相止外得共、來年三

月被致參府候迄者、嶋津玄蕃儀假養子被願置度旨承置外、

紙面之通各一覽之事外、恐々謹言、

八月三日

松平左近將監

乘邑判

松平大隅守殿

(以上前文書行間ニアリ、全文朱書)

2089

宗信公御譜中

正文在文庫

益之助

總州様_に名附可被下之旨申上置外處、右之通御直蒙 仰

外間、福山平太夫_に遺之_外、以上、

享保十三年

七月三日

繼豊

2090

全上

正文在文庫

別紙御書附福山平太夫を以

益之助様_に御名被進外節

太守様より之御書附_にあり、平太夫去年七月廿一日御名

全上
正文在文庫

一享保十三年戊申六月十三日七時過、江戸於芝御奥、御

全上
正文在文庫

享保十三年戊申七月三日福山平太夫江戸に御使被仰付被差立外付、御直ニ平太夫に被仰付外御口上覺

御若子様御名之儀

總州様に御願被仰上

益之助様と御名被進之旨

太守様に御直ニ御承知被成候、此段

御若子様は可申上候、

右之通於 御前御直ニ被 仰付候、以上、

(卷) 「享保十三年」 七月 藏人

被進外御使相勤、右御書附 益之助様御前に差上り、肝要之御書付ニ候故此節相渡り、以上、

(末) 「享保十四年」 酉三月 嶋津 全

妾腹ニ 御若子様御誕生被遊り段、嶋津左殿・嶋津登より則日以飛脚被申越、同月廿五日相達

御兩殿様被 聞召上候、

一御實母老遊谷喜左衛門娘、當おかく殿

一御腰物一腰

一御守脇差一腰

但 御袴書貳通別紙ニ有

右老御誕生之則日

太守様より御近習役小笠原彦八郎御使者ニ被進等、

兼被仰付置候、則日御産所より御部屋に御直被遊候

故、彦八郎御使者相勤、御取次山澤十太夫相勤候、左

候嶋津左殿 御口上承知被 仕、御部屋に御腰物持

參被仕、彦八郎老相附參 御若子様御頂戴被遊御腰物、

御部屋御床相直、御守脇差老御刀掛相掛、御枕上ニ被

備置候、

一御誕生之儀御國元ニ不被聞召上、無御弘内老先御隠

便之管候處、御隠便之筋ニ老難成、早速御届有之事外

間、早々御留守居名書を以先御届被成、左候於御國

元 御誕生之段御届之上、御使札ニ御届被仰上事候

故、六月十六日御用番大久保佐渡守様に別紙之通御届

全上

覺

御手鐘 一本 忠行袋鐘

一逆輪銀

一胴かね三ツ内二ツハ銀印付軌有壹ツハ赤銅

一太刀打金すりはかし

一泥返シ銀石突鉄

一鞘花色羅紗縫掛

以上

(朱) 「享保十三年」

全上

覺

黒熊對之御鐘 二本

袋鐘 但御拵同斷

内 壹本ハ正勝 長三寸五分

壹本ハ無銘 長四寸

一切羽金柄口四部一金御紋三ツ

一鏝赤銅金覆輪

一太刀打藤卷さび塗

一銅かね三ツ銀内壹ツ印付軌有

全上

正文在文庫

手鐘忠行 一本

對之鐘 二本

長刀嶋田住源義助 一振

以上

(朱) 「享保十三年」

(朱) 「享保十三年」七月

藏人

一 泥返シ四部一金唐草石突鉄

以上

(朱)
「享保十三年」

2096
全上

覺

御長刀 一 振嶋田住源義助

一 鉏二重苔やすり下鉏金きせ上鉏金むく金御紋一ツすかし

一 一切羽金むく小さき

一 鏝赤銅金覆輪

一 上逆輪赤銅花形金御紋四ツ玉縁赤銅小縁唐草金

一 銅かね二ツ赤銅平むくり金御紋六ツ宛小縁金高象眼目釘赤

銅ねちぬき

一 中逆輪五所銀むく横篠

一 太刀打つくしせんたん巻黒塗

一 泥返シ赤銅花形金小へり唐草金高象眼玉縁赤銅金小へり石

突鐵いちやう形

一 柄檜色付

一 鞘黒塗

一 巢袋花色羅紗裏革金磨

以上

(朱)
「享保十三年」

2097
全上

正文在文庫

手鏢 山城守國重

一本

長刀 一振

以上

(朱)
「享保十三年」

2098
全上

正文在文庫

覺

御手鏢 一本 山城守國重

一 鏝しんちう磨

一 上逆輪つはめ口花形赤銅地花石目唐草毛彫金御紋三ツ花形

金高象眼玉縁赤銅目釘ねちぬき

一 胴かね二ツ赤銅唐草毛彫

一 中逆輪赤銅ほつれ宿地花石目唐草毛彫金御紋三ツ金小へり

金高象眼目釘ねち貫

一 太刀打せんたん巻、金すりはかし

一 留り上下花形赤銅地花石目唐草毛彫金御紋三ツ金小へり金

高象眼

一 胴かね赤銅目釘ねちぬき

一 泥返シ花形赤銅唐草毛彫石突鉄八角すりなかし猪之目

一 鞘花色羅紗さゝへり

以上

(朱)

「享保十三年」

全上

正文在文庫

覺

御長刀 一振 無銘

一 鍔二重金御紋すかし

一切羽金

一 縁赤銅七子金こめん縁

一 鍔赤銅七子金覆輪

一 逆輪赤銅七子金小へり金唐草金御紋四ツ

一 胴かね二ツ赤銅七子金小へり金御紋六ツ宛

一 太刀打銀藤三所并黒藤三所

一 泥返シ赤銅七子金小へり金唐草象眼

一 石突鐵

一 鞘黒塗

一 巢袋花色羅紗裏革金磨

以上

(朱)

「享保十三年」

2100

継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、松平伊賀守卒去之段被承之、被絶言語旨

得其意外、依之

公方様御機嫌被相伺之外、御安全之御儀外間可御心易外、

紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱カキ

享保十三年

七月六日

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

2101

全上

御札令披見外、

2103

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

2102

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月晦日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

^{朱力キ}享保十三年

七月七日

水野和泉守

忠之判

松平上總介殿

2105

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、五月廿日

公方様東叡山日光御門跡に被爲 成外段被承之、恐悦旨

尤外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

公方様益御機嫌能被成御座、四月晦日増上寺 御靈屋
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上
聞外、恐々謹言、

^{朱力キ}享保十三年

七月七日

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

2104

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又今度大久保佐渡守連判之列被 仰付外段被承之、珍重

由得其意外、紙面趣及言上外、恐々謹言、

^{朱力キ}享保十三年

七月十二日

安藤對馬守

信友判

松平大隅守殿

^{朱力キ}享保十三年

七月十二日

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

又今度大久保佐渡守連判之列被 仰付外段被承之、珍重
由得其意外、紙面趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力キ
享保十三年 八月朔日 水野和泉守 忠之判

松平上總介殿

2106 全上

御札令披見^レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、五月廿日

公方様東叡山日光御門跡^江被爲 成^レ段被承之、恐悦旨

尤^レ、紙面之趣及言上候、恐^レ謹言、

朱力キ
享保十三年 八月朔日 安藤對馬守 信友判

松平上總介殿

2107 繼豊公御譜中 正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、五月廿日

公方様東叡山日光御門跡^江被爲 成^レ段被承之、恐悦旨

尤^レ、紙面之趣各申談及 上聞^レ、恐^レ謹言、

朱力キ
享保十三年 八月朔日 水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿

2108 御札令披見^レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、五月廿日

公方様東叡山日光御門跡^江被爲 成^レ段被承之、恐悦旨

尤^レ、紙面之趣及言上候、恐^レ謹言、

朱力キ
享保十三年 八月朔日 安藤對馬守 信友判

松平大隅守殿

2109 繼豊公御譜中 正文在文庫

御札令披見^レ、於當地妾服男子^(腹)出生付^ル、去年秋御暇之

節被願置^レ當分養子之儀、此度可被相止^レ得共、來年三

月被致參府^レ迄^テ、鳴津玄蕃儀假養子被願置度旨承置^レ、

紙面之通各一覽之事^レ、恐^レ謹言、

享保十三年 八月三日 松平左近將監 乘邑判

松平大隅守殿

(補註、此文書三〇八八文書二同シ)

2110 全上

爲八朔之御祝儀、以使者御大刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之^レ、遂披露^レ處一段之御仕合^レ、恐^レ謹言、

朱力^キ
享保十三年
八月十一日

松平左近將監
乘邑判
水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

2111 繼豊公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力^キ
享保十三年
八月十一日

安藤對馬守
信友判

松平大隅守殿

2112 繼豊公御譜中

寫正文在文庫

寫

御刀 八幡北國治國造
拵書副別紙 一腰

右

太守繼豊公有御志願之旨趣、被寄進之於

八幡新田宮早、全可納置社内之旨依 仰如件、

享保十三年戊申八月十五日
平岡内匠
之品判

2113

寫正文在文庫

覺寫

全上

執印丹下殿

伊集院藏人
久矩判

御刀一腰 八幡北國治國造
長貳尺六寸五分半

一御鉏銀一重八双着

一御切羽・鵬目銀

一御縁頭地赤銅七子金 二 而紅葉居物

一御目貫なた豆赤銅色繪

一御鏝鉄透

一御柄革着黒塗猪毛糸卷

一御鞘黒塗忪口鞘先赤銅鉄張

一御下緒

一御袋綴子

以上

朱力^キ
享保十三年

繼豊公御譜中
扣正文在文庫

知行目錄

高百五拾斛

伊集院之内

東郷之内

阿多之内

串良之内

小林之内

出水之内

名寄帳在別冊

右之通此節拜領被仰付外間、全可有所務外、仍如件、

平 内匠

之品判

種 彈正

久基判

伊 藏人

久矩判

樺 主計

久初判

鳴 中務

久貫判

鳴 大藏

久春判

澁谷喜左衛門殿
(實 色)

2115 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

(音 宗 忠 也)
淨圓院様三回御忌御法事於東叡山御執行相濟、六月九日

御位牌所 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各

申談及 上聞外、恐、謹言、

朱力キ

享保十三年

八月廿一日

松平左近將監

乘邑判

松平上總介殿

2116 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

淨圓院様三回御忌御法事於東叡山御執行相濟、六月九日

御位牌所 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各

申談及 上聞_レ、恐_レ謹言、

朱カキ
享保十三年 八月廿一日

松平左近將監
乘邑判

松平大隅守殿

2117
全上

御札令披見_レ、

公方様 大納言様御機嫌被相伺_レ之_レ、益御安全之御儀_レ間、可御心易_レ、隨_レ干鱠殘魚一箱被獻_レ之_レ、各申談遂披露_レ處一段之御仕合候、恐_レ謹言、

朱カキ
享保十三年 八月廿七日

松平左近將監
乘邑判

松平大隅守殿

2118
全上

御札令披見_レ、

公方様 大納言様御機嫌被相伺_レ之_レ、益御勇健御事_レ間可御心易_レ、隨_レ干鱠殘魚一箱被獻_レ之_レ、遂披露_レ處一段_(一脱之)之御仕合_レ、恐_レ謹言、

朱カキ
享保十三年 八月廿七日

安藤對馬守
信友判

松平大隅守殿

2119
全上

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、將又今度立坊相濟_レ段被承_レ之_レ、目出度被存由得其意_レ、依_{(一) (福仁親王立太子)}之被差越使者候紙面之趣、各申談及 上聞_レ、恐_レ謹言、

朱カキ
享保十三年 八月廿八日

松平左近將監
乘邑判

松平大隅守殿

2120
全上

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、將又今度立坊相濟_レ段被承_レ之_レ、目出度被存由得其意_レ、依之被差越使者_レ紙面之趣及 言上_レ、恐_レ謹言、

朱カキ
享保十三年 八月廿八日

安藤對馬守
信友判

松平大隅守殿

2121

吉貴公御譜中
正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將
又今度 立坊相濟^レ段被承之、目出度被存由得其意^レ、

依之被差越使者^レ紙面之趣、各申談及 上聞^レ、恐^レ謹言、

朱力^キ享保十三年 八月廿八日 松平左近將監 乘邑判

松平上總介殿

2122 全上

御札令披見^レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將
亦今度 立坊相濟^レ段被承之、目出度被存由得其意^レ、
依之被差越使者^レ紙面之趣及言上候、恐^レ謹言、

朱力^キ享保十三年 八月廿八日

松平上總介殿

安藤對馬守 信友判

2123 吉貴公御譜中

正文在文庫

御満そくニ思しめし^レ、誠にいく久しくと祝入せら
れ^レ、御てまへさまニも御ふしの御事めて度思しめ
し^レ、なを^レ御しう義仰上られ、御念入まいらせ

られ^レ御事ニ思しめし^レ、何もよく心得申せとの御
事ニ御さ^レ、めてかしく、

七月廿一日の御ふみ下され^レ、まつ^レ

公方様 大納言様

一位様御機嫌よくならせられ、めてたく思しめし被成^レ
由、さては去月十一日 立坊首尾よく濟せられ^レ御事、
めて度思しめし被成^レよし、御祝儀仰上られ、御目錄之
通

一位様へ御あけ被成、ひろういたしまいらせ^レへハ、め
てたくかしく、

朱力^キ享保十三年

右

まつ平

上總介さま

御返事
人々御中

秀小路 梅園 さくらゐ

2124 吉貴公御譜中

正文在文庫

なを^レ御手まへさま御無事の御事ニ御座被成、め
てたく思しめし^レ、御禮仰上られ御念入まいらせら
れ^レ御事と御満足さ、なにもよく心得^レて申せとの

御事ニ御さり、めてたくかしく、

七月廿一日の文下されり、まつく

一位様御機嫌よくならせられり、御心安しめし被成りへくり、さてハ此たび御同性大隅守殿御男子御出生被成り御事きかせられ、めてたさニ奥方へ御しう義仰つかハされ、御手まへさまへも御念比さまの御意にて、忝思しめし被成りよし、右の御禮仰上られ御文のやう披露致まいらせりへは、御満足に思しめしり、めてたくかしく、

朱カキ
享保十三年

あ

松たいら

御返事

秀小路

上總介さま

梅園

人々御中

櫻井

右ノ一書中ニ大隅守殿御男子御出生云々、考察スルニ宗信公享保十三年六月十三日誕生於東武野第云ミトアレハ此御誕生ニ疑ナン

2125

吉貴公御譜中

返くよろしく申上りへくり、めてたくかしく、

七月廿七日付にて御ふミ下されり、

公方様 大納言様益御機嫌よく御座なされ、御めてたく

覺しめしりよし、しかれば

公方様より御奥方へ土用御たつねとして、六月廿三日御もく録之通御はい領なされりて、かたしけなく覺しめしりよし、御禮御申上被成よろしく申上りへくり、めてたくかしく、

朱カキ
享保十三年

あ

まつ平

上總之介様

御返事

人々御中

三室

豊岡

たかせ

外山

尾のへ

2126

全上

文のやう披露いたしまいらせりへハ御満足に思しめしり、何も御念入まいらせられり御事ニ思しめしり、此よしよく御心得申せとの御事ニ御さり、めてかしく、

八月二日の御ふミ被下り、まつく

一位様御機嫌よく成らせられ、めてたく思しめし被成り由、さてハ益之助殿御出生被成りニ付御祝あそハされ、

御手前さま奥かた益之助殿へ御目錄之通参らせられりへハ御懇之御事、御手前さまも有かたく思しめし被成りよし御禮仰上られ、めてたくかしく、

朱カキ
享保十三年

方

まつ平
御返事

秀小路

上總介さま

梅園

人々御中

さくらら

2127

全上

御満そくニ思しめしり、何も御念入まいらせられり御事ニ思しめしり、御手前さまも御ふしの御事めて度思しめしり、何もよく申せとの御事ニ御さり、かしく、

八月二日の御ふミ下されり、まつく

一位様御機嫌よく成らせられ、めてたく思しめし被成り由、さては益之助殿御出生被成り御祝儀御祝あそハし、御目錄之通御手前さまへ参らせられりへハ、御懇の御事有かたく思しめし被成り由御禮仰上られ、文のやうひろういたしまいらせりへハ、めてたくかしく、

朱カキ
享保十三年

秀小路

2128

全上

まつ平
上總介さま
人々御中
梅園
さくらら

誠ニ幾久しくと祝入せられり、御手前さま御ふしの御事めて度思しめしり、なおく御祝儀仰上られ、御念入まいらせられり御事ニ思しめしり、何もよく御心得申せとの御事ニ御さり、めてたくかしく、

八月十一日の御ふミ下されり、まつく

一位様御機嫌よくならせられめてたく思しめし被成りよし、扱ハ

關白様此度若君様御誕生あそハされ、御めてたさ御祝儀おほせ上られ、御目錄之通

一位様へ御あけ被成、披露いたしまいらせりへハ、かすく御満足ニ思しめしり、めてたくかしく、

朱カキ
享保十三年

方

まつ平

秀小路

上總介さま

梅その

御返事
人々御中

さくらら

継豊公御譜中

正文在文庫

思しめし外、何も御念入まいらせられ外御事ニ思し

めし外、御手前さまも御ふしの御事、めて度思し

めし外、何もよく御心得申せとの御事ニ御さ外、め

てたくかしく、

八月二日の御ふミ下され外、まつく

一位様御機嫌よくならせられめてたく思しめし被成り
由、さては

益之助殿御出生被成り御祝儀御祝あそハし、御目錄之通
御てまへさまへ参らせられ外ハ、御懇の御事有かたく
思しめし被成りよし御禮仰上られ、御文のやう披露いた
しまいらせ外ハ御満足ニ、めてたくかしく、

朱カキ
享保十三年

まつ平

大隅守さま

御返事

人々御中

秀小路

梅その

さくらら

右

全上

披露いたしまいらせ外ハ御満足ニ思しめし外、何

もく御念入まいらせられ外御事ニ思しめし外、此

よしよく御心得申せとの御事ニ御さ外、めてたくし

八月二日の御ふミくたされ外、まつく

一位様御機嫌よく成らせられ、めてたく思しめし被成り

由、さては

益之助殿御出生被成りニ付、御祝あそハされ、御同氏上

總介殿興かた、益之助殿へ御目錄之通まいらせられ外ハ

ハ、御懇の御事御手前さまにも有かたく思しめし被成り
由、御禮仰上られ御文のやう、めてたくかしく、

朱カキ
享保十三年

まつたいら

大隅守さま

御返事

人々御中

秀小路

梅その

さくらら

右

継豊公御譜中

正文在文庫

誠に幾久しくと祝入らせられ外、御てまへさまも

御ふしの御事めて度思しめし外、なおく祝儀おほ

せ上られ、御念入まいらせられ外御事ニ思しめし外、

何もよく御心得申せとの御事ニ御さ外、めてたくか

しく、

八月十一日の御ふみ下されり、まつく

一位様御機嫌よく成らせられ、めてたく思しめし被成り

よし、さてハ

關白様此たひ若君様御誕生あそハし、御めてたさ御祝儀

おほせ上られ、御もく録之通

一位様へ御あけ被成、披露いたしまいらせりへハ、かす

く御満足思しめしり、めてたくかしく、

朱カキ
享保十三年

まつ平

大隅守さま

御返事
人、御中

秀小路

梅その

さくらい

2132

継豊公御譜中

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存り、將

又於其御地妾腹男子出生仕り付り、去年秋御暇之節奉願

置り當分養子之儀、來年三月參府仕迄者、嶋津玄蕃儀假

養子奉願置度段申上り處、御聞置被下由御奉書之趣忝次

第奉存り、右之段爲可申上呈愚札候、恐惶、

(朱)
「享保十三年」九月五日

松平左近將監様

人、御中

〔一〕御男子様御誕生被遊り付、去年御暇之節御假養子御願置被成

り通、來年 御參府迄者其通被仰付度旨被仰上り處、御聞置

被成り由御奉書出り、依之御請被成可然旨、去御方も被仰聞

り由ニ而御案詞被差下、其通相調差上り、

一御書封目ニ者、封と云字書之、上脇之方江御印被遊り、依之

御書内ニ封印壹ツ入、紙ハ御書封紙、裁り而三ツニ折、御封

印入、上下折包込り事」

2133

継豊公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來欣覺候、委曲水野和泉守可

述り也、

朱カキ
享保十三年

九月七日

吉宗公
墨印

薩摩少將殿

2134

全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

享保十三年 九月七日

安藤對馬守 信友判

松平大隅守殿

2135

繼豊公御譜中

正文在琉球國國司

瑞仙院去春卒去付、爲悔被差渡玉川按司、芳翰之趣入念

儀外、恐惶不宣、

享保十三年 九月十日 少將繼豊御判

謹上 中山王

2136

全上

爲年首之嘉儀、被差渡使簡、殊目錄之表贈給之、入念之段令祝着外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

享保十三年 九月十一日 少將繼豊御判

謹上 中山王

2137

繼豊公御譜中

正文在文庫

請取申米之事

米合三千六百四拾七石五斗者

但京升也、

右是者、當申年御上ケ米壹萬石二百石宛、琉球國共高七拾貳萬九千五百石餘ニ付、七千貳百九拾五石之内、申秋之分書面之通、去未薩摩米請取御藏口納申所如件、

享保十三戊申年九月十五日

- 宮重傳左衛門(大番)正(豐)〇
- 三輪源左衛門(大坂御藏奉行)元住(元住)〇
- 設樂長五郎(茂雅)〇
- 筒井主税(順明)〇

松平大隅守殿

役人中

2138

繼豊公御譜中

正文在壽國寺

薩州鹿兒嶋元持山壽國寺者、元來爲眞言宗了性寺末院地藏院之處、今度黃檗ニ令改宗、爲任職其方被差置、山號・寺號依願右通被相改畢、此趣國老嶋津中務久貫受

命所被相傳也、仍爲後證如件、

寺社奉行

享保十三年戊申十月廿二日

顯姪長左衛門㊦
久周判

鳴津藤次郎㊦
久智判

鳴津内藏㊦
久敦判

玄黙

2139 吉貴公御譜中

正文在文庫

十月廿八日の御ふみ下されり、

保君様御逝去被遊

一位様御殘多さまに思しめさせられり御事なから、御障もあらせられりハて、御機嫌よくならせられりまゝ、御心易思しめし被成りへくり、御機嫌御伺と御座りて文のやう披露いたしまいらせりへハ、御満足に思しめしり、何も御念入まいらせられり御事と思しめしり、此よしよく御心得申せとの御事ニ御さり、かしく、

朱カキ
享保十三年

6

まつ平

上總介さま

御返事
人々御中

秀小路
梅その
さくらい

2140 継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又參勤時分之儀以使者被相伺り、紙面之趣令承知候、恐

く謹言、

朱カキ
享保十三年 十一月三日

戸田山城守

忠眞判

松平大隅守殿

2141 全上

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又參勤時分之儀以使者被相伺り、及 上聞候處、如御定來年三月中可致參府由被 仰出り條、可被存其趣り、恐く謹言、

朱カキ
享保十三年 十一月四日

酒井讚岐守

忠音判

松平左近將監
乘邑判

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

2142

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相同之外、益御勇健之御事外
間可御心安外、隨而小熬海鼠一箱被獻之外、各申談遂披
露外處一段御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保十三年 十一月四日

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

2143

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相同之外、益御安全御儀外間
可御心易候、隨而熬海鼠一箱被獻之外、遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保十三年 十一月四日

安藤對馬守
信友判

松平大隅守殿

2144 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又參勤時分之儀以使者被相同外、紙面之趣令承知外、恐
々謹言、

朱力キ
享保十三年 十一月三日

安藤對馬守
信友判

松平大隅守殿

2145

(心)
「辨抄」

一享保十三年戊申十二月五日、御關狩於谷山(鹿兒島)被仰付外、
集老落之上、惣奉行種子嶋織部殿・嶋津仁十郎殿・北
郷四郎殿當年(百重形)方春山・谷山兩所之替々被仰付、三ヶ
年二一度ツ、外城表同斷、

外城番與略ス

2146

継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、大久保佐渡守卒去之段被承之、被絶言語

由得其意外、依之御機嫌被相同之、御安全之御儀、間可御心易、紙面之趣各申談及、上聞、恐、謹言、

朱力キ
享保十三年十一月十二日

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

2147 全上

今度

〔徳川家宣〕
文昭院様十七回御忌御法事御執行付、以使者御香奠被獻之、於増上寺奉納之事、右之趣及言上、恐、謹言、

朱力キ
享保十三年十一月十二日

松平左近將監
乘邑判

松平大隅守殿

2148

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、隨、
、蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之、各申談遂披露、處一段之御仕合、恐、謹言、

朱力キ
享保十三年十二月十三日

酒井讚岐守
忠音判

松平大隅守殿

2149 全上

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、隨、
、蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之、遂披露、處一段之御仕合、恐、謹言、

朱力キ
享保十三年十二月十三日

安藤對馬守
信友判

松平大隅守殿

2150

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將、
又今度酒井讚岐守連判之列被 仰付、段被承之、珍重由得其意外、紙面趣各申談及、上聞、恐、謹言、

朱力キ
享保十三年十二月十六日

松平左近將監
乘邑判

松平大隅守殿

2151

全上
御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又今度酒井讚岐守連判之列被 仰付外段被承之、珍重由
得其意外、紙面之趣及言上候、恐々謹言、

朱力キ
享保十三年 十二月十六日

安藤對馬守
信友判

松平大隅守殿

2152

全上
今度

(德川綱吉)
常憲院様 二十一回御忌御法事御執行付外、以使者御香奠
被獻之外、於東叡山奉納之事外、右之趣及言上外、恐々
謹言、

朱力キ
享保十三年 十二月十六日

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

2153

全上
御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺外、益御安全御儀

外間可御心易外、隨而琉球袖十端并鏝節一箱被獻外、各
申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保十三年 十二月廿二日

酒井讚岐守
忠音判

松平大隅守殿

2154

全上
御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之外、益御安全御
儀外間可御心易外、隨而琉球袖十端并鏝節一箱被獻之外、
遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保十三年 十二月廿二日

安藤對馬守
信友判

松平大隅守殿

2155

全上
御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度
文昭院様十七回御忌御法事於増上寺御執行相濟、十月十
四日 御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之
趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

朱力キ
享保十三年
十二月廿五日

松平大隅守殿

酒井讚岐守
忠音判

2156
吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌被相同之外、益御安全之御儀外
間可御心易外、隨而鯛一箱被獻外、各申談遂披露外處
一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保十三年
十二月廿二日

松平上總介殿

酒井讚岐守
忠音判

2157
全上

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌被相同之外、益御安全御儀外間
可御心易外、隨而鯛一箱被獻外、遂披露外之處一段之御
仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保十三年
十二月廿二日

松平上總介殿

安藤對馬守
信友判

2158
吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

文昭院様十七回御忌御法事於増上寺御執行相濟、十月十
四日 御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之
趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力キ
享保十三年
十二月廿五日

松平上總介殿

酒井讚岐守
忠音判

2159
緒豊公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀小袖一重到來歡覺候、委曲酒井讚岐守可述
外也、

享保十三年
十二月廿七日

吉宗公
鑒
印

薩摩少將殿

2160
全上

爲歳暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻外、遂披露外

處一段之御仕合、恐、謹言、

朱力平

享保十三年

十二月廿七日

安藤對馬守

信友判

松平大隅守殿

(本)
「雜抄中」

高持成願御格式之事

一 諸士借方ニ請取、高又老買地分地等付、高直之儀老明、可申出、月限之不及沙汰證文請取置、五通、拾通積、節段、相しらべ、年中幾仕切、老可得差圖、且又御加增新地仕明高等之儀老、御家老任引付、可致其沙汰事、

一 外城衆中高之出入、年中押通之筋、老八朔高帳差出、支有之、故、毎年正月、六月迄之間、高直申付置、間、七月、十二月迄、高直請付間敷事、

一 外城と外城、又老鹿兒嶋と外城、高之出入可爲停止事、
一 寺社家に被附置、高之外、借銀方、相請取、高直之儀申出、老、寺社家に老御免不被成、間、取次仕間敷事、

一 借銀返辨方請取、又高相求、節、百石、千石迄之間、段、百斛、之、涯、老其人、願申出、於御免、高直之

儀可有取次事、

一 親相果、高主ニ被仰付人、繼目御禮不相濟、老高可相直、乍然初、御目見不相濟者、可有、間、左様成者、繼目之御禮不被仰付、老高直間敷、

一 高直證文、其年之證文、可有披露、若無據前年之證文、以申出人老、直、三月、番御家老、可申出事、

一 借銀方高有之相渡、人、又老高賣拂、人、高直證文出置、其後何、出入之儀於有、之、其譯、申上、高可相直、不依公私入組等有之、以後高直證文差出、共取次有間敷、乍然入組等前之日附之證文紛無、之、可有披露事、

一 諸士二男三男不別立人借銀方、高相請取、又老高相求、高直之儀申出、共、取次有間敷事、

一 高直證文、親子兄弟證據相立儀、可爲停止事、

一 諸士持高借銀返辨方、又老賣高、相渡御免被成、高帳面之首尾迄、相濟、以後、其年中、老、又、自分、高相求、高直之願申出、之、可有取次事、

一 萬石成御免之儀、別、之、譯無、之、被成御免間敷、當分萬石以上之面、高上之人有、之、共御免被成間敷、
一 一所持、一所持格、寄合、寄合並其外御家老直觸之面

、持高百斛千石ニ及外節者、前以高上之願申出、不及高直可申渡外事、

一萬石以上高上御免無之人、私領并持切名之任明ハ格別外間、向後右之增高ハ持高可相加事ニ付、諸士持留高位増シ等之增高も右ニ可準事、

一寄合並之格ニ有無之者ハ、千石ニ者御免被成間敷外、只今迄持來り外ハ、格別ニ外、持來り者、千石以上ニ有外ハ、其上之高上御免被成間敷外、

一御家老直觸之外當時屹立外御改被仰付置、又者地頭職被仰付外者、持高千石内之高上御免可被成外、右躰之者當分持高上九拾石餘百石内之高上者、御法之通高奉行しらへ申出外ハ、高直可申付外、百石之節に越シ外節者、願之上奉伺御免可有之事、

但右躰之者御役御免ニ有者首尾克御免之者ハ、持高六百石以上千石内之高ニ有外ハ、持高上九拾石餘百石内高上其身代ニ者御免可被成外、且又隱居以後俸代罷成、又ハ首尾惡敷御役御免之者、右六百石以上之持高上、少ニ有者高直御免被成間敷外、

一祖父・曾祖父屹立外御役相勤外者、且又地頭職おも被

仰付外者之子孫小番勤來外者ハ、五百石成御免可被成外、小番迄ヲ勤來外者ハ者、五百石成御免不被成外、四百九拾九石餘迄之高上御免可被成外事、

但百石之節ヲ越シ外涯ニ有願出外節奉伺御免可有之外、

一三百斛成者、代々士筋ニ有御歩行格之勤迄ヲ仕、其身表右通外ハ、御免被成間敷外、乍然江戸詰坏道中鍵持セ外程之勤仕外者ハ、様子ニ有御免被成儀も可有之外、道中鍵持セ外者ニ有者、御歩行格之者ニ有鍵持セ外共、右躰之者ハ者御免被成間敷外、代々士筋目ニ有者大番相勤外者ハ貳百石成御免可被成外、

但百石之節ヲ越シ外涯ニ有願出外節奉伺御免可有之外、

一初の高持成之願申出外者ハ、吟味之上御免可被成外、一外城養子者、其身代ニ者高五拾石ニ者被仰付間敷外、俸代ニ者五拾石以上九拾九石餘迄高上御免可被仰付外、座付士ハ三拾石ニ者被仰付間敷外、右之通外得共、御奉公之品ニ有外者格別ニ外、只今迄持來外者ハ其通ニ外、只今迄持來外者も右之程外上之高ニ有外ハ、其上之高上り者被仰付間敷外、座付士座ヲ離レ、士之

養子ニ成リテ者、高上リテ者外城養子之格式可爲同斷事、

但 五拾石成之節ニテ者奉伺御免可有之事、

一 外城ノ養子罷成リテ者三四代過リテ者、百石成御免可被成
リ、座付士座ヲ離レ御奉公仕テ者、三四代相過百石成
之願申出テハ、御免可被成リ、三四代之内ニテ者諸奉
行之格無役ニテも御馬廻リ、又者一代小番御免被成リ
者ハ百石成御免可被成リ事、

但 百石成之儀者、伺之上御免可有之事、

一 外城養子ニテ者代々小番被召入テハ、三百石成御免
可被成リ、且又座付士小番相勤リ筋目之養子ニ罷成、
小番相勤リハ、是又百石成御免可被成リ事、

但 百石涯々ニテ者奉伺御免可有之事、

右之通享保拾三年申十二月被極置リ事、

一 外城衆中始ル高持分地等之儀者、地頭ノ御格式を以相
しらベ、高奉行所ニ可申出之、其上高奉行ノ御格式之
旨を以相究地頭ニ可相達リ事、

一 外城衆中之儀、惣テ百斛以上ニテ者高上リ御免被成間敷
リ、以前ノ衆中筋ニテ者三四代差立勤來リ者之子孫者、
百石迄之高上御免可被成リ、代々衆中筋目ニテも、所
衆並之御奉公相勤リ者ハ、五拾石以上九拾九石迄之高

上リ御免被成、百石之高上リテ者御免被成間敷リ、祖父・

曾祖父代御赦免之子孫當時衆並之勤居リ者ハ、五拾石
迄之高上リ御免被成、其上之高上リテ者御免被成間敷リ、
以前ノ百石以上之高持來罷在者者御格無之リ、當分持
高百石以上ニテ者其上願出テテ者、御免被成間敷リ事、
右之通享保十三年申十二月被極置リ事、

(表紙)

追 錄 舊 記 雜 錄	吉 貴 公	享 保 十 四 年 自 正 月 至 四 月
	繼 豐 公	
	宗 信 公	
	重 年 公	
卷六十六		

2162

繼豐公御譜中

享保十四年正月五日繼豐發三府城一、述職東武一、家老伊集院藏人久矩・平岡内匠之品、側用人町田八左衛門俊昌、(朱力)近習役二階堂八太夫行孝・本村四郎左衛門時央・諏訪甚左衛門輝兼等扈從焉、取陸於九州一、同二十一日到豐州大里一、乃駕船、翌二十二日開帆、同晦日到播州坂越(赤穂)港一、從是又取陸經山陽道一、二月七日到大阪一、同十二日發旅亭一、泝千河流一、翌十三日止宿伏見一、同十八日出止宿一、歷伊勢路東海驛一、三月五日到著東都芝邸一矣、於是同七日執政水野和泉守忠之來櫻田亭一、而

2163

吉貴公御譜中

正文在文庫

傳篤命一、是依先規一也、同十二日受執政之奉書一、繼豐登營從一先縱一獻幣物一、黑書院而見于將軍吉宗公
 丞相家重公一、奉謝出府之禮一、此日家臣伊集院久矩・平岡之品亦獻先矩之品物一、拜兩公一、乃退去矣、

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力

享保十四年

正月十一日

酒井讚岐守

忠音判

松平左近將監

乘邑判

水野和泉守

忠之判

(島津吉貴)
松平上總介殿

2164

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

享保十四年 正月十一日
安藤對馬守 信友判

松平上總介殿

2165 緒豊公御譜中

正文右文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

酒井讚岐守 忠音判
享保十四年 正月十一日

松平左近將監 乘邑判
水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿 (島津緒豊)

2166 全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

安藤對馬守 信友判
享保十四年 正月十一日

松平大隅守殿

2167 正年公御譜中

一女子

於貞 樺山七郎久倫室

享保十四年己酉正月十六日誕生、母澁谷貫臣女、實

母四本仲兵衛爲規女、

寛延四年辛未八月十一日卒、法名淨心貞香、

一重年

2168 吉貴公御譜中

正文右文庫

御札令披見_レ、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

(編吉) 常憲院様二十一回御忌御法事、於東叡山御執行相濟、去

十一月十日 御靈屋 御參詣儀被承之、恐悦旨尤_レ、紙

面之趣各申談及 上聞候、恐_レ謹言、

松平左近將監 乘邑判
享保十四年 正月廿一日

松平上總介殿

2169

全上

御めてたさのミ仰上られ_レやうこといわる入せられ

ハ、御文のやう御満そくさ、なにもよく申せとの御事ニ御さハ、めてたくかしく、

十二月廿五日の御ふミ下されハ、まつく

一位様御機嫌よくならせられハ、御心安思しめし被成

へくハ、さやうニ御さハハ、十月廿三日

法皇様へ

春宮様行啓はしめ、御規式御するくとすませられ、數

く御めてたく思しめし被成ハ由、右之段御しう義仰上

られ、御ふミのやう披露致しまいらせハ考、數く御

満そくと思しめしハ、誠ニ幾ひさしく萬く年御はんし

やう被遊、めてたくかしく、

享保十四年

松たいら 御返事

上總介さま

人々御中

秀小路

梅その

櫻井

2170 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

常憲院様廿一回御忌御法事於東叡山御執行相濟、去十一

月十日 御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤候、紙面

之趣各申談及 上聞ハ、恐々謹言、

享保十四年 正月廿一日

松平大隅守殿

松平左近將監

乘邑判

2171 繼豊公御譜中

正文在文庫

敬白 天爵靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、去歲三司官役被 仰付、冥

加不淺難有仕合奉存候、弥以 御國許御奉公入念可相

勤事、

一乍恐奉對

繼豊様 吉貴様、毛頭不可奉存疎意候事、

一從 御國許被 仰下候諸事、御條書之趣堅可相守候、

若企惡意邪儀考於有之考、則可致披露候事、

一對國王無別心可抽忠勤候事、

一國中之掎并諸事無最眞親疎可致沙汰候事、

右條々僞於申上考

重年、公御譜中

神名略

享保十四年己酉正月廿六日

具志頭親方方典判
文若判

2172 継豊公御譜中

正文在文庫

爲青陽之賀儀、芳札且如目錄被投與、懇篤之摸様目出令

祝納候、弥堅固超歲珎重此方同然也、猶期永日也、

朱力年
享保十四年

二月五日

薩摩少將とのへ
(継豊)

(近衛久)
(花押 No.4)

2173

全上

御札令披見也、如承改年之慶賀珎重也、

公方様 (家尊) 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟と目出度被存由得其意也、隨而御樽肴被獻之也、各申

談遂披露外處一段之御仕合也、恐々謹言、

朱力年
享保十四年

二月十一日

松平大隅守殿

水野和泉守
忠之判

2176

全上

御札令披見也、

公方様益御機嫌能被成御座、去月十日東叡山 御靈屋、

同廿四日増上寺御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤也、

2175

継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見也、如承改年之慶賀珎重也、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟と目出度被存由尤也、隨而御樽肴被獻之也、遂披露外

處一段之御仕合也、恐々謹言、

朱力年
享保十四年

二月十二日

松平大隅守殿、

安藤對馬守
信友判

—重年

初久門 善次郎 兵庫 薩摩守 從四位下侍從

左近衛少將

享保十四年己酉二月十一日誕生於薩府城中、母島

津求馬久房女也 於登免繼豊逝去、日祝慶孫樹松院、茲日家臣河野八郎左衛

門通與勤三鳴絃誓目之役、

兩通紙面趣各申談及 高聞外、恐々謹言、

朱力キ
享保十四年 二月廿三日

酒井讚岐守 忠音判

松平大隅守殿

2177 紀要公御譜中

正文在文庫

如芳翰陽春之嘉儀不可有休期外、其元御無吳超歲之由珞重外、我等堅固令越年外、入御念外段欣然之至存外、恐々謹言、

朱力キ
享保十四年 二月廿六日

紀伊中納言 宗直判

松平大隅守殿

御返報

2178 吉貴公御譜中

本朝中葉以來兵革屢起、郡國戰爭、連年干戈不遑、紀史籍、世迄昇平後載籍大起載其事、紀其績、簡冊浩瀚、雖_レ然所以統括于一者鮮矣、仍吉貴命於記錄

館、自

神武帝一至

文德帝略記之、

清和帝以來繫編年、闕略公家之事績、專纂輯武家盛

衰、交倭家而令編錄焉、於是館員等記錄奉行川上平

田仲右衛門後雄、相良右兵衛長拱、本城朝之丞輝昌、右衛門親央、町

方權古中神新之丞長興、安藤左平次茂貞、日高甚兵衛為常、旁據歷代群史

及演史雜記、錯綜隱等括繫於各年、每草藁成一、吉

貴使侍臣讀之、親自檢閱之、議其是非、正其真偽、以撰定之、自今茲已酉春起、毫至己未

春、歷二十一年一終其功、繕寫裝潢亦備矣、上始貞

觀元年下訖天正十四年、王代都五十二世、凡七百二

十八年、全部七十卷號拔萃武家編年記、其後賜之

皇代六男合和親家 島津三次郎後改島津 因幡忠郷、故書寫之藏之文庫、永傳

不朽、

2179 紀要公御譜中

正文在文庫

去々年御暇之節、伊賀殿被差出外當分養子願書、致返

進外、以上、

朱力キ
享保十四年 三月六日 酒井讚岐守(忠音)

松平大隅守様

2180 全上

請取申米之事

米合三千六百四拾七石五斗六

但京升也、

右是孝當酉年御上ケ米壹萬石ニ百石宛、琉球國共高七拾貳萬九千五百石餘ニ付、七千貳百九拾五石之内酉春之分書面之通、去申薩摩米請取御藏口納申所、如件、

享保十四年己酉年三月八日 宮重傳左衛門○

(大坂御藏奉行)(近住)
三輪源左衛門○
(同) 設樂長五郎○
(同) 筒井主税
(就參府印形不仕)

松平大隅守殿

役人中

2181 繼豊公御譜中

正文在文庫

明十二日五半時登

城參勤之御禮可被申上外、以上、

朱力キ
享保十四年 三月十一日

酒井讚岐守
松平左近將監
水野和泉守

松平大隅守殿

2182 全上

家來兩人

御目見被 仰付外間、召連可被罷出外、

2183 全上

明十五日例月之御禮無之外間、不及登 城外、以上、

朱力キ
享保十四年 三月十四日

酒井讚岐守
松平左近將監
水野和泉守

松平大隅守殿

2184 繼豊公御譜中

正文在文庫

増上寺火之番爲松平(毛)民部大輔代被 仰付外間、被得其意

可有勤仕外、以上、

朱力キ
享保十四年 三月十六日

酒井讚岐守
松平左近將監
水野和泉守

松平大隅守殿

2185 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面趣各申談及 上聞

外、恐々謹言、

朱力キ 享保十四年 三月十九日

酒井讚岐守

忠音判

松平上總介殿

2186 三月五日之文下され外、仰上られ外通京都にて大學守御

門跡様御遷化被遊、數々御のこり多思しめし外御事な

ら

一位様御機嫌御障もあらせられ外ハすすま々、御心易思

しめし被成外へく外、御悔仰上られ御念入まいらせられ

外御文のやう、披露致しまいらせ外へ者、御満足ニ思しめ

し外、何もよく心得外て申せとの御事ニ御さ外、かしく、

朱力キ 享保十四年

6

松たいら
上總介さま
秀小路
梅その
櫻井

2187 重年公御譜中

同年三月二十二日誕生之後、始詣ニ薩府護摩所稻荷神社、

同日税所太郎右衛門篤乘府城納殿役人、代而詣ニ福ヶ迫諏訪神社、

乃進ニ納膝付青帙百匹於寶前、是依レ爲ニ産土神一也、

2188 継豊公御譜中

正文在文庫

明廿八日例月之御禮無之外間不及登 城外、以上、

朱力キ 享保十四年 三月廿七日

酒井讚岐守

松平左近將監

水野和泉守

松平大隅守殿

2189 宗信公御譜中

同十四年己酉四月二日、益之助誕生之後、始詣ニ芝神明

宮一産土、
神也、

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣各申談及上

聞外、恐々謹言、

朱力平

享保十四年

四月五日

松平左近將監

乘邑判

松平上總介殿

繼豊公御譜中

大樹吉宗公有下令^二

竹姫君

前大樹綱吉公養女、實清、開寺大納言照定卿女也

欲^レ整^レ三仇儷於芝邸^一之 台慮^上、

故享保十四年四月六日、執政松平左近將監乘邑既含^二

幕府命^一、招^レ鳥居丹波守忠利於乘邑第一、竊授^下與所^レ貺^二

繼豊^一之教書於忠利^上、乃齎^レ之來芝邸^一、見繼豊^一曉^レ達^二

之^一、謹拜^レ閱教書^一、而辱^二 台慮及^レ我^一也、敢不^レ拜從^一

然無^レ緣^レ即^レ奉 台慮^一、異時伸^下達可^レ奉^二拜對^一之旨^上、

書^二記之^一附^レ與于忠利^一矣、即日忠利詣^二乘邑第一^一、稟^下所^二

禮謝^一之旨趣於乘邑也、同十日招^二忠利於芝邸^一、再附^二與

書忠利^一、奉^レ謝^下蒙^二 台慮^一之辱^上、且告^二拜答暫及^一遲延^一

同日忠利詣^二乘邑第二^一伸^レ達^一之、其次序咸載^二于譜中^一、

全御譜中

寫正文在文庫

一四月四日水野壹岐守様御用人石束與左衛門より佐久間

九右衛門^(盛村)に以手紙申越り奉、今晚明朝壹岐守様御登

城前之内些承合度儀有之^レ外故、參上可仕旨申來^レ得共、

五日早朝より御用有之^レ外、若御書付^二之相濟儀^一外ハ、

被仰聞度旨申遣^レ處、與左衛門より又^レ手紙^二之申越

外ハ、大隅守様^レに御心安御出入之御先手以上番頭^上

之御役、御一門又^レ御別懇^二御出入被成御方四五人^一及

致書付、可差遣旨申來^レ付、右之次第内匠^(平阿之品)に得差圖、

九右衛門事五日早朝壹岐守様御宅に致參上、與左衛門

に取合、如何様成御用筋^二之御尋被成^一外哉、無心元主

用別^レ之隙入^レ得共、少之内致參上^レ外由申^レ得ハ、松平

左近將監様^(乘邑)方今朝御登 城前之内御聞合被成度由被仰

外、如何様之御用之品ハ御存不被成由、壹岐守様被仰

聞外、

一右付壹岐守様より左近將監様^レに御挨拶被仰^レ外、大隅

守方は若小野次郎^(盛)右衛門様前^レ方御心安御出入被成

外、且又御役と申(忠利)るハ無之(忠利)不得共、鳥居丹波守様御由緒御心安有之(忠利)外、右之外ニ御心安御出入之御役人有之外段、兼而御聞及無之旨左近將監様(忠利)に被仰上置(忠利)外由、壹岐守様より九右衛門(忠利)に被仰聞(忠利)外旨申出外事、

全上

正文在文庫

竹姫君様前々御縁組有之(忠利)外得共、其以後御相應之儀及

無之御延引外處、松平大隅守妻女死去其後縁組及無之

付而、御相應被 思召外、御入興之儀可被 仰出と被

思召候、

一大隅守去年妾腹(宗信)男子出生外、御縁組以前出生之事外間、

竹姫君様御入興男子御出生外共、去年出生之男子を嫡

子ニ致外様こと被 思召候、

右之通 御内意可申聞由被

仰出之(忠利)外、以上、

(朱)

享保十四年 四月

「右之 御内意御書付壹通、今六日左近將監様御宅ニ而御直

ニ御渡被成(忠利)外由ニ而御持參被成外付、右御書付 太守様御

拝見被遊、則御請可被 仰上外得共、追而何分(忠利)被仰上度

旨丹波守様江 御直被 仰達、左之通御書付丹波守様江御渡被成外」

(朱) 「寫正文在文庫」

松平左近將監殿より御自分ニ而御内意御書付之趣委細拜見仕、難有次第奉存外、早速御請可申上儀御座外得共、

追而何分ニ及申上度奉存外、先此段左近將監殿(忠利)に被仰達置可被下外、以上、

(朱) 「享保十四年」 四月六日 松平大隅守

鳥居丹波守殿

「右御書付左近將監様御宅江丹波守様御持參被成、御直ニ御申

被成外處、御挨拶御様子(忠利)能御座外、此段 太守様江申上外

様可申越旨、丹波守様被仰付外由ニ而、鳥居頼母(忠利)存立、藏人、

内匠江以手紙申越外付、右之趣達 貴聞被聞召置外事、

一右付而 太守様御意外ハ、右之通御内意御承知被遊難有思召

外得共、右御縁組之儀何とぞ御斷可被仰上と思召外間、御斷

被仰上外次第得と申談、尤右之次第ハ早々、總州様江可申

上旨 御意外、右御縁組之儀付而者、分ケ而御懇之上意ニ而

外得共、御斷之筋如何被仰上可然と之儀、早速何様と難申談

外付、去御方様江御内々御尋申上、思召寄之程承外無之等と申談、其趣達 貴聞外處、御尤被 思召上外間、去御方様江

(04)

一鳥居丹波守様(忠利)昨六日芝御屋敷に御出、御家老に御逢可被成旨被仰付付る、空罷出外處、松平左近將監様より

嶋津大藏殿(久春)
嶋津中務殿(久實)
樺山主計殿(久初)
種子嶋彈正殿(久基)

久武
久矩
之品

四月七日

用別紙申達外、恐惶、
被成御座、奉恐悦外、於御當地 太守様 益之助様 大御前様猶御安康被成御座、目出度御儀奉存外、然者御用之儀有之、飛脚貳人三道中極々急々申付今晚差立外、御用別紙申達外、恐惶、

(03)

一筆申達外、 總州様 (備前守) 信證院様 (近衛家久様) 於須磨様弥御安全

御尋可申上旨 御意外付、去御方様御出被下度旨、則日李(島津久武)より以手紙申上、則晚内匠小屋ニ御出被成外付、李・内匠より段々御對談思召寄之趣委細被仰聞外付、其段逢 貴聞、翌七日晚極々急飛脚貳人差立、御國許御家老中江左之通申越外事」

御内意被仰進外儀有之外聞、

太守様に御逢可被成旨被仰付外付、其段申上

太守様御逢被遊外處、 竹姫君様前々御縁組有之外得共、其後御相應之儀表無之御延引外處、 御前様御逝

去後、御縁組表無之付る御相應被 思召外、 御入

與之儀可被 仰出と被 思召外、 去年御妾腹御男子御

出生外、御縁組以前御出生之事外聞、

竹姫君様御入與御男子御出生外共

(宗徳) 益之助様御嫡子ニ被成外様ニと被 思召外、右通御内

意可申聞由被 仰出外旨、別紙之通左近將監様方御渡

被成外旨、丹波守様方御承知被遊外付、難有被 思召

外旨先御挨拶被仰達、左外別紙御書付を以丹波守様

ニ被仰上外ハ、左近將監様方御書付之趣委細御承知

難有被 思召外、早速御請可被仰上外得共、追外何分

ニも被仰上度 思召外、先此段左近將監様に被仰達被

下度旨別紙之通丹波守様迄御書付御渡被成外處、早速

左近將監様 御宅に御持參可被成旨被仰外御立被成

外、然處今七日丹波守様御家老鳥居頼母より私共迄申

越外昨日之御書付、左近將監様御宅に御持參被成、御

直御申被成外處、御挨拶御様子表能御座外、此段 太

守様に申上り様ニ可申越旨、丹波守様被仰付り由ニ、右之趣以手紙申越り付、紙面之趣達

貴聞被 聞召置り、

一右付る 太守様御意りハ、先御内々之儀ながら難有被蒙 上意り、然共右御縁組之儀者何とそ御斷可被仰上と思召り間、御斷被仰上り次第得と申談、其趣可申上旨 御意り、右御縁組之儀付る者御懇之

上意ニ御座り得者、御斷之筋如何被仰上可然り哉、何程申談りる及私共了簡ニ者、乍早速何様と難申上御座り付、先去御方様に御内々

思召寄之程御尋申上外有之間敷と申談、則日晝より以手紙遮り御内談申上度儀御座り間、御出被下度旨申上り處、夜入五時御出被成り、(平間之趣)内匠小屋ニ御出會仕申上り者、今日御内意ニ上意之趣左近將監様より丹波守様ニ別紙之通大隅守被致承知、別難有奉存り得共、去年妾腹ニ男子出生仕、乍妾益之助實母之儀御座り故、内々ハ本妻同前之取持ニ被致事り處、右上意之趣とふそ御斷申上度被存事御座り、右御斷之次第ハ如何被申上可然り哉、先其元様に御内談申上、何とそ御斷申上様之手筋思召寄及御座りハ、無御隔意御

内々被仰聞度儀と大隅守(總書)被存り付、遠方乍御苦勞御出被下り様爲申上事御座り、私共何程申談りる及上様より御内意之儀御座り得ハ、何様御斷被申上、可宜杯

と存寄及無之、至私共別當迫仕り、宜御差圖被成被下度旨申上り處、成程其通之事り、右 御内意御書付者左近將監様方去御方様に被仰付、御調爲被成事候、別紙御書付之通 竹姫君様御入與被遊りる及、去年御嫡子御出生以後之御縁組ニり得ハ、竹姫君様御腹ニ御男子御出生被遊りる及、やはり 益之助様を御嫡子ニ可被遊り、此儀者

公方様方竹姫君様に御相談之上右之通ニ御座り、御妾之儀者、御部屋ニ被成御座り得者、何そ差支不申筈り、右之通分り 御懇之上意ニり得ハ、御斷可被仰上手筋思召寄無之、尤御身帶向難被續杯と被仰立儀及難成筈り得ハ、右之外ニハ少及思召寄無之旨被仰聞り、右付る申上りハ大隅守居屋鋪等も差迫り、ケ様成儀も差支申事御座り、御斷立不申 御入與之儀被 仰出りる及作事等も相調筈りへハ、中々一兩年中ニハ御入與難相調筈御座り旨申上り得者、其段ハ成程其通可有之外、二三年相過りるも不苦事ニ存り、最前方被

仰聞外通、御斷之手筋外ニ思召寄無之外、乍然 益之助様御實母 益之助様御出生以後、重取持被仰付置事
 外得ハ、御請被仰上外儀難御成思召外、此儀ハ御了簡被下外様ニ杯と、左近將監様ニ被仰達、乍其上押る
 上意も有之外ハ、もはや御請被仰上外存寄無之筈と被仰聞たる事御座外、去御方様御出之儀ハ、田口玄迪當分御取添ニ被差置、玄迪小屋方後道を明、芝御屋敷ニ御出外外儀、脇方ニ目立不申様御忍外外、内匠小屋ニ御出被成、御歸之節表其通御座外故、私共小屋ニ御出會仕外儀差支不申外、

一 右之通去御方様より思召寄被仰聞候付、其通被仰上筈ニ御座外處、今日表段々吟味仕外へハ、 太守様御若年之節

竹姫君様御縁談之儀有之外得共、御斷被仰上外、右之次第ハ其許御記録所ニ表書留有之候旨、相良(良兵衛)兵衛申出、肥後藤之丞杯表先役之節、右書留有之外儀覺罷在外旨申出外付、爰元ニも右書留可有之儀外故、御家老座肝要之書留入付等、折角見合させ外得共不相見得外、一 右之通先年表御斷爲被仰上事之由外得共、此節之儀付外ハ、 總州様思召寄之程被聞召、又若先年之書留表

御見合其趣を以可被仰上外、然若何分と被仰上儀御延引之御願折角被仰上度思召外間、私共ニ表左様承知仕、去御方様又々内匠小屋ニ申請御内談申上、何とそ御延引之御願相外様可仕外、無左外得ハ、先年被 仰出外趣ニ不結筈外旨 御意候付御尤至極奉存、明日去御方様ニ御内談申上外節、右之詮相立外儀を專可申上と今晚表折角申談儀御座外、右御願之儀去御方様表御同意ニ思召外ハ、御案文等之儀も御頼申上外上、御願被仰上筈御座外、御延引御願之通相調外ハ、其内

總州様思召寄御承知被成、又ハ先年之次第を以、不差障様可被仰上と 思召外旨 御意外間、御記録奉行ニ被申渡、先年被仰出外書留早々可被差越外、

(島津久尙) 但 將監殿切封ニ表御記録所ニ納有之外由、覺兵衛申出外、

一 右之通 太守様被 思召外間、 總州様思召寄之程早々被仰進度

思召外間、此段表可被申上外、
 一 先年表御縁談之儀有之、其節被仰上外譯も御座外得ハ、其趣表得と相考申上度被存外間、何分と被仰出外儀御延引被成度旨、去御方様ニ御内談申上外様被仰付外付、

今晚内匠小屋に又々御出被下度旨、田口玄迪ニ申上
り處、今晚ハ遙る御急用有之、御越難被成り、明八日
八ツ後御出可被成旨被仰下り間、明日御出會仕りる右
之趣可申上り、若御願之儀不罷成儀と被仰りハ、夜
前被仰聞り通おかく殿重く取持爲被仰付置事り得ハ、
御請難被仰上り、此段ハ御了簡被成被下り様ニと被仰
上、其上なから押る

上意奉御座りハ、最早御請被仰上外有之間敷事ニ
思召候、

一 去御方様に夜前御内談申上り節、右御内意之儀付る者
何れ上總介に申越、其上ニ何分と申上り様仕度旨大
隅守存り、此段者如何可有御座哉と申上りへハ

總州様に御内談被成りる者御懇之

上意ニ御座り得ハ、難被及吳儀答御座り、殊

總州様御隱居 大守様御家督之御事り得ハ、夫ニハ及
不申、尤其通有之り者

上意を輕く敷被成り様有之、不宜旨被仰聞り、

一 去御方様に御内談申上り節被仰りハ、此御方様御奥當
方明キ有之様

公方様思召儀奉有之、 御入輿被 仰出りハ、早速

可相調事と被 思召上たる儀奉可有之り、(總豐御考)
おかく殿重
ク取持被仰付置りと左近將監様に被仰上りハ、右取
持付りハ輿向奉差支答と思召所り、萬一

上之思召相替儀も可有之哉、此段者難計旨被仰聞り、

一 右付る者 太守様御斷被仰上度と之 思召之趣、去御
方様に私共御内談仕り、同前之筋を以、水野壹岐守様
に左御使被仰付、則晚參上仕御直ニ申上り處、壹岐守
様思召奉去御方様思召同前ニ何そ相替儀無之、御斷
之詮相立り儀を不被仰上り得ハ、罷成間敷り間、今少
御了簡被成り様可申上旨被仰付り付、罷歸

太守様に爲申上事ニ御座り、

一 明日去御方様に如何様と被仰上り儀、暫御用捨被下度
と御願之儀、御内談申上御願被立、弥御延引之筋不差
障譯御座りハ、酒井讚岐守様・水野壹岐守様に左御
使ニ御内談被仰置り上、被差出答御座り、左り御
願之通相濟りハ、至其時最初之次第又者爰許ニ申
談り趣

總州様に御直ニ被聞召上程之者を御見合、早々可被遣
旨 御意り、尤御延引之儀御願之通被仰渡りハ、

總州様爲御落着、又々飛脚を以申越り様可仕旨被仰付

置り、

右之通御縁組 御内意之趣御承知被遊、太守様及別
る御込り爲被遊事御座り、右付る者 太守様思召之
程、乍憚私共ニ及御尤至極奉存り付、とふそ御断相
立り様と折角申談事御座り、右御請御延引御願之儀
去御方様に明日御内談申上りハ、何分ニ及可相究
り、右之次第ニ未何分ニ及不決事り得共、先此段
總州様に早々可申上旨 御意り付、今晚極々急飛脚
差立、此段申越り條右之趣可被申上り、以上、

四月七日

平岡内匠

伊集院藏人

鳴津 左

鳴津將監殿

鳴津大藏殿

鳴津中務殿

樺山主計殿

種子嶋彈正殿

比志嶋隼人殿

總州様 信證院様 於須磨様弥御安全被

一筆申達り、

(06)

成御座奉恐悦り、於御當地及 大守様 益之助様 大御
前様猶御機嫌能被成御座、重疊目出度御儀奉存り、然者
御用有之三道中極急飛脚申付今日差立り、委細ハ別紙申
達り、恐惶、

四月十日

之品

久矩

久武

鳴津將監殿

鳴津大藏殿

鳴津中務殿

樺山主計殿

種子嶋彈正殿

比志嶋隼人殿

一松平左近將監様より鳥居丹波守様ニ及

太守様に御内意之趣有之、其段ハ去ル七日之夜極々急
飛脚を以申越り通御座り、其節申越り通去御方様去八
日内匠小屋に御出被成り付、御相談申上り様ニと大隅
守被申り故、御出被下り様ニと申上り處、御出被下忝
奉存り由申上、先夜御相談申上り以後、段々申談り處、

大隅守若年之節

竹姫君様御縁談之趣表御座り、就夫委書留等表御座り由覺罷在者表御座り、先夜御内談申上り節者、急成儀ニ右之存付表無之不申上り、其後段々吟味仕り處、成程薩州に右之次第書留等有之りと覺罷在り、爰許ニ表可有之と存見合申り得共、爰元は相見得不申り、乍然大隅守縁組之儀付り

一位様に申上り儀共書留にちら／＼相見得り所表御座り付、とかく子細有之様子に相見得り得者、最前之首尾に結不申り者如何被存り間、御請之儀御延引御斷申上度大隅守所存に御座り付、其趣を以先私共申談一通り相認申り、決り此筋可宜と申落着難致御座り、何分表御了簡被成被下度奉存り由、空・内匠より申上り處、扱者左様ニ有之り哉と御驚之躰に能相知申り、右通之儀有之りハ、縦

一位様御方迄に御申被成り儀に表能り由被仰り、則別紙案文之通被相調り、右御案文之通に可相濟事存り間、明後十日に丹波守殿に左近將監殿に御出可被成り、御請取被成りと有之り得ハ、夫歟御延引之御願爲相濟事り、其外に何ぞ御挨拶ハ無御座り由被仰り

付、右付る追り被申上り儀者、二三ヶ月間有之りも不苦儀に有之り哉と申上り得ハ、其段ハ不苦事り、今朝別紙之通存付り付り、案詞相調持参仕り、若御國許より書留参御見合之上仰立難成筋に表御座りハ、右持参仕差上り案文之通御認、御出被成可宜歟と存り、其上之儀ハ御吟味次第之事に可有御座り、御國許書付参りハ、又々何分ニ表御相談可申上り由被仰り、讚岐守様・壹岐守様ニ表間柄付りハ、右の趣ハ申達り様にと被申り由申上り得ハ、右御願書被差出等之御届迄を被仰達方可宜り、自然御取直等有之り得ハ、殊之外埒明不申、もつれ立申事御座り、右式之儀付り、脇方に有る者何角と被成御方杯表有之り得共、此御方御家之儀ハ前々より諸事堅キ御家之御事御座り得ハ、不成儀ハ其譯薩摩風につんと御申被成方宜御座り間、其御心得被成り様にと被仰り、

上總介様御相談之上可被仰上杯と之御文言に有る太守様御働表無之筋に相聞得おもたれり積に御座り、其段ハ御差扣有之可然と存候、別紙存寄案文之通御書被成り得ハ、都る之儀に相掛於御向表御察被成御座事にあり、其上太守様御働之筋に宜り旨被仰り付、逐

一御尤奉存外、御丁寧段々御案詞等表被成、思召寄之程をも被仰聞外段、則大隅守に表可申聞外、至私共御了簡被仰下安堵仕外由申上外得者、此方様之儀ハ公方様御用御同前存罷在外、何ケ度表御相談之趣ハ存寄申上心底御座外旨、被仰外御歸宅被成外、

一右御案文早速 太守様被遊御覽外、弥此通相認御間柄付外ハ酒井讚岐守様・水野壹岐守様に李御使被仰付、右之通御届一通り之御口上申上外様こと被仰付、壹岐守様に若則晚李參上仕、御用人に取合、李御使者に被遣外、御用之儀何とそ御直に被聞召被下度旨御口上申上外處、則御逢被成外付、右案文之通丹波守様に左近將監様に被差出答外、此間遂御内談置外付外ハ、此段御届に被遣外段申上、右書付御覽被成、何そ思召寄も無之、弥思召之通可有之由被仰聞外、右御案文之内存寄外儀有之外とえ御文言付外者、思召之譯表有之外哉と御尋被成外付、成程其通に御座外、此内御相談被仕外節迄ハ相知不申外、以後段々相糺申外處、大隅守若年之節

竹姫君様御縁談之譯表有之外、然共其趣申上外儀共爰元書留に者無之、薩州にハ相知有之外と之趣、去御方

様に申上外、同前之趣具李より申上外處、如何様以前に被申出置外趣表候ハ、夫々結不申外得ハ如何之儀外間、其通に表可有之儀外由被仰聞、左外ケ様之儀者一門中抔に表申談事外得ハ、急にハ何分と難被申上答外、右御届被仰聞外書付何そ思召寄も無之、被入御念儀被思召外由被仰聞外付、御相應御挨拶申上御暇仕外、

一讚岐守様にハ右之一巻初る被仰進外付、八日晚御留守居を以御内々御間柄付被仰進度儀有之外、嶋津李を以可申進由御案内被仰進外處、明九日晝時過御退出被成外間、其考に御使者可被差越由御返答有之外付、九白晝時讚岐守様に李參上仕、御用人粟栖清左衛門に取合同公仕外段申達外處、未御退出無之外間、相扣外様こと申聞外、然處押付御退出被遊、右清左衛門を以只今御退出被成外、則御覽可被成外間可罷出旨承知仕外付、御用筋之儀者右清左衛門を以可申上哉之旨、清左衛門に相尋外得ハ、被懸御目外間直に可申上旨申聞外付、則御前に罷出外處、御近參上仕外様こと御意外付、御側に參上仕外ハ、御用之儀御間可被成由被仰下外付、最前御内意之趣則日御答被仰上外次第一々申上、左

ける此度被仰上り御案文之趣申上りへハ被聞召達り、
被仰出趣其通ニ可有之由御返答ニ御座り、左り存
寄り趣有之り之御文言之所ニ付る、御疑被成り御も
やうニ被成御座り付、此儀付るハ以前ニ

竹姫君様、大隅守に御縁談之御沙汰有之りと覺罷在り
及有之、書留等爰許に無之、薩州にハ右類之書付御座
り間、取寄りる以前之儀をも得と見合、其上ニ又々
何分ニ及左近將監様に申上了簡ニ御座り通、壹岐守
様に御咄申上り次第之通ニ申上り得ハ、夫ハ其通可有
之り、御届之御書付御覽被成、何ぞ思召寄無之、被入
御念り儀り旨被仰聞り、左りる只今御咄申上り先年之
次第不相究儀ながら書付りる、明朝持參可仕旨被仰付
り付、此儀ハ書付杯ニ未申上儀ニハ無御座り、
此御方様之儀者御問柄之儀御座り故、内々之儀迄及私
方申上事御座り、中々書付りる差上申程ニハ御當地に
ハ相知不申、只覺迄之事ニ御座り通申上り得共、夫共
ニ他に御沙汰被成儀ニ無之り、御考迄ニ成事り間、
必書付差上り様ニ被仰付り付、再三御斷申上りるも
右之通 御意り付奉畏り、不究儀ながら書付りる、明
朝持參可仕旨御請申上御暇仕り、然處押付明朝持參仕

り書付ハ、封りる持參仕り様ニ讀岐守様被仰付り由、
御用人より申來り、右之次第 太守様に申上、右書付
別紙之通相調封りる、今朝讀岐守様御宅に持參仕、御
用人大森十左衛門ニ差上り處、御目見可被仰付と
思召り得共、今朝者御用ニ御取掛被成り故、御覽不被
成旨右十左衛門ニ被仰下り付、御禮申上罷歸り、
一 右御請御延引之御願書、丹波守様ニ左近將監様迄御
出被成度り間、此方に御出被下度旨、一昨日 太守様
方被仰進、今日丹波守様芝御屋鋪に御出被成り付、
太守様より御直ニ右御書付御渡被成り處、早速左近將
監様に御持參可被成由ニ丹波守様御立被成り、左り
る左近將監様に被差出り處、御請取置被成り、相替儀
無之り、此段 太守様に可申上旨丹波守様被仰付り由、
鳥居頼母より以手紙申越り付、右紙面之趣則 太守様
達 貴聞置り、右御願書無吳儀御受取置被成、先頂上
之儀 思召候、

右之通追り何分と被仰上り儀御延引被成度旨、今日
左近將監様に被仰上被聞召置り付る、此段早く可申
越旨御意り付、極急飛脚差立右之次第申越り條
總州様に可被申上り、右御用筋付るハ飛脚便を以段

申越通外、然共

太守様思召之程被仰進、早竟

總州様思召之趣御承知爲可被成、木村四郎左衛門に

御使被仰付、明十一日急之被差立筈外間、追々着

仕、委細之譯可申上外、四郎左衛門事致着外其

元之御用差可有之事外間、得と相仕廻外可被差

立外、且又右御用筋之儀ハ御内之事外故、爰許

之ハ首尾仕外、筆者差差分置手廣不仕事外、此段差

各爲御心得外、以上、

四月十日

平岡内匠

伊集院藏人

鳴津 全

鳴津將監殿

鳴津大藏殿

鳴津中務殿

樺山主計殿

種子嶋彈正殿

比志嶋隼人殿

寫

竹姫君様前、御縁組有之得共、其以後御相應之儀差無

御座被遊御延引候處、私儀妻女死去其後縁組差仕外付

之、御相應ニ被思召外、御入輿之儀可被 仰出と被 思

召外、且又去年妾腹男子出生仕外、御縁組以前出生之儀

外間、

竹姫君様御入輿男子御出生被成外共、去年出生之男子を

嫡子仕外様こと被 思召外、右之通 御内意被 仰出外

付、松 左近將監殿以御自分御書付被下致拜見、誠以被爲

思召附 御内意被仰出外段重疊冥加之至、難有仕合奉存

外、早速御請可申上儀御座外得共、乍憚存寄之儀御座外

故、暫御請延引可仕外、此段左近將監殿に宜被仰達可被

下外、頼入存外、委曲追之可申上外、以上、

四月十日

松平大隅守

鳥居丹波守殿

(朱)

〔右者 太守様思召之趣去御方様江御内談申上外上、去御方
様右之通御案文被成、右御案文之通認被仰付被差出外〕

(08)

妾事嫡子出生以後妻と申筋之ハ無御座外得共、嫡子之

母故重ク致置、家來等を差夫之ニ附置外、然處此度
竹姫君様被爲入外之及右之通御座外得ハ、私宅に被爲

入_レ迄_ニの詮_テ無御座儀、差當御請難申上難儀仕_レ、此上御斷申上度奉存_レ、

(朱)

「右_ニ御國許より書付參_レ而、仰立_ニ不罷成儀_レ者、右之通

御申被_レ成可然哉と考付_レ付而、御案文相調御持參被_レ成_レ

由_ニ而、去御方_ニ遠御渡置被_レ成_レ」

(09)

先年大隅守_ニ江竹姫君様御縁談之御沙汰爲有之由、覺罷在者_ニ委御座_レ得共、委細之趣又老年間等相知不申_レ、國元_ニ江ハ右類書留日記等御座_レ、縁組之儀付_レハ

一位様達 御聽_レ儀共有之_レ由、爰許書留_ニ相見得申_レ得共、是_ニ委如何様之譯相知不申_レ付、國許_ニ江申越_レ間、

追_レ何分と相知可申と奉存_レ、右之次第御座_レ故、只今究_レ之儀難申上_レ、此段申上_レ、以上、

四月十日

(朱)

「右_ニ者讃岐守様_ニ江李持參差上_レ、書付右之通_レ」

(010)

嶋津_(久武)李殿事 御參府脇御暇被_レ下置_レ得共、

益之助様御宮參御用、李殿・藏人殿_ニ江被_レ仰付置、去_ニ二日

御宮參_ニ相濟_レ付_レ而、近_ニ被_レ差立_レ善_レ得共、此節飛脚を以_レ段_ニ申越_レ次第之御内用_ニ有_レ之_レ處、藏人殿長_ニ病

氣_ニの當分出勤無之_レ付_レ而、右御用筋片付_レ迄_レハ、先全殿一往被_レ差留置_レ、此段各爲御納得_レ、以上、

四月十日

平岡内匠

御家老中

(011)

一筆申達_レ、總州様 信證院様 於須磨様_ニ御安康被

成御座、奉恐悦_レ、於御當地_ニ表

太守様 益之助様 大御前様御機嫌能被_レ成御座、重疊恐

悦至極奉存_レ、然_ニ者從

太守様總州様_ニ江被_レ仰進御用之儀有之、木村四郎左衛門_ニ江

御使被_レ仰付、三道中急_ニの今日被_レ差立_レ、委細之儀_ニ江四

郎左衛門より申出_レの可有之_レ、恐惶、

猶_ニ以四郎左衛門事肝要成御用之儀_レ故、返駕籠被_レ下、

尤御賦方之儀_ニハ現人急料被_レ下、現外_ニハ靜料被_レ下被_レ差

越_レ間、其元より被_レ差遣_レ節_ニ其通被_レ仰付_レ、以上、

四月十一日

之品

久矩

久武

嶋津將監殿

嶋津大藏殿

吉貴公御譜中
寫正文在文庫

(の1) 今日西之御丸様こゝろ秀小路様御口上

竹姫様御とし若さまこゝろにて、御相應もなく數年御くらし被成、

公方様ことのほか御くろふさま思しめしゆゑ、就夫幸大隅守様おく方様も御座なくゆゑ得ハ、先達ゆゑにて御内々も御座り得共、

一位様へ御たのミ被成ゆゑ付、今日私めし、此段申せとの上意こゝろにて御さゆゑり、

公方様ことのほか御かうくにあそハしゆゑへハ、ふん家せう院様御同前に 思召ゆゑり、尤

竹姫君様御きりやうハ勝かねゆゑ共、ことの外に御はつめいさま御やうしやうさまより御覽被成ゆゑりへハ、

一位様へも御かうくさまに被成御座ゆゑり、何とぞ御かたつけ被成進しゆゑられたく思召ゆゑり、先ねんも上總介さま此事御斷のわけも

一位様御そんしゆゑにて御おほへあそハしゆゑり、此たひも又々御斷の御すしにも罷成ゆゑり半とおほしめし、今日佐川めし、そのたん具に申せとの御事御さゆゑり、御國元はるくにて

りへハ、さつそく御うけも成かたく思召ゆゑりへハ、道筋も

外にちかき道も候よし御そんし被成ゆゑりへハ、其道筋を仰つけられ、はやくそのうち御うけ仰上られゆゑりやうに、お

くさまよりもくれく御頼被成ゆゑり、それゆへかつさ之介さまへ文こゝろにて申せとの御事ゆゑりへとも、おくさま内見被成

りへハ、とくと此事につき 上總介さま此たひは御聞とゞけ御うけ仰上られゆゑりやうに、くれく御添書頼おほしめしゆゑり、尤天下、姫君様こゝろハハへ共、時節からにゆゑりへハ、

事かるく被成ゆゑり様おほしめしゆゑり、御ほん丸女中使の事も一位様御せわさまにて御あけ被成ゆゑりへハ、いよく御本

丸さまへ此後御ちかくしきを御悦被成ゆゑりとの御事に御座ゆゑり、

朱力キ
享保十四年 卯月十一日 佐川

(の2)

書付に申上り内、書落し又申上り、秀小路さま被仰りハ益之助様御事、たとへは

竹姫君様御入被成ゆゑりて、末くとても御惣領さま被成り半ま、此たんも御あんし不被成様こゝろの 上意のよ

し申せとの御事御座ゆゑりゆへ、私申上りへハ、歸り得と可申聞り、乍然只今とても上總介兩人大隅守家中一道に嫡子

の取もちいつれも存居り、妾母とても筋目もいやしからぬ人にて侍得ハ、大方只今の取持も御さたなきはかりに、御座りぬ、召仕も夫く御座りぬ、栖居なとも前に餘り替り無御座り、今日私めしりハ、大切の御用仰付られ、文にてハ一言のあやまりにても大事り故、佐川めしとくと申合りへの

上意にて侍間、一々御覽外哉と返く被仰り故、成ほど御大切御用仰付にて侍へハ、失念なく歸り可申聞ひま、御用濟にて少もはやく忘不申内、御いとま申上りと申立りへハ、暫扣りへの御事、とかく御祝なされめてたく御料理いたゞきりへの事り故、御断申りへ共御留被成、先に書付申上り通りの御料理にて侍、以上、

十一日

佐川

全御請中

正文在文庫

尚く御それさま御無事の事きかせられ度覺しめしり、めてかしく、

一位様寄申せとの御事ニ御座り、

竹姫君様御ゑん組の事御内意御座りハんと覺しめしり、

それニ付

文昭院様御代ニ其御家へ御ゑん組の御内意仰出されり時分ハ断仰上られり御様子

一位様能御覺あそはされりゆへ、さためて此度御内意御座りハ、御断仰上られりハんと御きのとくに覺しめしり、それニ付其御家の御事は

一位様にもつねく御大せつニ覺しめしりゆへ、此度は御うけ仰上られりやうにとひとへにたのミ覺しめしり、竹姫君様御事

公方様ことのほかく御くろうニ覺しめしりゆへ、こなたへも此度の御ゑん組首尾よくとのいりへかしと覺しめしりニ付、

一位様寄御内意御それさまへ仰遣され^{本マ、シ}んしられりやうニ御たのミあそはされりゆへ、何とも御もたしあそハしかたく覺しめしりゆへ仰遣されり、つねく

公方様方

一位様御事ハ大せつニ御ねん比にあそはしりゆへ、かやうニ御内意御たのミあそハしり御事ゆへ、御それさま覺しめしも御きのとくに仰被遣りも、如何しく覺しめしりへ共、右之段も御聞とゞけ被成御内意も御座りハ、御

うけ仰上られり様にと

一位様此事ひとへに／＼たのミ覺しめしり、たゞ今の御時せつニ御座りへハ、萬事

公方様仰御そむきあそハしかたく、何もく

文昭院様御名代と覺しめしならせられり御事ニ御さりたま、此度の御事も

文昭院様仰出されと覺しめしり様こと、此事かすくたのミ覺しめしり、

一位様にもその御家へ幾ひさしく御つゝき御座り様こと覺しめしり、

竹姫君様御事

御兩親様も御座なく、御やうせうさま

一位様御なしみあそはされりへハ

御妹君様御同前ニ覺しめしり御事ニ御座りまゝ、此御返事仰しんしられり様、私寄申せとの御事ニ御座り、めて度かしく、

朱カキ
享保十四年酉四月十一日

松平

かつさの介さまにて

誰にて御申

秀小路

カ

2195
吉貴公御譜中

寫正文在文庫

四郎さまもん用の事にて御たてりまゝ申上り、御機嫌能御座なされり半と、めてたくそんしまいらせり、爰許大隅守殿 益之助殿もきけんよく、てまへもそく才くらしまいらせり、さて又

一位様より十一日ニ佐川御用御座りとの事にてめし、秀小路殿御あい

上意にて

竹姫君様御事、大すミ殿内ゑんの事御ねん比さま、此書付の通の御口上くわしく佐川に被仰付り、其御ほとさまも

上意にて仰付られ、秀小路とのよりケ様ニ御書付参り、わたくしより内見いたし、添書もいたし御届りへとの事にて御座り、此事ニ付てハ大す(續豊)ミ殿もことの外こまり入りて、何とそわたくしより御断の御座りやうにいたし度と、くれ／＼わたくしまてたのミの事ニ御座り、

なをく此度の事さそく御くろふの御事り、御同前に有かたき

上意なからも行あたりまいらせり御事ニ御さり、と

かくく何分にも御了簡あそハし、よろしきやうに

御斷のすしニいたし度よし、大すミとのよりわたく

しへくれく申されり、かしく、

朱カキ
享保十四年 酉卯月十三日

ふ

誰にても御申

2196 繼豊公御譜中

繼豊每ニ述職ニ、獻下領國所ニ産之馬於

幕府上、故今茲四月十八日從ニ先蹤ニ、獻上龍蹄二匹于

大樹吉宗公、同一匹于

大納言家重公、

2197 全上

正文在文庫

御馬二疋被獻之候、遂披露外處一段之御仕合り、恐く謹

言、

(朱)
「享保十四年」四月十八日 乘邑判

在口裏

松平大隅守殿

在右裏

松平左近將監

乘邑

2198 全上

御馬一疋被獻之外、遂披露候處一段之御仕合り、恐く謹

言、

(朱)
「享保十四年」四月十八日 信友判

在口裏

松平大隅守殿

在右裏

安藤對馬守

信友

2199 繼豊公御譜中

宮正文在文庫

(01)

總州様は 太守様より被仰進り覺

御入輿御斷之儀御國許に有之り書留、詮相立事ハハ、

其趣を以御斷可被仰上り、乍然此節 一位様より仰之御

文之趣ニ由る、以前之儀者詮ニ不相立杯之御沙汰及り節、

其上ニ由り又當時輿向おかく殿重ク御取持被置り趣、去

御方様御案文之通を以、及兩度御斷被仰上義及難被成筈

ニ被思召り、左り得る御國元ニ有之り書留、詮ニ相立事

ハハ、其趣と去御方様御案文之通兩様一所ニ御斷被仰

上り筋可宜と

太守様ニ考被 思召り間、右之趣を以何様ニ及御斷相立

外様ニ御了簡被成被進度被思召外、とかく 總州様方

一位様ハ御返事之趣ニ引結外様ニ

太守様より御斷可被仰上事ニ被

思召外、以上、

癸卯年

享保十四年

四月十九日

(02)

一筆申達外、 總州様 信證院様 於須磨様弥御安全被
遊御座、奉恐悦外、於御當地表

太守様 益之助様

(吉貞室、松平氏)
大御前様御機嫌能被成御座、重疊恐

悦至極奉存外、然者

太守様より 總州様ハ被仰進御用之儀有之、木村四郎左

衛門ハ御使被仰付、三道中極急ニ有今日被差立外、委細

之儀者四郎左衛門より申出ニ有可有之外、恐惶、

猶々四郎左衛門儀、肝要成御用之儀外故、駕籠被下、

尤御賦方之儀ハ現人數急料被下、現人外ハ靜料被下

差越外間、其元より被差越外節表其通可被仰付外、

以上、

四月廿日

之品

久矩

久武

鳴津將監殿

鳴津大藏殿

(03)

竹姫君様御縁談御内意之儀付有、從

太守様 總州様ハ被仰進御用之儀有之、委細者木村四郎

左衛門ハ被仰合、去ル十一日曉御當地被差立外處、同日

一位様御方秀小路様より佐川御用之由前晚被仰下、十一

日罷登候處、右付有

總州様ハ

一位様仰御文を以、秀小路様より被仰進趣有之、右御文

大御前様迄被進外付、大御前様御覽被成、御文之趣御

承知被成外、御文薩州ハ可被差遣由秀小路様迄御請被仰

上置外、右御文之儀者四郎左衛門便被差遣被仰進等之趣

も有之外、然者四郎左衛門儀十一日曉被差立候處、同日

八時以後右御文佐川ハ御渡罷歸外付、早速追飛脚差立外

ハ、四郎左衛門箱根御關所不罷越内追付可申と之吟味

故、四郎左衛門被呼歸等ニ有、十一日追飛脚差立候處、

山より内ニ有追付不申、漸江州水口ニ有追付、水口ハ四

郎左衛門罷歸、昨晚江戸ハ致到着外、依之今廿日右御文

四郎左衛門ハ御渡被成、右付有御用筋之儀者委細被仰合、

今日又々四郎左衛門極急ニ被差立リ、尤

一位様より之御文御請之儀、日數往返之考致リ處、往來六拾二、三日之考ニ有、御延引ニ及不罷成事候故右之通外、十一日ニ四郎左衛門に被相渡リ御用筋之書付ハ、不書改十一日日付ニ其儘差越リ、委細之儀ハ四郎左衛門より申出リ様ニと申合ハ、旁爲御納得リ、以上、

四月廿日

平岡内匠

伊集院藏人

嶋津 全

嶋津將監殿

嶋津大藏殿

嶋津中務殿

樺山主計殿

種子嶋彈正殿

比志嶋隼人殿

(の4)

一此度 竹姫君様御入輿之儀、左近將監様より御内意御

座外付有、

太守様別る御込入被遊、此儀ハ幾重ニ及御斷被仰立度

被 思召外間、御斷之詮相立外儀私共吟味仕、可申上

旨被仰付外、御斷之儀何様可被 仰出哉と 御堅慮被遊御事御座外、

一右御堅慮之程乍憚御尤至極奉存、折角申談委細飛脚便又若此節木村四郎左衛門に及申合遣申外願ハ、御斷之詮ニ罷成外儀、以前之書留ニ有之外得者至極頂上之御事外、書留ニ御申立之詮不相得譯ニ外ハ、去方様御案文之通、おかく殿を重く御取持被置外趣ニ有、御斷被仰出外無御座筈と奉存外、

一先年御斷被仰上置外趣、此節御斷之詮ニ相立外儀有之外有、其段迄を以御斷被仰上外有及、萬一以前之儀若其通ニ及可有之外、當時之事外ハ何れ御請不被仰上外有、不叶事と御沙汰及有之外節ニいたり、おかく殿重く御取持被成置外趣、右之通去方様御案文之通之御斷遊ニ二重ニ被仰上事ハ難成積ニ存外間、先年御斷被仰上外趣ニ、去御方様御案文之通を取加、一所ニ御斷被仰上方、宜有之哉と奉存外、此儀其元ニ有及能く御相談被成度外、

一一位様より 總州様に御書付を以被蒙 仰外趣付有、

總州様より

一位様御方に御斷被仰上筋ニ不違様引結 太守様より

之御斷表御一同ニ無之ハ不叶筈ハ、專此儀者御考可有之事ハ、

一御辭退難成次第成立ハ得ハ、御請無是非被仰上外無之ハ、左ハハ先ハ御物入ハ勿論、其外難被成儀共ハ大分之筈御座ハ、公義ヨリハ當時之儀ハ間、輕被成ハ様ニト社可有御座ハ得共、當御屋鋪迄ハ相調、縱御屋敷外ニ出申ハ表、御殿之御作事御附之衆罷居ハ作事ニ至リ、御太粧成御事御座ハ、御入與有之ハ得者

御城ヨリ御客繁ク有之事之由ハ得者、御作事表只今ニハ難相濟、御客會釋之女中表新規ニ不被仰付候ハ者不罷成、芝高輪共ニ奥外男女共相重、何篇御物入打重リ、御内外御不勝手之御事而已御座ハ處、右之通高輪迄表手廣成立可申事ハ、

一益之助様御出生之御事ハ得ハ、御入與以後 姫君様御腹ニ御男子様ニ表御出生被遊ハ、御二男様之積ニ者御内意御書付ニ相見得ハ共、連ク

姫君様御愛念表御附、漸ク御成長被遊ハ所ヨリ、二葉立申事共ニ成立リハ乍憚不可然事ハ、 姫君様御威光を以ハ右之通有間鋪事トハ不被存ハ、然時者重半御

腹之 御子様と申御事ニ立乘ハ、以後ハ中々御家中ニハ難被成筋共ニ者罷成間鋪哉、末々之儀難計御難題之儀と奉存ハ、萬一御斷立不申事ハ、別御殿を被相構御作事有之、御入與被爲成、名ノミ計之御事共ニ乍御請、御頼被成外ハ御座有間敷哉と奉存ハ、此節之儀別ハ御難題之御事ハハ、ケ様成御用筋承知仕ハ儀私共前後有之間敷と心苦仕ハ、先ハ之儀不相見得儀ながら大切成儀御座ハ付、各考之前ニ者可有之ハ得共、右之次第内ハ申越ハ間、專各御了簡有之、猶御相談被成候ハ御斷之筋相立ハ存寄宜次第表御座ハ、總州様ハ被申上、此方ハ可被申上ハ、右段ハ之趣者太守様入御覽ハ上ニ差越申ハ、猶四郎左衛門表御聞届可被成ハ、以上、

四月廿日

平岡内匠

伊集院藏人

嶋津 全

嶋津將監殿

嶋津大藏殿

嶋津中務殿

樺山主計殿

(05)

四郎左衛門口上之覺

一位様より 仰御文付る 總州様を御請之儀 御口上書を以、西御丸御用人衆迄被差出可然り哉、又老御文を被差越 大御前様御添文を被差出事を及可有御座り哉、右付る老御斷之趣を社、可被仰上と奉存り、御口上ニ被成りハ、西御丸御用人衆に此方詰合御家老御使者を以被差出りハ、乍尤御用人衆にハ御逢被成り様と申上、總州様思召之趣御直申上 御口上書及御直ニ差上り様可被仰付り哉、右之通被遊事ハ、御家老之儀老態と御國元より被差越筋共ニ及可有御座り哉、御堅慮及可有御座り得共、爰元を申談り趣各迄申達事ハ、以上、

四月廿日

(06)

四月廿一日御國許被差立り極々急飛脚貳人、五月七日到着、御用左之通

一去七日其許被差立り極々急飛脚貳人、今日九時前致到着り、然老去六日芝御屋敷に鳥居丹波守様御出、御家

老に御逢可被成旨被仰り付、空殿被罷出候處、松平左近將監様を御内意被仰達儀有之、太守様に御逢可被成由被仰り付、大守様御逢被遊り處、竹姫君様前々御縁組有之り得共、其後御相應之儀及無之御延引り處、此御方 御前様御逝去以後御縁組及無之り付、御相應と被思召候、御入興之儀可被 仰出と被 思召り、去年御妾腹御男子被成御出生り、御縁組以前御出生之事り間、竹姫君様御入興御男子御出生候り及益之助様を御嫡子被成り様と被 思召候、右之通御内意可申聞由被 仰出り通、別紙之御書付左近將監様を御渡被成り旨、丹波守様を御承知被遊候付、難有被思召り旨先御挨拶被仰達、左り御書付を以丹波守様を被仰上りハ、左近將監様より御書付之趣委細御承知難有被 思召候、早速御請可被仰上り得共、追り何分ニ及被仰上度 思召り、先此段左近將監様に被仰達被下度由、御書付丹波守様迄御渡被成り處、早速左近將監様御宅に御持參可被成旨被仰、御立被成候、去七日丹波守様御家老鳥居頼母を各迄申越りハ、昨日之御書付左近將監様に御持參被成、御直ニ御申被成り處、御挨拶御様子及能御座り由、太守様に被申上り様ニ

と可申越旨、丹波守様被仰付由の頼母申越付、其段被申上置り、右付る 太守様御意り者、先御内之儀ながら難有被蒙 上意り、然共右御縁組之儀者何とぞ御斷可被仰上と被思召り付、御斷被仰上り次第、各申談可被申上旨 御意り得共、御懇之 上意りあり得者被申談り迄の者難被申上り付、去御方様に御内思召寄之程御尋被申上外、有之間敷と被申談、則夜去御方様に内匠殿小屋の御出會被仕、右 上意之趣付る、太守様思召之旨を以、御内談被申上り處、右御内意御書付ハ左近將監様去御方様に被仰付御調爲被成事り、別紙御書付之通 竹姫君様御入與被遊りゝ表、去年御嫡子御出生以後之御縁組の候得者 竹姫君様御腹の御男子御出生被遊りゝ表やはり 益之助様を御嫡子様可被遊り、此儀者 公方様兼り 竹姫君様に御相談之上、右之通御座り、御妾之儀者御部屋の被成御座り得者、何ぞ御差支不申答り、右之通分る御懇之 上意りあり得者、御斷可被仰上手筋思召寄無之、尤御身帶向難被續なと、被仰立り儀も難成答り得ハ、右之外ハ少及思召寄無之旨被仰聞り由、其外ハ御尋被申上御挨拶之趣、且又右

付る水野壹岐守様に及全殿御使者の、右御内意付る者御斷被仰上度被思召り趣、御直被申上候處、壹岐守様思召及去御方様思召同前なる相替儀無之、御斷之詮相立り儀を不被仰上り得者罷成問敷り間、今少御了簡被成り様可申上旨被仰付り由、且又何分と被仰出り儀、御延引之御願去御方様に被申上、御願を被立御延引之筋不被差障譯表りハ、酒井讚岐守様・壹岐守様に御内談被仰達り上、被差出答り由、委細段々之次第被申越趣致承知被差越り書付大藏早速磯に持參、隼人殿に申達被差越り書付、且又別紙御書付寫兩通之趣隼人殿より總州様被達 貴問候處、一々被聞召置り、右付る被思召上りハ、此節御承知被成り御書付之趣、分る御懇之被蒙 御内意候付る者、其通ニ社、可有之儀と被思召上り、外ニ 總州様思召寄無御座り、乍此上酒井讚岐守様・水野壹岐守様・去御方様などへ御相談之上御斷之筋表可有御座り哉、壹岐守様・去御方様御同前之御挨拶ニ候ハ、讚岐守様ニ及御同前之御挨拶ニ社、可有之り哉と隼人殿に 御意り由致承知り、右御縁組之儀御太粧之儀ニハ候得

共、御子孫至のハ結構之御儀ハ由 御意被遊ハ旨申越

ハ様ニ事人殿ヲ承知仕ハ、

一先年 竹姫君様ハ御縁組之儀御内意之節、段々被 仰

出置ハ趣有之、右付之書留其元ハ無之ハ、爰許ハ書

留可有之ハ間、早々可差越旨被申越、此段ハ紙面之趣

被聞召上、右書付之儀共、此節之御用ニ罷成書付ニ

老無之ハ間、差越ハ儀無用仕可然ハ、其元ハ右之通

總州様御意ニ、不差越段申越ハ様ニ被仰付ハ付、

右書付差越不申ハ、左様御心得可被成ハ、

右之通 總州様御意之趣承知仕ハ付、早々申越ハ間

宜被達

貴聞ハ、右御用筋之趣ハ專

御賢慮ニ罷成筈ハ故、極々急飛脚海陸ニ手ニ申付、

今晚差立遣ハ、以上、

四月廿一日

種子嶋彈正

樺山主計

嶋津中務

嶋津大藏

嶋津 全殿

伊集院藏人殿

平岡内匠殿

(07)

一去十日其許被差立ハ極急飛脚兩人、昨夜中致到着、御

用得其意ハ、然共松平左近將監様ハ鳥居丹波守様ニ

太守様ハ御内意之趣有之、右付之左近將監様ハ御書付

を以丹波守様ニ被仰達置ハ趣共、去七日極急飛脚海

陸ニ手ニ差立御返答申越ハ、追々可相達ハ、先便被申

越ハ通去御方様去八日御出ハ付、被仰付ハ趣を以御内

談被申上ハ共

太守様御若年之節

竹姫君様御縁談之趣御座ハ付共、委書留等共有之筋

ニ覺罷在者も御座ハ、先夜御内談申上ハ節ハ、急成儀

ニ右之存付無之、其後吟味仕ハ處、右書付薩州ハ有

之ハと覺罷在ハ、爰元ハ右書留相見得不申ハ、乍然

右御縁談之儀付共、先年

一位様ハ申上置ハ儀共、爰元書留有増相見得ハ所表ハ

付、兎角子細有之様子ニ相見得ハ、最前之首尾ニ結不

申ハ共如何と被存ハ間、御請之儀延引之御斷申上度

大隅守所存御座ハ故、右之趣を以申談、一通り書付相

調申ハ、何分ニ及御了簡被成被下度被存ハ旨、本殿・

内匠殿方被申上外處、左様之儀有之外哉と御驚之躰ニ
 而、右通之儀有之外ハ、

一位様御方迄ニ御申外而及能外由被仰外而、則御案文
 御調右御案文之通ニ可相濟事と思召候間、明後十日
 丹波守様ニ左近將監様は御出可被成外、御請取被成
 外と有之外得者、御延引之御願爲相濟事外、其外ニ何
 ぞ御挨拶者無之筈外由被仰外故、御尋被申上外ハ、二
 三ヶ月間有之外而及不苦儀ニ可可有之哉と被申上外得
 ハ、其段ハ不苦事外、今朝被思召付外趣付而、御案詞
 御調御持參被成外、御國元より書留參、御見合之上仰
 立難成筋ニ外ハ、右御案文之通御認御出被成可宜敷
 と被 思召外、其上者御吟味次第之事ニ可有御座外、
 御國許より書付參外ハ、又々御相談可申上由被仰外
 付、讚岐守様・壹岐守様は及右之趣可申上由被申上外
 處、右御願書被差出外迄之御届被仰達外方可宜外、御
 案文御取直有之事外得者、埒明不申もつれ立申儀ニ外、
 脇方ニ有者何角と被成御方表外得共、此御方御家之儀
 者、前々方諸事堅御家之御事外得ハ、不成儀者御申被
 成方宜敷外、 總州様に御相談之上可被仰上外と之御
 文章者 太守様御働及無御座筋相聞得外間、其段者御

差扣可然と被思召外、別紙思召寄御案文之通御調被成
 外ハ、都而之儀ニ相懸り御察可被成事外、

太守様御働之筋ニ有宜外由被仰聞外付、御丁寧段々御
 案紙等及被成、思召寄も被仰聞外段、大隅守に及可申
 聞外、私共ニ及思召之程被仰聞、案堵仕外由被申上候
 處、此御方様之儀者公義御同前ニ思召外付、何ケ度及
 御相談之趣者思召寄被 仰聞御心底ニ外由、被仰聞御
 歸被成外、依之右御案文早速被達 貴聞、弥其通相認、
 讚岐守様・壹岐守様に、全殿御使者ニ有御届、一通り
 之 御口上可被仰達旨被仰付、壹岐守様に全殿御使者
 被相勤、御逢被成外付、右御案文之通丹波守様ニ有左
 近將監様に被差出筈外、此間被逐御内談置外付、御届
 被仰達外段、御直ニ被申上外處、御書付御見届思召寄
 及無之由被仰聞外、御案文之内存寄外儀有之外と之御
 文談ニ付、思召之譯及有之候哉と御尋ニ付其通御座外、
 此内者相知不申、其後段々相糺外處、大隅守若年之砌
 竹姫君様に御縁談之儀有之外、然處其譯及元は書留ニ
 者無之、薩州に相知有之と之趣を以、去御方様に被申
 上外、同前之御答被申上候處、以前ニ被仰上置外趣及
 外ハ、夫ニ結外様無之外者如何ニ外間、其通ニ及

可有之儀、由被仰聞、左、右、ケ様之儀、御一門中、抔、
被仰談事候得、急、ニハ難被仰上、答、由、全殿被致
承知、由、通得其意、且、又讚岐守様、ハ右之一巻初、由、被
仰進、由、付、前、以御案内有之、全殿御使者被相勤、御逢被
成、由、付、最前丹波守様、ニ御内意之趣、有之、則、日御
返答被仰上、由、次第一、被申上、此度被仰上、答、由、御案
文之趣、被申上、被聞召置、由、御書付之趣、付、由、其、通可
有之、由、御返答、ニ、由、御案内、之内、存寄之趣、有之、由、之、
御文言之所、ニ、付、御疑被成、由、御様子、ニ、由、故、大隅守若
年之節、竹姫君様、ハ御縁談之御沙汰、有之、由、と覺罷在、由、
者、及御座、由、得共、書留、者、御當地、ニ、無之、薩州、ハ、書留
も御座、由、間、取寄以前之次第見合、其上、ニ、由、何分、ニ、及
左近將監様、ハ被申上、了簡、ニ、由、壹岐守様、御同前、被申
上候處、其、通可有之、由、御届之書付、何、を、存寄無之、旨、被
仰聞、左、右、由、唯今申上、由、次第書付、由、明、朝、持參可仕
旨、被仰聞、由、付、未、相、究、儀、由、故、段、御斷被申上、由、得、者、
他、ハ、御沙汰被成儀、ニ、由、者、無之、御考、之、被成、由、間、必書
付持參可仕、由、再、三、被仰聞、御請被申上、被罷歸、由、處、追
由、彼方御用人より申來、由、者、右書付封、由、持參可仕、由、
讚岐守様被仰付、由、申越、其、段、被達、貴聞、右書付被

相調致持參被差上置、由、旨、別紙寫相添被申越、段、得其意、
由、

一、御請御延引之御願書、左近將監様、ハ被差出、由、ニ、付、丹波
守様、御招右御書付御直、ニ、御渡被成、則、日、左近將監様、ハ
丹波守様、御持參被成、被差出、由、處、御請取被成、相替儀、
無之、由、此、段、太守様、ハ、可申上、旨、丹波守様、被仰付、候、由、
ニ、由、鳥居頼母、方、以手紙申越、由、付、則、被達、貴聞、由、處、
御願書、無、吳儀、御請取被置、頂上之儀、ニ、被思召、由、由、御
願書、寫被差越、被申越、段、致承知、由、

一、右之通、御延引之御願書、左近將監様、ハ被差出、御請取被
置、由、付、早、可申越、旨、

御意有之、極急飛脚、ニ、由、被申越、由、間、右之次第、總州
様、ハ、可申上、由、右御用筋付、由、者、飛脚便、ニ、由、段、被申
越、由、得共、

太守様、思召之程、被仰進、總州様、思召之趣、御承知、可被
成、ため、木村四郎左衛門、ハ、急御使被仰付、去、十一、日、被
差立、答、由、由、委細被申越、段、承知、仕、被申越、由、紙面之趣、
且、又御書付、寫、貳、通、全殿名書之書付、寫、壹、通、委細之趣、
隼人より紙面を以

總州様、ハ、被申上、被聞召置、由、右、付、由、

御意之段承知仕候旨趣、委細左ニ申越外、

一右之通

一右付の被 思召上外者、以前ニ被仰上置外趣有之外と、去御方様・讃岐守様・壹岐守様に及爲被仰達由外得ハ、

文昭院様御代爲被仰上譯及外と覺外者及有之外得共、何様之譯不相知

以前被仰上置外有筋を被仰上方可宜儀と被思召外、其節之御用係御家老者、當分者不能居事外得共、書留及有之 總州様ニ及御覺被遊外所及有之外付、別紙之通書寫被差越外間、別紙之趣を以去御方様に御相談を被遂被仰上、可然所を被仰上外方可宜と被思召外、

一左近將監様御方に被仰上外趣付の者

一位様に及先年被聞召上たる儀外得者、此節被仰上外

趣、先

太守様ニ者其節ハ御若年ニ御存知不被遊外故、筋違之事外の者如何ニ外故、御國元ニ被仰越 總州様被聞召上、此節委細之趣申來外、右之委細不相知事外故、此内御請御延引被成外、外ニ何そ思召及無御座外と之趣可被仰上外、如何様ニ及御請被仰上外筋と 總州様被 思召外間、去御方様に右之趣を以御相談被成、可然と被 思召外、御太粧ながら御奉公之儀御子孫之御爲ニも外間、御請御申被成外様こと被 思召上外、別紙之趣去御方様に御相談を被遂、思召寄有之外共、

一位様御方に御内々被仰上置外上、左近將監様御方にハ被仰上筋可宜と被 思召上外、萬一

上意次第畏可被遊と之趣者、必御申被成外様こと被 思召上外、

公方様より 一位様に御對談及有之外節、最前之次第委被仰上外譯御存知不被遊外へハ、御疑及有之、御挨拶及可難被遊儀外間、左近將監様御方に被仰上外趣者、先前以西丸御用人衆に被仰達

一位様被聞召上外以後、左近將監様に被仰上可然と被 思召外間、此段及申上外様こと

御意外、

上意之譯ニより 姫君様御縁組之筋ニ被仰付外ハ、御本妻被成御座外の及、御請御申不被成外の不叶儀外得者、御妾之儀付の者、其御申立者曾而罷成間銷外、

御本妻を被相除

嶋津大藏

姫君様を御縁組被成り例者有之事り間、右御案文之通

嶋津 左殿
伊牟院藏人殿

被仰上り儀ハ、必御無用被成可然と被 思召上り、

一致御供り御家老共之儀表、此節分ケる被蒙 御内意外

平岡内匠殿

儀付る者、別る結構之御事り間、此段忘却不仕様ニ可

相心得旨

(08)

御意外、

一寶永五年子六月八日堀源左衛門様より島津帶刀に被仰
聞りハ、間部越前守様拙者に被仰聞り者、竹姫様御
事を 又三郎殿に御縁組可被 仰出と御内々被 思召
外、直ニ表に可被 仰出事ニ表被 思召外、老中之筋
方薩摩守殿に存心之程御聞せり得者、乍御内意最早表
立り付、押る御請之趣杯ニ有之りハ 上ニ表永キ御
氣之毒ニり間、越前守帶刀を招キ、薩摩守殿御内存を
直承り様ニと之事り、右 思召之段申達、薩摩守殿内
存表りハ、不被殘置被申り様ニと帶刀に可申聞り、對
上意若押る御請被申上り譯杯ニりハ、 上ニ表御心
懸りに被 思召り付、源左衛門を以、御内意被仰下事
り旨、具ニ帶刀に可申聞由 上意之通被仰り付る、御
内々ニ表 上意之旨薩摩守に罷歸可申聞旨申上置り、
一家來帶刀被召呼、越前守殿より被仰傳り御内々 上意
之趣、早速帶刀申聞謹る奉承知、先以私悴又三郎に

右之通申越り様ニと 御意り付、此段申越り條被達

貴聞、各ニも可被奉得其意り、先便ニ申越り 御意

之趣者一通之儀ニ表委細 御意不被遊儀り得共、此

節之次第付る者右之通被 思召上り、木村四郎左衛

門事御使被差越由り得共、四郎左衛門に被仰付り趣

表、右之次第同前之儀ニ表可有之と

御堅慮被遊り、其節御返答可被仰進筋も此節 御意

之趣ニ相替儀無之、御同前之儀ニ表外ニ 思召寄無

之旨此段表 御意り、以上、

四月廿三日

比志嶋隼人

種子嶋彈正

樺山主計

嶋津中務

竹姫君様可被遣と被 思召外由、私式御縁家ニ可被召加と被 思召付外段、兎角可申上様及無之、難有仕合奉存外、右通之 思召之上者早速表より可被 仰出御事外處、若對 上意押の御請申上儀もりの者、御心懸りニ及可有御座と被 思召外付、源左衛門殿宅に家來を召寄、御内意之旨具ニ可申聞由 御詫之趣重疊御懇之儀可申上様及無之、難有次第奉存外、段々御懇意之蒙 上意外上者、何之思案ニ及不及奉畏外旨、早速御請可申上儀外得共、内存も外ハ、不差扣可申上由蒙 御内意外處、此義付の者實者存心有之外處、相包置何之内存及無之と、言葉と心と相違之御請申上儀心外之儀御座外、然者是非共内存之程不申上外得ハ、不埒明事御座外付、伏藏を不殘可申上と存外故、其旨帶刀に申含差進外間、得と被聞召届被下度外、 竹姫君様を不足奉存儀ニのハ無御座外得共、同者

(家意) 文昭院様御實子をと奉存儀御座外、御猶子を被遣外の及御實子を被遣同前難有可奉存旨、源左衛門様迄帶刀を以被仰達外、

一 源左衛門様御宅に帶刀被召呼被仰聞外ハ、薩摩守殿より拙者迄御伏藏を不被殘置被仰遣外趣、則越前守殿に

具申達外處、御請之趣承届外、薩摩守殿思召之段御尤至極存外、委曲可達 上聞と之御挨拶ニの、委細之譯達 上聞 御内意被仰遣外處、心底を不殘被申上外趣被聞召届、御滿悦被遊外、右件之儀最早御用捨可被遊外、此上者猶御縁家ニ可被遊と被思召外、然共當分差當相應之御見合者無之外得共、何れ相應之方及有之間敷ものニの及無之外間、其通相心得可罷在外、此段源左衛門所に帶刀を呼可申渡旨 上意外、

一 右之通御内約被仰出置外處、

文昭院様御他界以後島津帶刀を以、堀山城守様(正勝)に被得

御内意趣有之、山城守様ハ一位様に被相伺、帶刀迄被仰聞外者、此程薩摩守殿思召之通、又三郎殿御縁組者被成間敷と之御事、御丁寧と申ながら 一位様ニ者御氣之毒ニ被思召外間、相應之御縁組を御取組被成外ハ、御満足可被 思召外條、弥以又三郎殿御縁組之儀、相應ニ御取組可然外儀被 思召外と之御内意外、

一 右之通之御内意外故、松平長門守様御息女様に御縁組(毛利吉元)爲被遊事御座外、

以上

島津全殿儀 益之助様御官參之御用係被相仕廻、近々被
差立筈外得共、此節飛脚を以段々被申越外御内意も有之、
藏人殿者長々病氣ニ有當分出勤無之付、右御用片付外迄
者 一應被差留置外旨被申越趣致承知外、以上、

四月廿三日

島津大藏(久明)

平岡内匠殿(之島)

常式御勤事付外者、前後之差支者有之付故、日積之御考
有之事外得共、此節之御用筋付外者 上意之儀不輕事外
處、常式之通日積之御考ニ御請御申被成筋ニ有ハ、相
延申筈ニ有 上ニ及御待被遊筈之儀外條、此儀者日積ニ
無御構此飛脚相達外ハ、早速被遂御内談、無御延引被
仰上可然之被 思召上外由 御意外間、此段被達 貴聞、
各々左様可被相心得外、以上、

四月廿三日

比志嶋隼人

種子嶋彈正

樺山主計

島津中務

嶋津大藏

嶋津 全殿

伊集院藏人殿
平岡内匠殿

此書中宝永五年トアルハ、緒豊公御幼名又ニ郎ト申上、御年八歳ニ當レリ、享保十四年ハ二十九歳ノ御時ニ當レリ、考ニ供ス

2200

緒豊公御譜中
正文在文庫

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之候、遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ 享保十四年

四月廿三日

信友判

打口裏

松平大隅守殿

安藤對馬守

信友

2201

全上

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之候、遂披露候之處一
段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ 享保十四年

四月廿三日

乘邑判

打口裏

松平大隅守殿

乘邑

松平左近將監

(表紙)

追 録 舊 記 雜 録 卷 六 十 七	吉 貴 公	自五月
	繼 豐 公	享保十四年 至六月
	宗 信 公	

宗信公御譜中

正文在納戸方

公方吉宗公より

御納戸奉行に

(宗徳) 益之助様は

御刀 一腰 包水長貳尺三寸九分 代金五拾枚折紙有

一御三所物地赤銅斜子金三雙葉御紋彫

一御紐二重金

一御縁赤銅斜子

一御切羽金

一御鍔赤銅磨

一御柄白鯨糸巻

一御鞆黒塗

一御鳩目金

一御下緒紫

一御小刀越中守正俊

一御袋綴子緒紫房附

右考 竹姫君様御入與相濟外付

享保十四西十二月十五日

太守様御登

城右之御禮被仰上外處、御白書院御縁類に御老中様御列

座に在 (宗徳) 益之助様は右御道具御拜領之段 (吉貴) 總州様より之

御禮御名代阿部伊勢守様は、(正徳) 松平左近將監様より被仰達

御渡被成外、(宗徳) 益之助様御事未 御目見表不被遊外得共

太守様御入與之御禮被仰上外付、右之通御拜領爲被遊事

外間、右御道具之儀考

太守様御納戸御讓物之内に致格護、(宗徳) 益之助様御用之節

考可差上外、此旨至後年紛敷無之様帳面に及可記置外、

以上、

享保十五年戌五月

(平岡之品)

内匠

(伊集院久慈) 藏人

吉貴公御譜中

寫正文在文庫

一昨日佐川被召呼

一位様上意之趣上總介方へ御書付にて被仰下りとはり内
見仕、早々さしこしり様にと、佐川へ委敷 上意の通り
仰含られ承知仕、まことに御ねん比の御事難有奉存り、右
之事に付てハ御表方よりも大隅守^(稱)方へ御内意御座り段、
私にも大隅守より申聞承り、しかれとも右之御事に付り
ハ、たん／＼大隅守存寄の事共も御座りゆへ、すなわち
いか様共御うけ申上かたく、追ゐいつれにも御申上り様
こいたし度由、御内々御表へ申上おきり、上總介ね之御
書付國元へつかはしりハ、いつれのすしにも御請申上
へくり、

〔右之通大御前様より御文を以御請被仰上御返事 大御前様
に相下りり、御文ハ彼御方止可有之り〕

吉貴公御譜中

正文在文庫

(高津久武)
木工
(鳥津久實)
中務

全御譜中

寫正文在文庫

なを／＼御それさま御ふしの御事にてめて度存まい
らせり、くれ／＼上總之介殿より御うけも御申被成
りハ、そう／＼仰上られりよりもめて度かしく、
御文のやう忝存り、まつ／＼

一位様御機嫌よく成らせられり御事に御さり、さては一
昨日佐河此度の御用に付あかられ、くわしく
一位様 上意の通御書付にて、上總之介殿かたへ御それ
さまより御内見被成りて、御國もとへさう／＼ 上意の
とをり仰しんしられり様と、佐川へ段々くわしく申し
んしりハ、御ねん入御文のやう御序之節御さた申あけ
まいらせり、何とそ此上しゆひよきやうこと思しめさせ
られり御事御さり、めて度かしく、

本カキ
享保十四年

松平

上總介さま

秀小路

おくさま

誰にて申たまへ

なを／＼もとかはる事なく我にもふしにりま

心やすかへく^(る脱カ)り、めてかしく、
采女時受四郎さへもん参り外につゐて、せうそこひけん申外、い
 よくかはる事なく芝にても大すみの守・益之助無事の
 よし満足いたし外、しかれば
 竹姫君様御ゑんくみの事

一位様より御意のよしにて御ふみくたされ、そこもとよ
 りもよろしくそへふみこれあり外やうにとの事にて、く
 ハしくうけ給りとけ外、御ゑんくみの儀ハ別ぬく大
 壯の事そんし外へ共、たんくありかたくよんところな
 きしたいに外へハ、此上御断はなりかたくそんし外ゆへ、
 早速御請申上られ外やうにと此節申越外、そこもとより
 も其趣にて申聞られ、めてたくかしく、

朱カキ
 享保十四年

(島津吉貴)
 御名

高輪おく方

全御譜中

此御書總豊公御譜中ニモアリ

扣寫正文在文庫

御意のよしにて御ふみはいけんいたし外、
 一位様ますく御機けんよく御座なされ、恐れなからめ
 てたくそんし奉り外、しかれハ

竹姫君様同氏大すみの守へ御ゑんく遊はされたきおほ
 しめしにて、御内意御座外につゐて、くわしき 上意の
 おもむき承知仕、誠以有かたき仕合にそんし奉り外、こ
 れにより早速御請申上りやうにと申越外、先年
(徳川家宣)
 文昭院様御代に御ゑんくみの

御内意 仰せ出され、私より申上置りわけも御座外故、
 此せつの儀

一位様へ其たん申上り外ハてハ御請いかゝにそんし候處、
 まへかたの儀をもよく御おほえ遊はされ、佐川めしよせ
 られ外てもこまくおほせ下され、御懇の御事にそんし
 奉り外、此よし御序のおりふし 御前よろしきやうに御
 取なしたのミ入そんしまいらせり、めてたくかしく、

なをくいかほともよろしく御さたたのミそんしま
 いらせり、めてかしく、

朱カキ
 享保十四年

五月二日

まつ平かささの介

秀小路さま

御返事申給へ

継豊公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀帷子單物到來欣覺候、委曲松平左近將監可述外也、

朱力キ
享保十四年 五月三日



薩摩少將殿

2208
全上

爲端午之御祝儀以使者御帷子單物被獻之、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保十四年 五月三日

松平大隅守殿

安藤對馬守
信友判

2209
繼豊公御譜中

寫正文在文庫

一 御内用之儀付、木村四郎左衛門極々急御使去月廿日、其許被差立昨夜中致到着、段々被仰付外御用筋、四郎左衛門より委細申聞承知仕、右付の各より被申越御紙面之趣旁得其意外、然者去十一日西丸に佐川御用之由の罷登外處

一位様より 總州様に仰文を以、秀小路様より被仰進

趣有之、右御文 大御前様迄被進付 大御前様被成

御覽、御文之趣御承知被成外、御文薩州に可被差越由秀小路様迄御請被仰上管外、依之四郎左衛門儀十一日

曉其元被差立外得共、右御文之儀々四郎左衛門に御渡可被成之御事の追飛脚差立、四郎左衛門水口を罷

歸御文御渡被成、右付の御用筋も委細被仰含被差越外由被申越趣致承知、四郎左衛門より々猶承届、右御

文且又被申越段々之趣隼人より委細申上、四郎左衛門より表儀に今日參上仕、早速御目見被仰付、太守様

より被 仰進趣委細申上被 聞召達外、右付の 總州様より 思召之御返答四郎左衛門の早速被 仰進管

外得共、四郎左衛門儀中途より被召呼外譯々有之、段々苦勞仕候付、四郎左衛門儀ハ來ル九日、十日比爰許可被差立外條、總州様 思召之趣、早速飛脚を以申越

外様こと承知仕外付 御意之趣、左委細申越外、一竹姫君様御縁談之儀付の者、達の御斷被仰上度 太守

様被 思召外付、被仰進趣委細被 聞召届外、然共先日飛脚便申越外様こと被仰付外 御意之通、外に 思

召寄無之、御斷被 仰上詮々無之、殊更此節 一位様より 仰文を以御承知之譯々候得ハ、旁以早速

御請御申被成方ニ可有御座と被 思召上り、御太粧之儀ニハハ得共、御奉公之儀御子孫之御爲ニハ得者、右之通被 思召御事り、四郎左衛門ニ御返答被成儀も此段表申越り様ニ之御事り、

一右之通弥以御請可被仰上儀と被思召り付、 總州様より

一位様ニ之御請之趣、別紙御案文之通被仰付御事り、先便ニ者御用番様に被仰上り趣付る者先

一位様に被得御内意り上、御書付御差出被成り様ニとの御意り得共、此節之譯付る者不及其儀事と被 思召上り、

一先月十一日其元被差立、爰許に去二日致着り筋之日積ニ有宜り故、御請文今月二日之御日附ニ被差越り、其元は者今月十九日、廿日比致着り積ニ有、常式之日積ニハ無御構被差出可然り、右御請被差出候節 大御

前様より御文を被添可被差出哉、其儀ニ不及事ニ表可有之哉、此段者其元ニ有吟味次第宜様被申上り様ニ

との御事り、 大御前様御文被相添儀ハ、今月二日御日附之段者被申上ニ有可有之り、

一總州様御請之御文之儀者、陸飛脚之方ニ相渡差越り、

御案文者二手ニ差越り條陸飛脚遲致着りハ、御案文を以其許ニ有御文調被申渡、右日積之考を以可被差出り、雨時分之儀ハハ、若中途ニ有御文之上包損り儀共もりハ、御案文を以調直可被申付り、

一秀小路様よりの

一位様仰文 大御前様より御請被仰上り御返事之御文、本書は此方に納置り、定る其許ハハ書留表可有之り得共爲念寫差越申り、

一右付る者四郎左衛門に御直

總州様御意被遊り趣表右之通り、四郎左衛門より表、先荒増右 御意之趣者其許御近習役迄申越り様ニ被仰付り付、四郎左衛門より表右之趣者申越り由、大藏・

隼人に申聞せり、

右之通早々申越り様ニと

御意承知仕り付、此段申越り條可被達 貴聞り、依之極々急飛脚海陸二手ニ申付差越申り、以上、

本ノマ、日付ナシ

比志嶋隼人(籠房)

種子嶋彈正(久基)

樺山主計(久惣)

嶋津中務(久實)

繼豐公御譜中

御内用之儀付る太守様達 貴聞候上連名ニ被申越一書之趣一々隼人より

總州様達 貴聞候處、右紙面之趣付る者、未見得不來事
ハハ、以後之儀ハ其節之様子次第ニ可有之事ハ、自然
御男子様御誕生被遊ハる表、以前ハ御分地被遊ハ儀者御
家ニ無之事ハ得共、其節之御様子次第可有之事ハ得者、只
今より左様成儀其外先キ掛ル之御吟味ニ者不及儀ハ、
御大粧成儀ながら御家御子孫之御爲結構成儀、且ハ御奉
公之御事ハ條、何れ之筋ニ及御請被仰上ハ方可宜と被
思召上ハ、近日木村四郎左衛門被差立ハ節、以後御心入
之儀共ハ被仰進答ハ共、此節御請被仰上ハ儀ニ付ハ
右 思召之趣早々可申越旨 御意ハ、右御内用付る者先

此書五月初比ナラン、正文ニハ可有之下思ハル

鳴津 李殿 (久慈)
伊集院藏人殿
平岡内匠殿 (可思)

鳴津 大藏 (久慈)
鳴津 將監 (久慈)

頃より段々申談事ハ、右付る者各より此節被申越趣、一々
尤之事ハ得共、御斷之詮相立ハ儀 總州様思召之通、乍
憚私共ニ及一向存寄無御座ハ付、被仰付ハ次第申越ハ條、
宜被達 貴聞ハ、以上、

但 將監儀未出勤不仕ハ得共、御用之儀者委細承知仕、
連名ニ被申越ハ、此節御内用之儀付る御斷被仰上
筋ハハ、御使者柄之儀如何可被仰付哉之段、
木村四郎左衛門ハ口上之覺書被相渡ハ紙面、具致
承知ハ、右本文之通 總州様御意之段申越ハ付、
委細之御返答ニ不及ハ、以上、

五月六日

比志嶋隼人

種子嶋彈正

樺山主計

鳴津大藏

鳴津將監

嶋津 李殿

伊集院藏人殿

平岡内匠殿

2211 私事昨夜四時前到着仕、直ニ將監殿ハ罷出、首尾申上ハ

處、御逢被成御用筋之儀先頃を申上り處、明朝於 御城
 大藏殿・隼人殿に可申達り、兼而夜中着仕りハ、其通
 有之可然旨被仰談置候旨承申り付、昨夜者罷歸休息仕、
 今朝 御城に罷出大藏殿に被仰付り御用筋之趣委申達、
 御書付等一々差出申り、左りる隼人殿 御城に御出被成
 り付り、其元より被仰付り御用筋 御口上之趣委細申上
 り、左りる隼人殿御書付等一々御請取被成、磯に御參被
 成、私事及磯に參上仕り様と承申り付、早速參上仕り
 處、御目見被仰付 御口上御直申上り様と被仰付り付
 其許りの委細被 仰含り 御口上之趣申上り處、右付り
 者先達り被 聞召上り付、 總州様思召之程飛脚を以爲
 被仰遣事り、此節御入與之儀被 仰出り付、御斷被仰上
 り儀 思召寄無御座り、兎角御請不被仰上りる不叶儀と
 被 思召り旨、段々之譯 御意有之、罷登りる 太守様は
 申上り様と承知仕り付、乍恐御尤之儀奉存り、然共
 太守様此儀付り者別の御難儀被 思召り、何とぞ御斷之
 筋被遊御了簡被進り様と達り被 思召り旨、其許りの
 段々、御沙汰承知仕り趣を以、再篇申上り處、何ケ度及
 太守様思召之程者御尤之儀被 思召り、先々共御六ヶ敷
 事ハ成程 總州様と其通に被思召り、然共御斷之詮相

立り儀是社と 思召り儀、曾而御存寄無御座り、いつれ
 御六ヶ敷事ハ御堪忍被遊、御請被仰上筋可然と被 思召
 り、此段飛脚を以被仰遣等り、猶又私より及各迄申達り
 様と被仰付り、右之次第御座り故比段申上り、委細之
 儀者大藏殿・隼人殿より被仰上りる可有之り、且又私事
 早速可被差立り得共、此度者太粧成御使相勤申り付、暫
 者休息被仰付り、夫故先飛脚を以 總州様思召之趣被仰
 遣り旨、是又御直に承知仕り、且又私江戸に參り迄ハ被
 仰上り儀も御扣被遊り 思召之旨御沙汰申上り處、私に
 被仰含り御用筋何ぞ相替申儀無之り間、私罷登り迄御扣
 被遊り及間敷り、此段及申上り様被仰付り、右之趣被達
 貴聞御家老衆に及可被申上り、以上、
 五月六日
 町田(後)八左衛門殿
 小笠原(長)郷左衛門殿
 二階堂(行)八太夫殿
 諏方(順)甚左衛門殿

2212 一木村四郎左衛門事御内用之儀に付御役被仰付 太守様
 より 總州様は被仰進り趣付り者、委細被 聞召達

總州様思召之趣、先早々飛脚使ニ申越ハ様ニ御意承知仕、去六日委細飛脚便申越ハ通、追付相達被聞召上ハ半と奉恐察ハ、

一四郎左衛門今日爰許被差立被差越ハ付、

總州様より之御返答之儀者、御直ニ四郎左衛門ハ被仰付被仰達ハ間、四郎左衛門より申上ニ有可御座ハ、

四郎左衛門ニ有之御返答之儀者、先日飛脚ニ申越ハ様ニと被仰付ハ、思召ニ何レ相替儀者無御座ハ、右

思召之趣御返答ニ表被 仰進ハ由承知仕ハ、

一四郎左衛門儀、急ニ有船中被差越、若格別ニ相滞ハ儀表ハハ、其節様子次第致陸卸ハ様申付可然ト之御意ニハ故右之通申付ハ、

一四郎左衛門召列ハ人数御賦方之儀、現人数之分者急料被下、現人外者靜料被下ハ段四郎左衛門ハ申渡、此方

より表通駕籠ニ有被差越ハ付、是又其通申渡ハ、

右去六日飛脚便申越ハ通、何レ相替儀者無御座ハ間、右之趣被達 貴聞、各も承知可被仕ハ、被申上不及儀ハ御考次第可被成ハ、以上、

五月十日

比志嶋隼人

種子嶋彈正

樺山主計

鳴津中務

鳴津大藏

鳴津將監

鳴津 李殿

伊集院藏人殿

平岡内匠殿

2213

継豊公御譜中

一筆申達ハ、總州様（吉野） 信證院様（綱貫御筆） 於須磨様御安全全被成

御座奉恐悦ハ、於御當地（總豐） 太守様（宗傳） 益之助様（吉野老） 大御前

様御機嫌能被成御座、重疊目出度御儀奉存ハ、然者御内

用之儀付御用有之、飛脚貳人三道中極急申付今日差立ハ、

委細之儀者別紙申達ハ、恐惶、

猶々御内用之儀付被差立ハ海手之飛脚も相達、御用

得其意ハ、且又其許より之御使柏原彌太右衛門・鮫

鳴善兵衛昨晚到着、是又御用得其意ハ、以上、

五月十三日

之品

久短

久武

鳴津大藏殿

鳴津中務殿

樺山主計殿

種子嶋彈正殿

一 竹姫君様御縁談之儀付る、御内意之趣有之難有 上意

を被蒙り得共、右御縁組之儀者何とぞ御斷可被 仰上

と被思召り付、御斷被 仰上様之次第、去御方様(奥右筆殿高氏)に御

内談申上、先年表御縁談之御沙汰有之り節、御斷被仰

上り次第御見合被成、且又 總州様思召寄御承知被成、

不差障様可被仰上と之御事、先御請御延引之御願

被 仰上置り間、總州様思召之程御承知可被成ため、

木村四郎左衛門御使被仰付被差越善り段、先月七日・

同十日兩度之飛脚を以段々申越趣有之り處、先月七日

飛脚便之書付其元は相達、大藏殿右書付磯に被致持參、

隼人殿に申達、隼人殿より 總州様被達 貴聞り處、

一々被聞召上り、右付る 總州様被 思召上りハ、此

節御承知被成り御書付之趣、分ケる御懇之被蒙 上意

候付る者、其通に社可有之儀と被 思召上り外に、思

召寄無御座り、乍此上酒井讚岐守様(忠音)・水野壹岐守様(忠志)・

去御方様などへ御相談之上御斷之手筋表可有御座り

哉、壹岐守様・去御方様御同前之御挨拶に由り得者、

讚岐守様と表御同前之御挨拶に社可有之哉と隼人殿に

御意り由被致承知り、右御縁組御太柱之儀に候得共、

御子孫に到りりハ結構之儀り由、被遊 御意り旨被

申越り様こと隼人殿に被致承知り由、

一 先年 竹姫君様に御縁組之儀御内意之節、段々被 仰

出置り趣有之り、書留可被差越旨申越り段表被 聞召

上、右書付之儀者此節之御用に罷成書付るハ無之り

間、差越り儀無用いたし可然り旨 御意り付、不被差

越段被申越り様こと被仰付り付、不被差越り由、先月

廿一日海陸二手極々急飛脚被差立被申越趣有之、去七

日之朝陸手之飛脚到着、被申越委細之次第致承知り、

一 右之通り處、先月廿三日被差立り飛脚、同朝追付致着

り、爰許より先月十日差立り飛脚便申越り書付之趣、

隼人殿より 總州様に被申上被 聞召上、右付る 御

意り者、以前に被 仰上置り趣有之りと去御方様・讚

岐守様・壹岐守様に表被仰達り得ハ、以前被仰上置り

有筋を、被仰上方可宜儀と被 思召り、其節之御用係

り御家老者當分者罷居事り得共、書留表有之、總

州様ニ及御覺被遊リ所及リ付、別紙之通書寫被差越リ間、別紙之趣を以、去御方様にも御相談被成、被仰上可然所を被仰上リ方、可宜と被 思召由、

一左近將監様御方に被仰上リ趣付る者

一位様ニ及先年爲被聞召上儀得ハ、此節被仰上リ趣、先

一位様御方に御内々被仰上置候上、左近將監様御方に被仰上筋可宜と被思召上リ、萬一

公方様より 一位様の御對談及有之り節、最前之次第委曲被 仰上リ譯御存知不被遊リ得ハ、御疑及有之、御挨拶及可難被遊儀リ間、左近將監様御方に被仰上リ趣、先前以西御丸御用人衆に被仰達

一位様被聞召上リ以後左近將監様に被仰上可然と被思召上リ間、此段及被申越り様こと 御意由、

一右之通

文昭院様御代爲被仰上譯及リと覺外者及有之り得共、何様之譯不相知、太守様ニ及其節及御若年ニ及御存知不被遊リ故、筋違之事りハ如何ニ付故、御國元に被仰越 總州様聞召上られ、此節委細之趣申來り、右之委細不相知事り故、此内御請御延引被成り外ニ、何ぞ

思召及無御座外と之趣可被仰上リ、如何様にも御請被仰上リ筋と 總州様被 思召リ間、去御方様へ右之趣を以御相談被成可然と被 思召リ、御太粧之儀ながら御奉公之儀御子孫御爲ニ及リ間、御請御申被成り様こと被 思召上リ、別紙之趣去御方様に御相談を被遂思召寄有之り共 上意次第畏可被遊と之趣及、必御申被成り様こと 總州様被 思召上リ由、

一去御方様思召寄之御案文、妾事嫡子出生以後妻と申筋ニ及無御座外得共、嫡子之母ニ付故、重いたし置り段被仰上リ儀ハ、去御方様思召寄ニ及爲被仰達儀ニ及ハリ得共、 上意之譯ニより 姫君様御縁組之筋被仰付りハ、御本妻被成御座外及御請御申不被成り外及不叶儀外得ハ、御妾之儀付る者其御申立者曾而罷成間疎外、御本妻を被相除 姫君様を御縁組被成り例ハ有之事り間、右御案文之通被仰上リ儀及、必御無用ニ被成可然被 思召上リ由 御意外、先便ニ被申上リ御意之趣及一通之儀ニ及、委細 御意不被遊儀ニ及得共、此節之次第ニ付る者、右之通被思召上リ、木村四郎左衛門事御使被差越由り得共、四郎左衛門に被仰付り趣及右之次第同前之儀ニ及可有之と被遊御堅慮外、

其節之御返答可被仰進儀表此節 御意之趣ニ相替儀無之、御同前之儀ニ外ニ 思召寄無御座、此段表 御意之由段々被申越、先年御斷被仰上ハ次第を表別紙書付被差越、則三人罷出、御直ニ 太守様達 貴聞ハ處、總州様御堅慮之趣一々御尤被 思召上ハ、右付ハ老得と御了簡可被遊旨 御意承知仕ハ、然處去十日私共三人 御前ニ被召出 總州様御堅慮之程御尤被 思召上ハ、私共ニ老何様存ハ哉と御尋被遊ハ付、 總州様御堅慮之次第承知仕御尤至極奉存ハ、此上ハ 御堅慮次第之儀と奉存ハ旨申上ハ處、得と御了簡被遊、追ハ可被 仰聞旨 御意承知仕ハ、左ハ今十三日被 仰出ハ老此度 總州様思召被 仰進ハ趣、此程より得と御堅慮被遊ハ處、一々御尤之儀被 思召上ハ、此上老餘事之 思召を被差置、御請御内々被仰上筋御落着被遊ハ、右付ハ老早速御請可被仰上ハ得共御縁談之儀付一位様より御文を以 總州様に被蒙仰、右御文四郎左衛門便被差越、未御國許ハ不相達内之飛脚便 太守様御請之儀御延引不被成様ニト 總州様思召之趣爲被仰進事ハ故、 太守様御請之儀老 總州様より之御請之御文、此方に相達ハ節、 太守様御落着之上なから

總州様御請之趣被聞召、其上ニ 太守様より之御請老可被 仰上と被 思召ハ、右 思召ハ故、四郎左衛門御當地ハ着仕ハ迄、御請之儀御差扣被遊ハ條、此段總州様御落着之ため早く可申越旨 御意ハ、右之次第ニハ故、極急飛脚を以此段申越ハ條 總州様ハ可被申上ハ、以上、

五月十三日

平岡内匠

伊集院藏人

鳴津 全

鳴津將監殿

鳴津大藏殿

鳴津中務殿

樺山主計殿

種子嶋彈正殿

比志嶋隼人殿

2215

此節御縁談之儀分被蒙 御内意ハ儀、別ハ結構之御事ハ間、御供之御家老共忘却不仕様可相心得旨 御意之由を表被申越奉承知、乍憚御尤至極畏奉存ハ、誠以結構之御事とハ恐奉存ハ、此段各迄申上ハ、以上、

五月十三日

平岡内匠

伊集院藏人

鳴津 全

鳴津將監殿

御家老中

比志嶋隼人殿

被仰付外段申渡、仕廻次第可被差立旨 御意外、以上、

五月十三日

平岡内匠

伊集院藏人

鳴津 全

鳴津將監殿

鳴津大藏殿

2216

竹姫君様御縁組之儀被蒙 御内意外付、御内々御請被仰上管外、表立外 仰出有之候節弥御請可被仰上外、右付る者御入輿方之御用筋早速より有之管外、專御留守ニ相懸御用外間、右御用嶋津中務に可被仰付外條、御留守詰之御用人壹人相添、小倉筋早々罷登外様ニと被 思召外、

此段 總州様に被申上 思召寄々無之外ハ、右之趣表方月番より申渡可差立旨 御意外間、被奉得其意 總州様に被申上、弥 思召寄無御座外者、右之段被申渡外様表方に可被申達外、右之通外得ハ、中務殿一人ニの平日之御用ニ取加外る者不相達管と被 思召上外、今壹人々被差上せ外様可有之儀と被 思召外、右付る者樺山主計可被差上せ哉、此段々 總州様に御沙汰被申上、弥其筋可宜と被 思召外ハ、此段も表方に相達、主計江戸詰

2217

御縁組御請被仰上管付る者、當 御在府中御結納之御祝ハ、不相整候外不叶筋可有御座外、右付る者第一御銀之御用意有之管外、其段々大坂に々其許考を以續方之儀可被申越外、且又御附届方端物等之御用早速より大分有之管外間、於其許々專其考有之、早々可被差越外、右之外御用筋可有之外得共、當分よりハ不相見得事候故、何々之事とハ難申越事外、其節之様子次第申越儀々其通ニ可致外、先此段爲御心得外、以上、

五月十三日

平岡内匠

伊集院藏人

鳴津 全

鳴津大藏殿

鳴津中務殿

樺山主計殿
種子嶋彈正殿

2218 繼豐公御譜中

扣正文在右筆所

薩摩國鹿兒嶋城下東口番所通良方外北東之間土居貳ヶ所、去年大雨付致破損外、如元修補仕度注繪圖奉伺外、以上、

朱力半
享保十四年 五月

御名

2219 右繪図之奥書

薩摩國鹿兒嶋城下土居去年大雨之節崩外覺

東口番所通良方外北東之間土居貳ヶ所崩申候、

右之通致破損外付如元修補申付度奉頼外、以上、

享保十四巳酉年五月 御名御書判

2220 全御譜中

正文在文庫

以上

薩摩國鹿兒嶋城下東口番所通良方外北東之間土居貳ヶ所

崩外付如、修補之事繪圖朱引之通得其意外、如元可被申付外、恐々謹言、

享保十四酉五月十三日

水野和泉守 忠之判

酒井讚岐守 忠音判

松平大隅守殿

松平左近將監 乘邑判

2221 全上

寫正文在文庫

以手紙啓上仕外、不勝天氣相御座候得共、弥御堅勝可被成御勤珍重御儀奉存外、先頃御内談申上外儀付如、奉得貴意儀御座外間、毎度乍御苦勞明廿一日二日三日之内、御隙次第田口玄迎所迄御出可被下外、左外ハ、於李小屋此内之通奉得貴意度奉存外、少々御隙入御座外共何とそ右三日之内御出可被下候、此段申上候様こと被申付外、以上、

朱力半
享保十四年 五月廿日

平岡内匠

伊集院藏人

嶋津 杵

(箱形) (亂) 壽
飯高孫大夫様

2222

一筆申達候、總州様 信證院様 於須磨様弥御機嫌能
被成御座、奉恐悅候、於御當地表 太守様 益之助様
大御前様猶御安全被成御座、重疊目出度御儀奉存_レ、然
者御用之儀有之、飛脚_二貳人極急申付差越_レ、御用之儀者
別紙委細申達候、恐惶、

五月廿二日

之品

久矩

久武

鳴津大藏殿

鳴津中務殿

樺山主計殿

種子嶋彈正殿

2223

一竹姫君様御縁談之儀御斷被仰上度被 思召、木村四郎
左衛門御使被仰付、總州様_レ被仰進趣御座_レ處、委細
被 聞召上、外_二 思召寄無之御斷被仰上譯_レ無之、
殊更 一位様仰御文を以御承知之譯_レ得_レ者、_レ以早
速御請御申被成方可有御座と被 思召_レ段、委細今月

六日飛脚を以被申越趣有之、去十九日晚陸手飛脚到着
被申越紙面則 太守様達 貴聞_レ處、總州様思召之
趣_一御尤被 思召上_レ、先日之飛脚_二被申越_レ趣を
以、弥御請被仰上善御落着被遊 總州様より御請御文
_二引結_レ様御請可被仰上_レ之 思召_二御請被差扣、
其趣者 總州様爲御落着、飛脚を以申上候様_二と被仰
付爲申越事_レ、然處此節又_二四郎左衛門_二の 總州
様より被仰進善之趣、飛脚を以被申越候付_レ、四郎左
衛門不致着_レの表飛脚致着_レハ、早_二御請被 仰上
_レ様被成可然儀と被 思召上_レ旨被申越_レ付_レ者、猶
御尤被 思召、最早四郎左衛門御待被成_二者不及_レ間、
早_二御請可被 仰上_レ條、御請之御案文等之儀去御方
様_レ御内談可仕旨、則 御意承知仕_レ、

一右付_レ翌廿日早朝、去御方様_レ以手紙先日之儀付_レ御
内談仕度儀有之候間、明廿一日二日三日之内御隙次第
田口玄迎所迄御出可被下_レ、左_レハ、空於小屋可奉得
貴意旨申上_レ處、昨廿一日御出、空小屋_二の私共出會
仕、御請御案文其外 御入輿方之儀付_レ段_レ之儀御内
談申上_レ處、御請御案文者御考被成御調、彼御方より
可被遣_レ由被仰聞_レ付、無延引早速御請可申上と大隅

守被存外旨申上外處、被差出時節之儀者被御方より御考被成可被仰聞外、尤 總州様御請之御文者 太守様より御内々御請被 仰上候以後被差出可然由被仰聞外、其外之儀共被仰聞外内 御入與不相濟内ハ 太守様御暇之儀ハ被 仰出間敷と存外由被仰外、此節之儀付る者、先半様御内談仕儀共多々可有之外間、其節ハ可申上旨申上外處、何時表御用之節者御心易可被仰聞旨被仰外、尤此方心得ニ成外儀者彼方より表可被 仰聞由御座外、

一右之趣早速 太守様達 貴聞外處、御請御案文被遣外ハ、讚岐守様・壹岐守様に表最前之一首尾候故、御請之御書付御家老御使者を以、御覽被届外様被仰進、尤無據御間柄之御方様に表御内々御請被仰上外趣被仰達可被差出旨 御意外、最前壹岐守様に右之儀付、御内談被仰進外御御請被仰上外儀付る者、御一門様方ニ表被仰談候上、何分ニも可被仰上旨壹岐守様爲被仰事外、其上頃日世上ニ専御入與之儀取沙汰仕儀候得者、猶以無據御一門様方には不被仰達外不叶事候故、右之通被遊管外、去御方様ニも昨日御出會仕外節右之次第ニ可被成事候旨被仰外、右之段申越外様ニと 御意候

付申越外間、總州様に可被申上候、以上、

五月廿二日

平岡内匠

伊集院藏人

鳴津 奎

鳴津將監殿

鳴津大藏殿

鳴津中務殿

樺山主計殿

種子鳴彈正殿

比志鳴隼人殿

2224

此節御縁談御請被仰上管付る者、鳴津中務早々小倉筋罷登り様先日 御意被遊候、右付る者中務一人ニる者不相達管ニ被 思召外付、樺山主計可被差上せ哉、右之段者總州様に被申上 思召寄無之候ハ、申渡仕廻次第罷立外様 御意被遊、今年十月十三日飛脚便申越候得共、主計罷登ニ者先及間敷候、中務并御用人之儀者、先日 御意之通、弥小倉筋罷登り様可有之外、主計儀者自然九月御暇之筋ニ外ハ、様子次第被差登り様ニ表可有之外間、右之趣 總州様に申上未申渡及無之外ハ、申渡外儀者可差

扣外、若申渡有之ハ、右之趣を以先罷登ニハ不及段申渡外様、早々可申越旨 御意外付、極急飛脚を以申越外間、右之趣を以表方ハ之可被致首尾外、右之通被思召候譯者 御入與不相濟内者 太守様御暇被 仰出間鋪と存外旨、去御方様被仰、別紙申越外通之事候得者 御供方御家老々罷居、其内者不差支管外故、主計儀被差留事外間、右之趣を以 總州様ハ可被申上候、以上、

五月廿二日

平岡内匠

伊集院藏人

鳴津將監殿

鳴津 左

鳴津大藏殿

一御縁組御請被仰上外ハ、急度表立被 仰渡ニ有可有御座外、左外得者此内申越外通御附届付有者、緞子・綸子・縹子其外琉球端物大分御入用之積ニ外間、相應之便急ニ無之ハ、態と取仕立早々被差越度外、且又御縁與表立有被 仰渡外ハ、早速 御守殿之御普請御取付及可有之外、然者御作事方疊之表等ニ至り過分入用可有之事候間、是又其御考を以可被差上外、右御

作事之御差圖者從 公義被仰渡事之由御座外、何様成御作事ニ有ハ哉難計御座外得共、其元へ取置之材木有之外ハ、以見合可被差上候、御差圖相究外有より申越外有者間後ニ可罷成事外間此段申越外、

一御入與付有者御臺所御入用之諸色及段々相重、不被差越外有者不叶儀ニ外、品之儀者爰元より何々と相究申越外儀者只今よりハ難計御座外間、兼有爰許御續方ニ被差上せ置候雜用之品々被相考可被差上せ外、右御用之品爰許御買入ニ有者別御不勝手之積ニ候、御縁與被仰出早速御作事御取付有之、其元より被差上せ外材木間ニ不逢節ハ、都る御買入材木ニ有被相調ニ有可有之外、然共御作事及急ニ者不相濟積ニ外故、其元外取置之材木少々ニ有被差上せ候得者、御用罷成御勝手之管外故、此段申越外、以上、

五月廿二日

平岡内匠

伊集院藏人

鳴津 左

鳴津大藏殿

鳴津中務殿

樺山主計殿

竹姫君様此御方江御縁組之儀被蒙

種子嶋彈正殿

太守様御定之通御暇御給被成候ハ、九月中可被遊 御發駕考ニ、御迎船御取仕立御勝手方より被申渡候様ニと先便申越趣有之、別紙去方様被仰付趣ニ、九月御暇無之時老間違ニ罷成管付間、其考ニ手當等見合可被差置、追可相究事候間其節可申越、先此段爲御考申達、以上、

五月廿二日

平岡内匠

伊集院藏人

御家老中

今月六日其許極々急ニ被差立、海手之飛脚、昨廿一日朝致到着候、此段爲御納得、以上、

五月廿二日

平岡内匠

伊集院藏人

鳴津 全

御家老中

御内意候付、御内々御請被 仰上候ハ、急度表立可被仰渡ニ可有之候、左付得老早速より御祝儀御附届又ハ御普請御入用等、過分之積ニ、然老御金之御用意被成不被置、不叶儀付間、常續之外ニ先御金壹萬兩程、借入早々可差越、尤御縁談之儀未表立仰渡、無之、御内々之御事付間、他所之儀、不及申、其元詰之面々、江及仰渡無之内、老曾沙汰不致事、表立可仰渡有之御請被仰上、老、其段ハ到其時可申越候條、左様相心得、早々御金借入可差越、右付老先々ニ掛段、御金御入用之積候間、專其考可致置、以上、

五月廿二日

平岡内匠

伊集院藏人

鳴津 全

有川幸右衛門殿 (貞 烈)

大野清右衛門殿 (清 盛)

本田 新助殿

肥後平右衛門殿 (盛 厚)

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御念入まいらせり御ふみの通、よろしく申
あけりへくり、めてかしく、

四月十六日付にて御ふみ下されり、

公方様 大納言様益御機けんよく御座なされ、御めてた
く思しめしりよし、しかれハ先之月十二日御同氏大隅守
殿御参きんの御禮仰付られ有かたく覺しめしり由、右の
御禮おほせ上られりとの御事、御ふみのとをり何もよろ
しく披露致まいらせり、めてたくかしく、

朱カキ
享保十四年

三 室
あ

まつ平 御返事
上總介様
人々御中

豊 岡
高 瀬
外 山
尾のえ

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく何もよろしく申上まいらせり、めてたくか
しく、

四月十六日付にて御ふみ下されり、

公方様 大納言様御機嫌よく成らせられり、なを御めて
たく覺召りへくり、扱ハ先月十二日御同氏大隅守様御参
勤の御禮仰付られり御事有かたく覺召されりよし、御ふ
みの様宜しく申あけまいらせりへくり、めてたくかしく、

朱カキ
享保十四年

三 室
豊 岡
たかせ
外 山
尾のへ
あ

吉貴公御譜中
正文在文庫

なをく御手まへさま御無事の御事ニ御座被成めて
度思しめしり、なにもよく心得りて申せとの御事ニ
御さり、めてたくかしく、

四月十六日之御文下されり、まつく

公方様

大納言様

一位様御機嫌よくならせられり御事、御めてたく覺しめ

2232

繼豊公御譜中

嚮_レ是

大樹吉宗公使_{シテ}執政乘_リ邑_ニ竊授_ニ與教書於鳥居忠利_ニ欲_レ令_レ下

竹姫君_ハ伉_ニ儷_ニ於繼豊上、謹辱_ト加_ニ台慮_一、然苟不_レ能_レ對_レ

之恐爲_ニ拜答_一暫及_ニ遲延_一、因使_シ忠利達_ニ之於乘_リ邑_一、則

允容焉、於_レ是使_シ飛使_ニ通_ニ所_一、命_ニ之旨於老父吉貴_一、且

木村四郎左衛門時央_{近習}、含_ニ繼豊之言_一馳_リ于薩府上、直登_ニ

大磯館_一、告_レ所_レ含_レ之旨趣於吉貴上、希受_ニ計慮_一而拜_ニ對_ニ

之_一、吉貴謂_ニ公懇賜_ニ教書_一、敢不_レ重_ニ拜_一之_一、於_ニ吉貴_一

無_レ他_レ慮從_ニ于_一台慮之外上也、早上書而可_レ從_ニ恩命_一

朱カキ
享保十四年

松平

上總介さま

人々御中

梅園
櫻井

秀小路

6

2233

繼豊公御譜中

寫正文在文庫

先達_ニ向_ニ

竹姫君様御入與之儀蒙_ニ御内意_一、其節存寄及御座_ニ向_ニ

追_レ御請可任之段申上_レ得共、不存寄_ニ御懇之_一上意之

趣、別_レ冥加至極難有仕合奉存_ニ、左_レ得_ニ未_レ聊何之存寄

等可申上様無御座_ニ、此上_ニ未_レ何分_ニ及奉畏_ニ、以上、

朱カキ
享保十四年

五月廿八日

松平大隅守

2234

竹姫君様御入與之儀_ニ付不存寄蒙_ニ御懇之_一御内意、冥

加至極奉存_ニ、就夫去年妾腹男子出生仕_ニ、御縁組以前

出生之事情問

竹姫君様御入與男子被遊御出生候共、去年出生之男子を

嫡子_ニ仕_ニ様_一と被_ニ思召候_一、別_レ御丁寧之_一御内意之

也、繼豊聽_ニ吉貴之訓言_一、辭既不獲、以故同年五月二

十七日招_ニ忠利於芝邸_一、奉_レ謝_ニ蒙_ニ台慮_一、手屬_ニ御受

書并櫻田・芝宅地坪付等於忠利_ニ矣、忠利齎_ニ之翌二十八

日至_ニ乘_リ邑之第一進_ニ皇之_一、且吉貴之謝禮亦伸_ニ達_ニ、乘

邑善遇_ニ之、即日忠利來_ニ芝邸_一見_ニ繼豊_一被_レ達_ニ之、

趣重疊難有仕合奉存御請仕_レ、然_ル私家之儀二男以下_ニ者

内證分知等仕_レ儀無_レ之、何_レ表陪臣致來_レ、此段屹と申

上儀_ニ者無御座_レ得共、右之譯者申上置度_レ、乍然段

々難有蒙 御内意候上、此涯_ケ様之儀申上_レ事如何可有

御座_レ哉、何分_ニ表左近將監殿思召次第可致_レ、右之趣

御物語可被_レ下_レ、以上、

五月

2235

竹姫君様御入興之儀被_レ 仰出_レ者、拙者櫻田屋鋪者殊

外狹御座_レ故、從前_々不致住居當芝屋敷致住宅_レ、然共

御入興被遊候得者芝屋敷_々狹、中_々御守殿作事可仕場所

無_レ之_レ、尤_レ今迄之内證向_々屋鋪迫候付、手狹_ニ者御座

外、萬一屋敷之御沙汰_々外ハ、年寄衆_ニ御物語可被_レ下

外、爲御心得申達置_レ、以上、

(余)

「享保十四年」五月二十七日」

2236

松平大隅守芝屋鋪

一壹萬三千三百四拾六坪

同 櫻田屋鋪

一六千八百五拾八坪

以上

五月

(余)

「右書付五月廿八日松平左近將監様江鳥居丹波守様ニ而被差

出、委細_者左之通御國元江申越_レ一紙ニ相見得候、

但右三通寫可差上旨丹波守様被仰付置_レ付、鳥居頼母迄

持せ、手廣御沙汰之儀_者御用捨被_レ下_レ様被仰上被差上

外様ニと奎より手紙相添六月一日ニ遣_レ」

2237

継豊公御譜中

一竹姫君様御入興之儀被蒙 御内意候付、御請之儀去御

方様へ御内意申上_レ外處、御請之御案文彼方より御調可

被遣_レ、左候_レ被差出_レ時節之儀者、彼方より御考被

成可被仰聞旨致承知候、御案詞被遣_レ外ハ、讚岐守様・

壹岐守様其外御間柄ニ付、御知せ可被仰進御方様_ニ者

前以被仰進候上、御請之書付被差出_レ段、先月廿二

日飛脚を以委細申越置_レ、然處去御方様より先月廿五

日御案詞二通り被成、且又外_ニ御屋敷狹御座_レ段口達

ニ被仰達_レ之御書付之御案詞迄御調被遣_レ、御請之

儀者、右之内何れ_ニ者表御勝手次第、六月初頃被差出

ニ可有御座_レ、乍然御家之儀終_ニ御分知等不被成來

御事_レ得者、其段者兎角此御被仰出置_レ方可然儀御座

外條、兩通之内ニ御分知不被成來御事迄書入被遣ツマハ、御安詞ニ御請有之度御事之由被仰遣ハ、

一右通御案詞二通ニ被成被遣ハ、先日李小屋ニ御越之節、何角御物語之内より先キ、御入興有之、御男子様杯御出生被遊ハ、何様之次第ニ可有御座哉杯と御咄申出シ候處、此御方様御格式者如何被成來候哉、御尋被成ハ、此方ニ有者終ニ分地等仕候儀無之、何れ及陪臣ニ有差置ハ段委細申上ハ、夫故壹通之御案文者右之件を以御調爲被遣事ハ、且又御屋敷之事被仰上置筈之御書付之儀も、何角御咄之内より御屋敷及餘程差遣ハ様御見及被成ハ、

御入興被遊ハ得者、御守殿之御差圖者、上より出申ニ可有之ハ、左ハ御作事御出來之御事御座ハ、當分之御屋敷ニ有者中、相調不申筈ハ、御屋敷差遣ハ段兼ハ被仰上ハ、上ハ之御禮儀ニ有宜御座ハ、乍此上猶御屋敷有來ハ御内證向ニ有被相濟ハ様ニ杯と有之ハ、頂上之御事ハ、先御案詞者御調被遣ハ由ニ有、此節外之御案詞同前ニ被遣ハ、左ハ御請之御案詞兩通并御口達之御書付之御案詞共、太守様懸、御目ハ處、御分地等不被成來ト之御文言之御案文之通ニ有、

御請可被仰上ハ、尤御屋敷狭ハ付御口達之御書付及、通ニ有可被差出旨、御意ハ付、私共ニ及御尤奉存ハ付、右御案詞ニ御屋敷狭御座ハ段被仰達筈之御書付取添、酒井讚岐守様ニ爲御内談李御使被仰付參上仕、先頃得御内意候趣有之、就夫此節又、得御内意度儀有之ハ、奉申上ハ、被聞召達被下度旨御用人栗栖清左衛門ニ有申上ハ、御逢可被成候條可扣居旨被仰聞、差扣罷在候處、追付讚岐守様御逢被遊ハ、今度御内意ニ御請申上筈御座ハ、依之右御請之書付懸御目ハ、思召寄及御座ハ、何分ニ及無御心置被仰聞被下度ハ、左ハ六月初比左近將監様ニ被差出考御座ハ由申上ハ、兩通之書付得と被御覽届何ぞ思召寄無御座ハ、御二男以下御分地等不被成來之由、此段者弥其通候哉、且又御屋敷も手狭有之由相聞得ハ、如何有之ハ哉と御尋被成ハ、成程此方家ニ分知仕ハ儀終ニ無御座ハ、尤屋敷之儀者差遣、御守殿作事等可仕場所無之付ハ、右之御沙汰申上置度ト之内存ニ御座ハ由申上ハ、右次第ハ得者成程其通可有之儀ハ、何ぞ此御方御差支之儀及無之ハ、御請之儀者五月中ニ被仰上ハ、可然と被、思召候、御書付者二通共ニ彼御方ニ被留置ハ

由、段々御丁寧御直空に被仰聞外付、御尤奉存外由、此節之儀御内意と乍申、無據一門中に於て、其の手續廣沙汰不仕様申聞置外上、御内意之御請可申と被存外、其通候得者來月初に及可罷成哉と相考罷在り得共、五月中差出外方宜敷被思召外ハ、内々之儀者成程御急候の五月中被差出外様可申聞旨申上御暇仕、右之趣違貴聞外處、五月廿八日御請可被仰上旨被仰出、即晚又々讃岐守様に本を以右之段被仰進外、尤去御方様に及先達を被遣候御案詞兩通之内、御分知等不被遊來との御案詞を以、廿八日御請被 仰上筈候旨私共より申上置候、

但御一門様方に及、廿七日御留守居を以御知せ被仰進外、右御人數御名書并御知せ之御口上書爲御納得別紙差越申候、

一右付の又々、大守様御意の御請之儀右之次第の、去御方様より之御案詞寫を以讃岐守様に及本御使の御内談被仰進、何ぞ思召寄も無之由爲被仰進事ニハ外得共、得と御考被遊外ニ、御請之儀付る者此程段々從總州様被仰遣外譯も有之候處、讃岐守様・壹岐守様に御内談之上爲被究事ニ於り得共、御分知不被成來との

儀を此度被仰上外の、萬一差障候儀共有之外の者別の如何之儀外間、御請一通り被仰上筋有之可然と被 思召上候條、今一往御家老中致吟味可申上旨 御意承知仕候付、私共段々申談外處、大守様思召御尤至極奉存外、右之通被入御念、又々、御賢慮之程承知仕外付る者、右 思召之趣讃岐守様に本被遣、被得御内意外筋ニ被遊可然と乍憚申談外、彼之御方之儀者、幾度及被得御内意外筋ニ先達を爲被仰進置儀外得者、又々被仰越外の者何ぞ相障外儀御座有間敷奉存外旨申上外處、左外ハ、弥々參上仕右之次第委細可申上旨御意外付、翌廿七日朝又々讃岐守様に本參上仕、昨日申上置外明廿八日之御内用之儀付る、重る奉得御内意外様ニと 大隅守申付外趣有之、別ニ書付相認持參仕外旨御用人栗栖清左衛門の申上外處、持參之書付封候の可差上旨被仰下外故、昨日差上置外書物跡の得と被相考候處、書面之内末之ケ條事ケ間敷様ニ今更被存外、此節者御請一通りを申上外の者如何可有御座哉と存寄外付、別紙之通相認奉得御内意外間、思召寄被仰聞被下度奉存外、此通宜思召外ハ、其段大隅守に可申聞外通、則於彼御方本自筆書付、御請一通り之御案詞と一

所ニ封トル、最前御取次之御用人清左衛門を以差上ト得者、御逢可被遊ト條可扣居旨被仰下差扣罷在外處、追付讚岐守様御前ニ被召出、持參仕ト書付委細被 御覽届ト、成程御尤之御事ト、御請之書面ニ御分地等無之段迄御書加リ儀者如何ト、此節之御書付之通御請一筋被仰上可然と被思召ト、乍然右一通り之御請迄を被仰上トル被相濟ト得者、以後共御分地不被成來段者御申不被成筋思召ト哉、以後御分地之御沙汰なと有之節者、分地不被成來段も被仰上思召トハ、何れ此節右之譯者被仰上置ト方可然ト、無左候ハ、重ルハ御申出被成トル委詮相立間御儀と被思召ト、此度御屋敷差迫ト段委鳥居丹波守殿口達書付トル被仰上置事ト間、御分地不被成來段委右同前丹波守殿口達書トル被相達トハ、左近將監殿被聞召届入用之事トハ、可被取用ト、若又無用之筋被思召トハ、御聞捨被成トル可有之トハ、右通トル者何ぞ相障ト儀者有之間敷と思召ト、然共此通讚岐守様御差圖被成トル者無之ト御間柄之一筋を以、御内談委承事トハ、不被殘置御心底思召寄之程被仰聞ト、且又此節御請付トル者、上總介殿より之御禮者如何被成候哉と御尋ト付、此度之儀者大隅守に

御内意迄ト、上總介にハ何之御沙汰も無之ト、

一 一位様より者上總介に仰之由ト、御老女衆方御文を

以 御入輿之儀段々蒙 仰候儀共有之ト故、右之御請

を此節御老女衆迄申上候、御表よりハ御禮不申上段申

上ト得ハ、今度御内意之儀委定御國元へ被仰越上總

介殿も被聞召候、御到來有之ト之御請トル可有之旨

被仰聞ト付、成程其通ト御座ト由申上ト得者、御親之

御事ト得者其分トル者相濟間敷ト、丹波守殿を以御請

之書付被差出ト節、上總介殿も丹波守殿トル口達之

御禮被仰上可然と被思召ト、右ト委被仰聞ト通讚岐守

様御差圖被成トル者無之ト、御間柄之一筋を以思召寄

を不殘被仰聞事ト間、大隅守殿外者曾ル沙汰仕間敷旨

再返御直ト被仰下ト付、段々御懇之思召寄大隅守に申

聞候ハ、別ト委存申トル可有御座ト、罷歸右趣委細

可申聞旨申上御暇仕ト、

一 右之通讚岐守様段々御丁寧之思召寄共不殘被仰聞ト趣

達 貴聞ト處、御分知等被成不來ト之儀、最前御請之

書付爲被書加事ト得共、右之段者被相除一通り之御請

可然と被 思召上、重ル右之趣讚岐守様は御内談爲被

候得共、讃岐守様より何角と御氣を被附原思召寄段、

御懇之御事御尤之儀被思召上^{厚也}外條、御分知不被成來段

奉弥此節口達之御書付^二可被仰出置^レ、左^レハ、最

前讃岐守様御内見^二被入置^レ去方様より之御案文を本

ニ仕、御案詞可相調旨被仰付^レ付、御意之通去方様

より之御案詞を以御口達書付之下書相調 太守様懸御

目候處、其通宜敷被思召上^レ外、尤讃岐守様^ニ以御手

紙思召寄之御禮且又右御書付之御案紙^ニ爲御納得可被

遣由^二御手紙と御口達書付一所^二のり付^二被仰付、

御留守居を以被遣^レ處、爲入御念御事^レ、口達御書付

者直^二彼御方^レ被召留置^レ由、御手紙を以御返答被仰

進^レ、

一 去御方様^ニ及最前御分知不被成來段御書入被遣^レ御案

紙を以、廿八日御請被仰上^レ旨私共より申上^レ得共、

右之通相替^レ付^レ者其趣及申上^レ可然と申談、先日御調

被下^レ御案詞之内、分知不仕來由之趣御書加被下^レ御

案詞^ニ廿八日被差出^レ段申上^レ置候得共、今一通御

調被下置^レ御請一通^レ之御案紙を以、此節ハ御請迄を

申上、分地不致來と之趣ハ別紙^ニ口達書付^二差出^レ答

ニ罷成^レ、口達之書付案紙爲御心得懸御目^レ由、是又

私共より申上^レ處、右之子細申上^レ段入念儀^レ、成程

左^ニ奉可有之儀^レ、乍然御分地不被成來段被仰上^レ御

書付^者、少^ク 思召寄有^レ之^レ由^ニ御取直被遣、必此

通御認被差出度旨被仰遣^レ得共、此案詞^者一入御分地

不被成來譯を猶^ク強^ク被仰立^レ付^レ御紙面^ニ相見得申

候、殊更讃岐守様^ニ御内意迄及相濟、其上最早諸書付

丹波守様^ニ御渡被成候跡之事候得^者、不及其沙汰被扣

置^レ、依之去御方様^ニハ最早諸書付等不殘丹波守様^ニ

御渡被申^レ付^レ、只今より引替^者不罷成由首尾迄を申

上置^レ、

一同廿七日丹波守様御招被成、先達^レ被蒙 御内意候御

請明廿八日左近將監様^ニ被仰上^レ度^レ、右付^レ者 總州

様より及口達^ニ御禮被仰上^レ度^レ條、此段及左近將監

様^ニ被仰進被進^レ様^ニと

太守様より御直^ニ御頼被仰達、御請其外之御書付迄丹

波守様^ニ御渡被成^レ、

一同廿七日水野壹岐守様^ニ及御請之書付并御屋鋪狹有之

段、且又御分地等不被成來との御口達書付二通共全致

持參懸御目、廿八日被差出^レ段を及申上^レ處、何ぞ

思召寄及無御座^レ、御分知之儀^者今迄御家^ニハ無之事

ハ哉之旨御尋被成付、成程只今迄分知仕ハ儀者無御座由申上ハ得ハ、左ハハ、弥廿八日被差出ハ可有之通御挨拶有之御暇仕ハ、

一同廿八日朝左近將監様に丹波守様御越被成、御請之御書付御直ニ被差出ハ處、被御覽届首尾能御請被仰上頂上之儀被思召候由被仰ハ、左ハハ

總州様より之御禮之儀及被仰達、其跡ハ御屋敷差迫ハ趣、且又御分知不被成來儀をも御口達ハ被仰達、爲御覺書付持參被成候由ハ、二通之御書付御屋鋪坪付相添被差出候處、得と御覽被成、此三通及先御請取被成ハ由ハ、左近將監様御挨拶随分御快御様子ハ御座ハ旨、則日丹波守様御出候ハ 太守様ハ首尾被仰達ハ、此節被差出ハ御請之書付并御口達書付二通御屋敷坪付迄差越ハ、

一同晚去御方様より以御手紙内々之御請一通、此外之御書付奉拜見、随分殘所無御座宜奉存ハ、則今朝左近將監殿御書付不殘御前ハ御上被成ハ、被 仰出等之御沙汰表御座ハ、追而可被仰聞旨私共三人ハ被仰越候、

右段々之次第ニ御内々之御請相濟候間、右之趣

總州様ハ可申上旨 御意ハ、左候ハ今日表立ハ

御入興之儀被 仰出、恐悅至極奉存ハ、右付ハ老別紙委細申越ハ、以上、

六月四日 平岡内匠

伊集院藏人

嶋津 全

嶋津將監殿

嶋津大藏殿

嶋津中務殿

樺山主計殿

種子嶋彈正殿

比志嶋隼人殿

2238 竹姫君様御入興之儀付ハ、從

一位様 總州様ハ御老女衆御文ハ被蒙 仰、右ニ付ハ

總州様より御請之御文先比飛脚便より被差越、段々御意

之趣被申越承知仕ハ、 太守様より左近將監様に御請

書、先月廿八日被差出ハ故、

一位様御方ハ 總州様より御請之御文之儀及、同日 大

御前様より御添文を以佐川ハ御使被仰付西之丸ハ罷登秀

小路様ハ差上ハ處、佐川事目出度御使相勤ハ由ハ御料

理被下 御目見拜領物被仰付、御請首尾能相濟申り、

右付の佐川より勤書別紙之通差出り故、寫二通差越り條
以御序 總州様可被達 御聽り、此段申越り、以上、

六月四日

平岡内匠

伊集院藏人

鳴津 左

鳴津將監殿

御家老中

比志嶋隼人殿

吉貴公御譜中

此一書雜豊公御譜中ニ有之

寫正文在文庫

秀小路さま御返答御出被成

一位様より今日は 上總介殿御返事御持せ被成りとて
御使御あけ被成、則御文も御一覽あそハし、御そく才
ニ益之助殿もきけんよくせいじんの御事、さて又此度
の御事 上總介殿より如何御返事かと御心元なく思召
り處、早速御聞届すら〜と御請文御あけ、如何程御
満足目出度思召り、奥さまも猶又能く御満足之通表こ
ま〜御申届被成り様御頼思召り、此段よく申せとの

よし秀小路さま被仰り、

一 無存掛私 御目見被仰付り、御近くの御目通りにて致
拜領物、立之時分御直之上意ニ歸りハ、御満足の
たんよく心得申せとの 上意ニ御座り、御老女さま方
まで自分の御禮頼上り、誠にみやうかに叶ひ大切之御
目見いたし有かたく存上り、

一 朔日ニ目出度御ふみにて御看一折御上りやうにと音羽
さま御差圖にて、直ニ秀小路さまもなる程目出度御上
被成り様ことの御事ニ御座り、

一 御禮文老明日不苦と音羽さま御差圖にてり、

一 梅園さま御出被成り、此度御請如何と御内々申進度
程ニ御座り、早速被仰上一段之御事御三家さま方之
御断老御尤ニ御座り歟、

姫君様御事ハ

(編 吉) しゃうけん院様姫君様ならせられ

(養 吉) 養仙院様も御兄弟分に入らせられ

(家 意) 文照院様御妹さまにてり得ハ、直ニ天下之姫君様にて
りハ、末〜まで御家之御記録にも留り、くるしか
らぬ事、第一御家ニ御遠さかり被成事 上にて御氣之
とくに被思召り御事にて御座り、此事ハ

公方様御たのミ之上其元より文とも御直ぐの御覽に入申事にて御座り、何事も此後は御輕被成り敷よく御座りとの御噂にて御座り、以上、

朱カキ
享保十四年 五月廿八日 佐川

此書モ慈豊公御譜中ニアリ

一位様は御口上秀小路さまに申上り兩通御文も直ニ御請取 御前には御持參、一時過此御返事御持御出被成、それより御料理いたゞき、ひさぐまたせりまゝ御庭拜見いたしり様ニ 仰付られり、目出度御使相勤り付御目見仰付られり半まゝ、暫待り様ニと仰付られり半と秀小路様仰られ、夫より出外へハ、早晚 御目見仰付られり座より二間入り得との御事にて 御目見申上りへハ、山路様御目錄御持 御目通にてちりめん二卷拜領仰付られり、御禮明日文にて 御前様より仰上られりやうにとの御事ニ御座り、今日は殊外之御取持にて歸り有かたくそんし上り、

一秀小路さま此後は御用にてたひぐめしり半まゝ、そく才ニつとめりやうニ御本丸にも定ぬ節々御用ニ付上りり半との御事ニ御座り、

五月 佐川

全御譜中
正文在文庫

幾久しく萬ぐ年もといわる思しめしり、何もよく御心得申せとの御事ニ御座り、なをぐめてかしく、一位様より申せとの御事ニ御座り、まつぐ一位様御機嫌よくならせられりまゝ御心易思しめし被成りへぐり、御手まへさまにも御ふしの御事ニ御座被成り哉、きかせられたく思しめしり、さてハ此度大隅守殿への御縁組御首尾よく仰出されかすぐめて度思しめしり、御祝遊し此御目錄之通御手前さまへ參らせられり、誠にめてたくかしく、

朱カキ
享保十四年

あ

松平 秀小路
上總介さま 梅その
人々御中 さへらひ

吉貴公御譜中
正文在文庫

継豊公御譜中

今度 御内意之儀ニ付 總州様思召之趣木村四郎左衛門
〔朱〕
「本文之趣得其意達 貴國置候 以上」
ニ被仰進、四郎左衛門より 太守様に申上、其趣私共
に委細承知仕、且又 總州様より相良源太夫（長み）を以四郎

なをく御手まへさま弥御無事の御事ニ御座被成り
半とめてたく思しめしり、すなはち御請の御返事上
覽ニ入させられり御事ニ御さり、めてたくかしく、
一位様より申せとの御事ニ御座り、まつく
一位様御機嫌よくならせられりま、御心安しめし被
成りへくり、さやうニ御座り得者、先月比御手前さまへ
仰被遣り御事御請御吉左右仰上られ、數く御満足ニ思
しめしり、扱は此御目錄之通御いわる被遊りて、御手ま
へさまへまいらせられり、誠にくいく久しく萬々年も
御めてたさのミまいらせられり半と祝思しめしり、めて
度かしく、

朱力キ
享保十四年

松平

上總介さま

人々御中

梅園 櫻井

秀小路

お

左衛門に被仰付、私共は 御意之趣段々奉承知御尤奉存
り、先右之御請御自分迄申上り間、以御序何分委御申可
被下り、以上、

六月四日

〔朱〕
「上」

平岡内匠

〔朱〕
「六月廿一日」

伊集院藏人

鳴津 柰

〔朱〕
「下」
比志嶋隼人殿

御返答

一木村四郎左衛門事御内用之儀付御使被仰付被遣り處、
總州様思召之趣ハ先達る飛脚便委細被申越り、四郎左
衛門事先月十日其元被差立、右付る從
總州様御返答之儀者、飛脚便之趣ハ何ぞ相替儀無之、
御同様之御返答被仰進、四郎左衛門事先月廿八日晚致
到着、右御返答之趣則申上り、
一四郎左衛門若船中相滞りハ、様子次第致陸下り様ニ
と申付、可然旨
總州様御意外故、其通被申渡り由、然共船中相滞り儀
委無之故不及其儀外、

一四郎左衛門事現人數之分者急料被下、現人外者靜料被

下、尤通し駕籠ニ差越候段表得其意外、

右及御返答外、以上、

六月四日

平岡内匠

伊集院藏人

嶋津 左

嶋津將監殿

御家老中

比志嶋隼人殿

2246 繼豊公御譜中

享保十四年六月四日繼豊應レ徵登レ營候ニ于大廣間ニ

矣、執政酒井讚岐守忠音使レ松平一學附目傳ニ於繼豊ニ而

至ニ于白書院緣類ニ也、執政忠音出而豫指ニ南今日之事ニ可

嗚也、其事終而復ニ初席ニ、於是應ニ一學之言ニ候ニ于黒書院

緣類ニ也、若年寄本多伊豫守忠統郷導而至ニ于御座之間次ニ

執政列居焉、就レ中戸田山城守忠眞被レ傳下可レ結ニ婚姻於

竹姫君ニ之旨上先レ是享保八年癸卯四月二十一日娶ニ松平民部大輔吉元、女ニ然同十二年丁未三月二十日病卒、故有二斯台命

即就ニ忠眞ニ禮ニ謝之、執政一同述ニ祝詞、又應ニ執政水野

和泉守忠之之言、候ニ于御座之間緣類ニ矣、然

大樹吉宗公

臣相家重公出ニ御于御座之間、於茲繼豊入ニ于闕内ニ謁ニ

兩公ニ奉レ謝レ命ニ婚姻ニ也、執政酒井忠音奏ニ達之、

大樹公親召ニ御前ニ蒙ニ尊詞、且御手自賜ニ髮斗ニ恩

遇寵待殊篤矣、繼豊退席至ニ白書院、乃執政忠音授下與所レ

命之書一通婚期家作賜レ信之義於繼豊上、則拜ニ戴之、踵而執政松平

左近將監乘邑附下與所レ命之書一通入與之後雖レ生三男子、以ニ去歲

於繼豊上、則拜ニ受之、謝禮畢、而辭レ營直登ニ西城ニ、

於帝鑑之間ニ就ニ奏者番松平玄蕃頭忠曉ニ奉レ謝レ命ニ婚姻ニ

之辱上乃退去矣、委見ニ于後、

2247 全上

正文在文庫

御用之儀外間明四日四時可有登 城外、以上、

六月三日

酒井讚岐守(忠音)

松平左近將監(乘邑)

松平大隅守殿

水野和泉守(忠之)

2248 全上

今日御用之儀、間可致登、城之旨、昨三日奉書到來、今五半時登、城大廣間に扨居、酒井讚岐守殿可被爲逢、間、可罷通旨、御目附松平一學殿より被相達、付、御白書院に通縁類に扨居、讚岐守殿被出會、今日之御用、屹と奉難申、得共、御入興之儀被、仰出答、其段、御座之間、次、同役之内より可被相達、其後、於御座之間、御禮披露、讚岐守殿被相勤答、上意有之、御節之次第、御暇被、仰出、御節之通、可相心得、御熨斗頂戴可有、其外、段々心得成、儀共委細に被教示之、御城退出以後、直老中方に可相越、之由をも心入を以被示聞、

一 右終、又大廣間に扨居、重、一學殿被出向、可罷通之旨、被相達、付、御黒書院縁類に扨居、得者、若年寄本多伊豫守殿案内、段々丁寧之引進、御廊下邊、扇子等差置、場所之儀迄懇被申聞、御座之間、御次、罷通、御處、老中衆列座、戸田山城守殿より竹姫君様御縁組被、仰出之旨、被申渡、付、難有奉存、付、通山城守殿に御請御禮申上、外之老中衆に、難有奉存、付、旨、致式對、得者、何れ、及より一同に祝詞被相述、夫に扨居、旨、水野

和泉守殿より被相達、付、御縁類に扨居候、

一 公方様、大納言様出御、御座之間、闕涯、御禮、讚岐守殿披露、夫にと之、上意有之、闕之内に入御禮、直着座、讚岐守殿より、竹姫君様御縁組被仰出、難有奉存、旨、言上、其節縁組目出度との、上意有之、老中衆より、難有奉存、付、通、一同に被申上、重、

上意有者、於國許上總介に、及息災ことの御事故、老中衆に、向、御禮申上、得者、難有奉存、付、是又一同に言上、有之、御熨斗、御前に上、付、御次之間、下り脇差を取本之席に、出居、御處、御手自御熨斗御扱被遊、付、御上段に進、致頂戴復座、老中衆に、向、御禮申上、得者、讚岐守殿より、難有奉存、付、旨、被及言上、付、御禮申上、退座、

一 大廣間に扨居、御處、又、御白書院に可罷通旨、大目附興津能登守殿より、被相達、付、罷通、得者、御廊下、老中衆列座、御縁組之祝詞被相述、付、相應、致式對、今日御縁組被、仰出、於、御前段、難有被仰付、始終之御禮申達、御處、讚岐守殿より、今度御縁組被、仰出、付、此通被、仰渡、由、御處、書付一通被相渡、付、一覽、得者、御入興時節、并家作等之儀、且、當秋御暇被、仰出

間敷と之御事外故、則御請御禮申上外、引次ニ松平左

近將監殿より先頃鳥居丹波守ニ有口達願之趣達上

聞、此通被仰渡外由ニ有書付被相渡外付披見外處、

御入與有之男子出生外共、去年妾腹ニ出生之男子を嫡

子ニ可致旨御内意ニ付、丹波守ハ口達之趣承届外、

家法之通可爲了簡次第との趣ニ付、是者二男以下分地

等不仕、倍臣ニ致來外家格ニ付段、先達外丹波守ニ有

委細申出置外、右ニ付有之御返答ニ付故、直御請御禮

申上退出之砌、讃岐守殿より被相達儀有之由ニ有、一

人被相殘、御入與御用係之儀左近將監殿ハ被仰付外、

向後同等之儀彼方ハ可相達旨被申聞外付、委細得其意

外、且又西之丸ハ爲御禮登城外儀御差圖者無之を得

共、罷出御禮申可上哉之旨讃岐守殿ハ相尋外處、其通い

たし可然との答ニ有外故、今日之儀始終共御世話御丁

寧之御引進を以萬端首尾好相仕舞忝存外段申述退出、

一西之丸ハ登、御目附朽木五郎右衛門殿ニ有案内申入、

帝鑑之間縁類ハ御奏者松平玄蕃頭殿被出合外付、今日

御縁組被仰出、於御前段、御懇之上意、其上

御手自御髮斗頂戴難有奉存外旨御禮申上外處、御序次

2250

全上

正文在文庫

竹姫君様御入與有之男子御出生外共、去年妾腹出生之男

子を嫡子ニ可被致旨御内意付有、鳥居丹波守ハ口達之

趣承届外、家法之通可爲了簡次第外、以上、

2249

新太郎殿被相詰外、

右者此度於御城御縁組被仰出、御本丸西之丸

ニ有之勤右之次第外條無違失様可記置者也、

享保十四年六月四日 繼豐

全上

正文在文庫

竹姫君様御入與有之儀、當冬中御調外様ニ被思召外、

就夫普請等被申付ニ不及外、有來外内證向之家作を被

用、竹姫君様御座所計新規ニ可被申付外、萬端事輕

可被取計外、一當秋國許ハ之御暇者被仰出間敷外、以上、

〔享保十四年〕六月四日

〔在口奥〕
松平大隅守ハ

(朱) 「享保十四年」六月四日

(朱) 「在口裏」
松平大隅守江

2251

全上

正文在文庫

今日

竹姫君様御縁組被 仰出付

御本丸 西御丸に隠居上總介獻上物仕、以使札御禮申上

度可奉存付、此段如何可申遣付哉奉伺付、以上、

(朱) 「享保十四年」六月四日

松平大隅守内

相良彌一長兵衛

(朱)

「御張紙」
以使札御禮可被申上付、獻上物之儀者追而可相

達付、

(朱) 「在口裏」

隠居上總介方御禮之儀伺

六月四日
松平大隅守家來

2252

宗信公御譜中

同年六月四日因二

大樹吉宗公台命一、嚴父繼豐結二婚姻於竹姫君一、是

前大樹綱吉公之養姫、實清閑寺大納言熙定卿女也、

2253

宗信公御譜中

正文在文庫

御記錄奉行江

益之助様御誕生前御産所并御奥御書院御栖居替相濟、御
移徙之日護摩所安養院江申渡、去年三月廿六日於御奥御
講讀相動付、然處御路地見廻罷居付長屋之上、羆羽飛
來とまり居付を、御路地番黒江文六見當り、珍敷事と存
見付處、右之羆屋ねをおり下り付付、與風小キ竹に鳥も
ちを付なけかけ付得ハ羽二投付、文六其外之者共差寄取
得付ぬ、御路地見廻石原碩齋申出付付、早速御路地地藏
に被入置付、時節柄御吉事之事付故羆繪形寫差越、右之
段去年四月二日御使便二御國元江申上付處、右之趣
太守様達 貴聞

總州様 於須磨様江表達 御耳付處、時節柄御吉事と御
滿悦被思召、五月朔日 於須磨様江風 御本丸江被遊御
入、羆之繪表具被仰付、御床江被掛 太守様より御祝被
遊付、左付ぬ當正月益之助様御用御破魔弓御用羆之羽御
國元より小細工人篠原藤助持登り付處、少々羽致不足御

御太刀
卷物二十

大隅守より

〔朱〕
「享保十四年」六月 松平大隅守
公方様は 大納言様に献上物并此外贈物等、且又同氏上總
介御禮献上物等之品何分ニ及御差圖可被下り、奉頼り、
以上、
就夫御序之節御禮申上り様奉願り、其節
仰出、不存寄難有仕合奉存り、
竹姫君様御入興之儀被

繼豊公御譜中
正文在文庫

此度

買入ニ罷成善り處、地藏ニ被入置り霧之羽かわしりを碩
齋取置り由ニ差出、御國元より藤助致持参り羽ニ少々
不相替り付、御破魔矢羽之御用罷成り、右之段別る御吉
事之儀り故、右之次第書付渡置り、以上、
〔朱〕
「享保十四年」六月 嶋津 杵

白銀五拾枚
大納言様は

御太刀

卷物二十

白銀三拾枚

右之通可有献上り、

三室 豊岡 高瀬 外山 尾上 藤野 岩野 岡野
同三枚充

右之通可被相贈り、

公方様は 上總介より

御太刀

卷物二十

白銀三十枚

大納言様は

御太刀

卷物十

白銀三十枚

右者於國許承知之上以使者可有献上、

^(本)
〔在口裏〕

竹姫君様御入興被仰出付、御禮願并献上物伺

六月十四日

松平大隅守

全上

正文在文庫

一 小次郎様 ^(田安小武) 小五郎様 ^(二橋宗尹) 及献上物可仕外哉、

一 一位様 月光院様 瑞春院様 養仙院様 及各別之儀

外間献上物可仕外哉、

但 一位様は若從内へ献上物仕來外、此度若表立献上

物可仕外哉、

右献上物御差圖可被下外、以上、

^(本)
〔享保十四年〕 六月

松平大隅守

^(本)
〔御差紙〕

小次郎殿 小五郎殿に被差上物に不及外、

^(本)
〔御差紙〕

御女中様方に被差上物に不及外、

一位様は御内へより被差上物へ可爲勝手次第外、

^(本)
〔在口裏〕

小次郎様 小五郎様御女中様方に献上物伺

六月十四日

松平大隅守

全上

正文在文庫

竹姫君様御入興被 仰出外御禮申上外節、同姓益之助儀

若幼少、其上

御目見え不申上事御座外故、献上物仕外に及申間敷外哉、

従同姓上總介妻若 公方様 大納言様に從御内へ献上物

仕來、且亦從

公方様拜領物及被 仰付事外間、献上物爲仕度奉存外、

左外若此節若各別之儀外間、表立る献上可仕哉、此段御

差圖可被下外、以上、

^(本)
〔享保十四年〕 六月

松平大隅守

^(本)
〔御差紙〕

益之助より伺之通献上物に不及外、且又上總介妻女よ

りも表立被差上物ニ不及リ、御内々より被差上リ儀ハ可爲勝手次第リ、

〔在口裏〕
同姓益之助・上總介妻より献上物伺

六月十四日
松平大隅守

同上

正文在文庫

竹姫君様御座所計新規普請〔請脱カ〕可申付旨御書之趣委細承知仕
外、

一 只今迄之内證向殊外手狭ニ有、此度御座所計新規普請申付リ有及、御格式有之御儀、又者御附之衆詰所并部屋差夫々無之リ有者可難成と奉存リ、御栖居餘御手狭ニ有者御不自由ニ及可被成御座リ、其外女中衆及御相應可被召列リ得者、彼是以只今迄之内證向之作事ニ有者難差置、兎角新規普請不申付リ有者難成奉存リ、先當分内證向栖居之繪圖掛御目リ、

一 御屋形向之儀繪圖等仕可得御内意候得共、被召列リ女中衆夫々之席大概女中衆之人數、又者御附之御役人衆人數次第普請可仕儀御座リ得者、手前ニ有者何分ニ及難考御座リ、何方ニ承合可申哉御差圖次第其向ニ申談、

先繪圖等申付相伺申度リ、

一 御入興付有之御用之御道具等之用意、此等之儀何方ニ承合可申リ哉御差圖被下度リ、

右差懸リ故先相伺リ、此外之儀者追々相伺可申リ、以上、

〔朱〕 「享保十四年」六月 松平大隅守

〔朱〕 繪圖ニ有相達リ趣を以、可被取計リ、女中人數并部屋
〔御取紙〕
〳等之儀者大久保下野守〔忠位〕ニ可被承合リ、

〔朱〕 松平加賀守方被承合、其趣を以可被相伺リ、品により
〔御取紙〕
大久保下野守〔忠位〕にも可被承合リ、

〔朱〕 家作之儀ニ付伺 六月十四日 松平大隅守

継豊公御譜中

今茲三月十六日因執政之奉書、繼豊代于土州高知山城
〔山内大〕
主松平民部太輔豊教ニ勤増上寺鎮火番、今般有令
竹姫君一伉儷於繼豊之台命、故今歲六月十六日免鎮
火番一也、且先是有台命、而令諸侯伯一應采地田

定_レ數上_二米於_一 公慶_上、同日降_レ命許_二二年分上米_一、是亦依_レ命_二婚儀_一也、委見_二于後_一、

繼豊公御譜中

正文在文庫

竹姫君様御入輿儀被_レ 仰出候付、増上寺火之番被成御免_レ、

〔朱〕
「在口裏」
松平大隅守 江

全上
正文在文庫

竹姫君様御入輿之儀被_レ 仰出候付、二ヶ年分之上ヶ米被_レ 遊御用捨_レ、

松平大隅守

但當秋より亥春迄四度之分被遊御用捨_レ、

〔朱〕
「在口裏」
松平大隅守 江

竹姫君様當冬中可爲

〔朱〕
〔御張紙ニ而、但馬守 事勝手次第參府候様可被相連候〕

全上

御入輿旨被_レ 仰出_レ、就夫同名之一家無御座_レ間、鳴津〔忠應〕但馬守致參府_レ様仕度奉存_レ、何分_二及御差圖可被_レ下_レ、以上、

〔卷〕
「享保十四年」六月十五日 松平大隅守

全上

竹姫君様當冬中 御入輿被仰出_レ、就夫大隅守同苗之一家無御座_レ間、鳴津但馬守致參府_レ様仕度旨奉伺_レ處、

〔朱〕
〔御張紙ニ而
勝手次第參府_レ様可相違旨被仰渡_レ、依之右之段但馬守
致承知_レハ、早速飛札を以御受可申上哉、又若但馬守
上ノ公或共勝手次第可被致候〕

致承知_レ段到來_レ節、大隅守_方御受可申上哉、右兩様之趣何分_二及御差圖次第可仕_レ、此段奉伺_レ、以上、

〔朱〕
「享保十四年」六月「十七日」 松平大隅守内
相良彌一兵衛〔長〕志

全上
正文在文庫

大隅守御縁組被_レ 仰出候付御禮申上_レ節、花色帷子・か〔朱〕ちん長上下着用仕_レ可可有御座_レ哉、奉得御差圖候、以上、

上、

〔朱〕享保十四年〕六月「十七日」

松平大隅守内

相良彌一兵衛

繼豐公御譜中

正文在文庫

明廿一日四時登城、此度之御禮可被申上外、御本丸
相濟次第 西丸江表可有出仕外、以上、

〔朱〕享保十四年〕六月廿日

酒井讚岐守

松平左近將監

水野和泉守

松平大隅守殿

2266 繼豐公御譜中

同年六月二十一日繼豐應レ徵候于大廣間一矣、執政酒井
讚岐守忠音使レ石野八太夫御目附傳ニ於繼豐ニ而至于于黒書院上
也、忠音出席豫懇教ニ誨今日所レ謝之次序一、其事終而候ニ
于黒書院廊下一矣、於是

大樹吉宗公出ニ御黒書院、繼豐拜ニ謁 台顔ニ獻ニ上御太刀
一腰・縮緬二十卷、馬代白銀五十枚一、奉レ謝ニ議婚既定一、
内藤丹波守政森奏ニ達之一、繼豐退席著ニ座下段闕中一、則

老中各執ニ奏繼豐之謝言一、時

公加ニ懇篤之 尊言一、繼豐乃向ニ于老中一奉レ謝ニ恩言之

辱一、而後引渡雜煮吸物土器星物等出而親召ニ 御前賜ニ

盃酒一、御手自拜ニ戴熨斗一、且賜寶刀一腰治工具宗代、金二百枚、執政

忠音執ニ次之一、既謝禮畢、而辭ニ 本營一、直登ニ 西城一、

候ニ于大廣間縁類一、就ニ牧野駿河守忠壽發者禮ニ謝之、乃

松平能登守乘堅若年為ニ鄉導一、於ニ御座之間一拜ニ謁

大納言家重公一、獻ニ上御太刀一腰・縮緬二十卷・馬代白

銀三十枚一、奉レ謝ニ前件之旨趣一、執政安藤對馬守信友執ニ

奏之一、

公亦降ニ 尊言一、御手自賜ニ熨斗一繼豐就ニ執政信友一奉レ

謝レ之乃退出矣、委見ニ于後一、

2267 正文在文庫

〔朱〕

〔右表題〕

御禮之次第
御黒書院

松平大隅守

以進物御禮御次江退座、重而出席御下段御右之方ニ着座、

御盃

御引渡

御雜煮

御吸物

大隅守に及引渡雜煮吸物出之、

星之物

御酌

御加

御盃被召上之、其御盃三方ニ戴之御酌扣有之、大隅守出座之時御次に立、小サ刀取之、御盃頂戴之節先御酌之方に會釋被有之、其後 御前之方被伺ひる頂戴、御着被下鉈付被有之、此時御道具可被下り、老中取次頂戴、御次に退座有之の帶之出座御禮、御次に被退、御道具取之小サ刀帶之出座、加有之盃を持御次に被退時老中取之三方ニ載之、御酌に渡之、其盃 御前に御取被遊り節出座、御禮有る復座、御鉈子入御膳部引之、早の御禮被有之相濟、

絳豊公御譜中

正文在文庫

今日登 城此度之御禮可申上旨、昨廿日奉書到來、今六半時登 城大廣間に扣居り處、御目附石野八太夫(範種)殿

被出合式對有之り、

但今日之御禮付、鳥居丹波守殿・小野次郎右衛門殿

事及登 城始終被詰居り、水谷彌之助殿(勝忠)も御番

ニのり得共、御禮相濟り迄被見合居り、御目附本

多彌八郎殿御同朋頭原田順阿彌事及被出合、用事

等可相辨之由丁寧之儀共ニる何角及世話り、

一奏者内藤丹波守殿・高木主水正殿兩人之引請ニのり、(森改)

一御禮以前酒井讚岐守殿可被爲逢り間、可罷通旨八太夫

殿を以承り付、御黒書院に通り得者、讚岐守殿被出合、

御禮之次第先日左近將監殿より被相渡り次第書之通替

儀無之り、御腰物頂戴之節御取次讚岐守殿被相勤儀及

可有之り、右御腰物御盃頂戴之いたし様、其外於御座

始終之次第委細懇ニ指南有之り付謝禮、御廊下に出扣

居り、

一出御黒書院下段ニ献上物相備、引次御太刀内藤丹波

守殿持出、御前に被備之、其時御縁類は出、御禮披

露有之り引入、左りる献上物不殘御勝手は被引取之、

一讚岐守殿引進ニる重の御縁類は出御禮申上り節、それ

へとの 上意有之、讚岐守殿よりはへと被申通り付、

闕之内御右之方は着座御禮申上り得者、老中衆一同ニ

御禮申上、難有奉存_レ由被及言上、目出度との 上意有之付、老中衆_ニ向難有奉存_レ由申達_レ得_レ者、御禮申上_レ由重_ル及言上_レ、

一 御土器上、續_ル御引渡上、御雜煮御引渡_ニ引替上、ひれの御吸物御雜煮_ニ引替上、此方_ニは_レ者御引渡、以下御同然之次第_ニる頂戴之、

一 星之物御盃臺上、續_ル長柄之御銚子御加上、

公方様御土器御取上御加有之、御酌被_レ扨居_レ内、御次_ニ下_リ、小サ刀を取闕外_ニ出懸_リ相_レ扨_レ處、讚岐守殿よりあれへと被_レ申_レ付、直_ニ御三方之涯_ニ差寄御禮申上、御酌之方見合_レ得_レ共、御盃_ニ無構向_レ被_レ見_レ詰居_レ故、御前_ニを相_レ伺_レ處、はやふくと 上意_レ付御禮申上、御三方之御土器を取頂戴御銚子戴_レ之_レ時、御

手自御看被_レ下_レ付、御側_ニ進_レ致頂戴之復座、御土器取上_レ得_レ者、讚岐守殿御腰物を持出拜領と被_レ述_レ付、差寄頂戴、御次_ニ下_レ拜領之御腰物を帶、御縁類_ニる御禮、

其時讚岐守殿より御禮申上_レ旨披露有之、御次_ニ下_リ小サ刀_ニ差替 御盃頂戴之席_ニ進、御土器取上_レ節御加有之、御土器御下段闕邊迄持_レ下_レ之_レ處、讚岐守殿被_レ差寄 御前_ニ可_レ差上_レ由_ニる御土器を請取、三方_ニ載御

酌_ニ被_レ相渡 御前_ニ御土器御取上被_レ遊_レ付、御下段闕涯迄す、み御禮申上最前着座之所_ニ復座、

一 御盃其外御膳部下_ル、少

御前_ニ之方_ニ進_レ列座之老中衆_ニ向、段々難有奉存_レ旨相述_レ得_レ者、御禮申上_レ通_ニ同_ニ言上_レ有_レ之_レ付、御禮申_レ由退座、

一 御白書院御縁類_ニ可_レ差_レ扨_レ旨讚岐守殿より八大夫殿を以被_レ相達_レ付、扨居_レ得_レ者、老中衆列座_レ付今日御禮申上_レ處、於 御前御規式被_レ下_レ蒙御懇之 上意御盃頂戴、御道具拜領難有仕合奉存_レ旨御禮申述_レ得_レ者、從各表今日_ニ者萬端首尾能有_レ之目出度との式對_レて退出、

一 西之丸_ニ登_レり_レ處、大廣間_ニ御目附水野采女殿被_レ出合、且御同朋頭大嶋榮阿彌・奥山三阿彌被_レ出合、御禮之儀_ニ者奏_レ者衆_ニ可_レ申上_レ由_ニて、采女殿案内大廣間内御縁類_ニ通_レ得_レ者、奉_レ者牧野駿河守殿被_レ出合_レ付、於 御本丸段々之次第御道具拜領之儀迄委細_ニ御禮申上_レ通相達_レ處、以御序可_レ被_レ達 上聞由_レ、大目附鈴木飛彈_{（雜利）}

守殿_ニ表被_レ出合_レ、左_レの安藤對馬守殿可_レ被_レ爲_レ逢_レ條、杉戸涯_ニ可_レ扨居_レ旨采女殿より被_レ相達、右之所_ニ扨居_レ處、對馬守殿被_レ出合互式對有之、追付 出御 御目見

被仰付 上意表可有之、御手自御熨斗頂戴外事及可有之、惣此程御本丸御座之間ニ御縁組被仰出外節之通替儀無之、其通可相心得旨被告知外、此所ニ若年寄松平能登守殿被出向、丁寧之引進ニ御座之間、御次廊下ニ案内、追付 大納言様 出御、對馬守殿奏者ニ御座之間御縁類ニ御禮披露有之、それへと上意、御下段闕之内御左之方ニ着座、御禮申上候節、對馬守殿より御縁組之御禮申上難有奉存外旨被申上外處、目出度との 上意有之付、對馬守殿ニ向、難有奉存外旨相述外得者、御禮申上外由言上、此時御熨斗上、御次之間ニ下り小サ刀を取出席、御手自御熨斗頂戴之、直御下段ニ下り對馬守殿ニ向、段々難有奉存外旨申述外時、御禮申上外と言上有之付、御禮申外退座、御座次之間ニ扣居外處、對馬守殿被相下外付、右段々之次第難有奉存外旨御禮申上外得者、以御序可達 上聞外、今日者萬端首尾能目出度由對馬守殿挨拶有之致退出外、

右者此度御縁組被 仰出外付

御本丸西之丸ニ御禮申上外次第右之通外、聊無違失様可記置者也、

享保十四年六月廿一日 繼豐

2269 全上

今日松平大隅守御縁組之御禮申上候處、蒙 御懇之上意御饗應被 仰付、御盃頂戴、其上御道具拜領仕、且亦西之御丸ニ爲御禮登 城仕外處

大納言様御目見被仰付蒙 御懇之上意、御手自御熨斗

頂戴仕外、右之段隱居上總介承知仕外上、御禮之儀者如何可仕外哉、此段奉伺外、以上、

〔朱〕
〔御披紙而 便札可被差越候〕

〔享保十四年〕六月「二十一日」 松平大隅守内 土岐半助

全上

2270 全上

昨廿一日松平大隅守御縁組之御禮申上外付、西之御丸ニ爲御禮登 城仕外處、御目見被仰付蒙 御懇之上意、御手自御熨斗頂戴仕外、右之段隱居上總介承知仕外上、御禮之儀者如何可仕外哉、此段奉伺外、以上、

〔朱〕
〔享保十四年〕六月「二十二日」 松平大隅守内 肥後藤之丞

2271

全上

〔御腰紙〕
御本丸に被差上り使者、西丸を及相兼使札可被差出
外、
端午之 御内書可相渡外間、明日五半時 御城江家來可
被差出外、以上、

〔朱〕
「享保十四年」六月廿四日 松平左近將監

松平大隅守殿

2272

全上

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉
球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐
々謹言、

〔朱〕
「享保十四年」六月廿六日 忠音判

〔朱〕
〔在口裏〕
松平大隅守殿

〔朱〕
〔在右裏〕
酒井讚岐守

忠音

2273

全上

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・泡
盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹
言、

〔朱〕
「享保十四年」六月廿六日 信友判

〔朱〕
〔在口裏〕
松平大隅守殿

〔朱〕
〔在右裏〕
安藤對馬守

信友

2274

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就酷暑之節
公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間
可御心易外、隨而饗節一箱被獻之外、各申談遂披露外處
一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱力字〕
「享保十四年」六月廿六日 酒井讚岐守 忠音判

松平上總介殿

2275

全上

御札令披見_レ、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌被相伺_レ之_レ、益御安全御事_レ間
可御心易_レ、隨_テ齋節一箱被獻_レ之_レ、遂披露_レ處一段之
御仕合_レ、恐_ク謹言、

朱カキ

享保十四年

六月廿六日

安藤對馬守

信友判

松平上總介殿

2276
〔卷〕「雜抄中」

高持成御格式之事

一 高相拂_レ旨取_レ込_レ拜借有_レ之、右引當無_レ之者ハ高直御免不
被仰付事_レ得共、高相求_レ方_レ返上方引請、係合證文
差出_レ者ハ高直御免被仰付、高相直_レ者_レ懸合難成者
ハ、高直御免不被仰付御法_レ得共、高相拂_レ者無據者
方返上方引受、係合證文ヲ以高直之儀願出_レハ、明_ク
吟味之上可被差免_レ旨、享保十四酉六月被相定置_レ事、